



Cisco IOS XE Bengaluru 17.4.x (Catalyst 9200 スイッチ) Cisco TrustSec コンフィギュレーションガイド

初版：2020年11月30日

シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー

<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター

0120-092-255 (フリーコール、携帯・PHS含む)

電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00

<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>

【注意】 シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（www.cisco.com/jp/go/safety_warning/）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

THE SPECIFICATIONS AND INFORMATION REGARDING THE PRODUCTS IN THIS MANUAL ARE SUBJECT TO CHANGE WITHOUT NOTICE. ALL STATEMENTS, INFORMATION, AND RECOMMENDATIONS IN THIS MANUAL ARE BELIEVED TO BE ACCURATE BUT ARE PRESENTED WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED. USERS MUST TAKE FULL RESPONSIBILITY FOR THEIR APPLICATION OF ANY PRODUCTS.

THE SOFTWARE LICENSE AND LIMITED WARRANTY FOR THE ACCOMPANYING PRODUCT ARE SET FORTH IN THE INFORMATION PACKET THAT SHIPPED WITH THE PRODUCT AND ARE INCORPORATED HEREIN BY THIS REFERENCE. IF YOU ARE UNABLE TO LOCATE THE SOFTWARE LICENSE OR LIMITED WARRANTY, CONTACT YOUR CISCO REPRESENTATIVE FOR A COPY.

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

NOTWITHSTANDING ANY OTHER WARRANTY HEREIN, ALL DOCUMENT FILES AND SOFTWARE OF THESE SUPPLIERS ARE PROVIDED "AS IS" WITH ALL FAULTS. CISCO AND THE ABOVE-NAMED SUPPLIERS DISCLAIM ALL WARRANTIES, EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, THOSE OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NON-INFRINGEMENT OR ARISING FROM A COURSE OF DEALING, USAGE, OR TRADE PRACTICE.

IN NO EVENT SHALL CISCO OR ITS SUPPLIERS BE LIABLE FOR ANY INDIRECT, SPECIAL, CONSEQUENTIAL, OR INCIDENTAL DAMAGES, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, LOST PROFITS OR LOSS OR DAMAGE TO DATA ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THIS MANUAL, EVEN IF CISCO OR ITS SUPPLIERS HAVE BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

Any Internet Protocol (IP) addresses and phone numbers used in this document are not intended to be actual addresses and phone numbers. Any examples, command display output, network topology diagrams, and other figures included in the document are shown for illustrative purposes only. Any use of actual IP addresses or phone numbers in illustrative content is unintentional and coincidental.

All printed copies and duplicate soft copies of this document are considered uncontrolled. See the current online version for the latest version.

Cisco has more than 200 offices worldwide. Addresses and phone numbers are listed on the Cisco website at www.cisco.com/go/offices.

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: <https://www.cisco.com/c/en/us/about/legal/trademarks.html>. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1721R)

© 2020 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.



目次

第 1 章

Cisco TrustSec の概要 1

Cisco TrustSec の制約事項	1
Cisco TrustSec のアーキテクチャに関する情報	2
セキュリティグループベースのアクセスコントロール	4
セキュリティグループおよび SGT	4
セキュリティグループ ACL のサポート	5
SGACL ポリシー	5
入力タギングおよび出力の強制	7
送信元セキュリティグループの判断	7
宛先セキュリティグループの判断	8
ルーテッドおよびスイッチドトラフィックでの SGACL の強制	8
SGACL ロギングと ACE 統計情報	9
VRF 対応 SGACL ロギング	10
SGACL モニタモード	10
許可とポリシーの取得	11
環境データのダウンロード	12
RADIUS リレー機能	12
リンクセキュリティ	13
リンクセキュリティ用の SAP-PMK の設定	13
SXP によるレガシーアクセスネットワークへの SGT の伝播	15
非 TrustSec 領域のスパニングのためのレイヤ 3 SGT トランスポート	17
Cisco TrustSec 非対応スイッチングモジュールの Cisco TrustSec リフレクタ	18
入力のリフレクタ	18
出力のリフレクタ	19

VRF-Aware SXP 19

レイヤ 2 VRF-Aware SXP および VRF の割り当て 20

Cisco TrustSec の機能履歴の概要 20

第 2 章

REST での SGACL と環境データのダウンロード 21

REST での SGACL と環境データのダウンロードの前提条件 21

REST での SGACL と環境データのダウンロードの制約事項 22

REST での SGACL と環境データのダウンロードに関する情報 22

REST での SGACL と環境データのダウンロードの概要 22

Cisco TrustSec 環境データ 23

ネットワークデバイスとサーバ間のメッセージフロー 23

ポリシーサーバの選択基準 25

サーバと IP アドレスの選択プロセス 26

サーバの有効性チェック 26

REST での SGACL と環境データのダウンロードを設定する方法 27

ユーザ名とパスワードの設定 27

証明書登録の設定 29

Cisco TrustSec ポリシーのダウンロード 29

環境データのダウンロード 31

REST での SGACL と環境データのダウンロード 32

REST 設定での SGACL と環境データのデバッグ 33

REST での SGACL と環境データのダウンロードの設定例 34

例：ユーザ名とパスワードの設定 34

例：Cisco TrustSec ポリシーのダウンロード 34

例：環境データのダウンロード 34

REST での SGACL と環境データのダウンロードの機能履歴 34

第 3 章

アイデンティティ、接続および SGT の設定 37

アイデンティティと接続の設定 37

アイデンティティと接続の設定方法 37

Cisco TrustSec シード デバイスのクレデンシャル、AAA 設定 37

Cisco TrustSec 非シード デバイスのクレデンシャル、AAA 設定	39
インターフェイスの SAP キーの再生成	41
追加認証サーバ関連のパラメータの設定	41
例：追加認証サーバ関連のパラメータの設定	42
Cisco TrustSec インターフェイス設定の確認	43
アイデンティティ、接続、および SGT の機能履歴	44

第 4 章

セキュリティグループ ACL ポリシーの設定	45
セキュリティグループ ACL ポリシーの設定の制限	45
セキュリティグループの ACL ポリシーの情報	46
SGACL ロギング	46
セキュリティグループ ACL ポリシーの設定方法	47
SGACL ポリシーの設定プロセス	47
SGACL ポリシーの適用のグローバルな有効化	48
インターフェイスあたりの SGACL ポリシーの適用の有効化	48
VLAN に対する SGACL ポリシーの強制的イネーブル化	49
SGACL モニタ モードの設定	50
SGACL ポリシーの手動設定	51
IPv4 SGACL ポリシーの設定と適用	51
IPv6 SGACL ポリシーの設定	53
手動で SGACL ポリシーを適用する方法	54
SGACL ポリシーの表示	55
ダウンロードされた SGACL ポリシーのリフレッシュ	56
セキュリティグループ ACL ポリシーの設定例	57
例：SGACL ポリシーの適用のグローバルな有効化	57
例：インターフェイスあたりの SGACL ポリシーの適用の有効化	57
例：VLAN に対する SGACL ポリシーの適用の有効化	58
例：SGACL モニタモードの設定	58
例：SGACL ポリシーの手動設定	58
例：SGACL の手動適用	59
例：SGACL ポリシーの表示	59

セキュリティグループ ACL ポリシーの機能履歴 59

第 5 章

Cisco TrustSec SGACL のハイ アベイラビリティ 61

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの前提条件 61

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの制約事項 61

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティに関する情報 62

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの確認 63

SGACL ハイアベイラビリティの機能履歴 64

第 6 章

SGT 交換プロトコルの設定 67

SGT 交換プロトコルの前提条件 67

SGT 交換プロトコルの制約事項 68

SGT 交換プロトコルに関する情報 68

SGT 交換プロトコルの概要 68

セキュリティ グループ タギング 69

SGT の割り当て 69

SGT 交換プロトコルの設定方法 70

デバイス SGT の手動設定 70

SXP ピア接続の設定 70

デフォルトの SXP パスワードの設定 72

デフォルトの SXP 送信元 IP アドレスの設定 73

SXP の復帰期間の変更 73

SXP リトライ期間の変更 74

SXP で学習された IP アドレスと SGT マッピングの変更をキャプチャするための syslog の作成方法 75

SGT 交換プロトコルの設定例 76

例：Cisco TrustSec SXP および SXP ピア接続の有効化 76

例：デフォルトの SXP パスワードと送信元 IP アドレスの設定 76

SGT 交換プロトコルの接続の確認 76

SGT 交換プロトコルの機能履歴 77

第 7 章

セキュリティグループタグのマッピングの設定	79
SGT のマッピングの制約事項	79
SGT のマッピングに関する情報	80
サブネットと SGT のマッピングの概要	80
VLAN と SGT のマッピングの概要	80
レイヤ 3 論理インターフェイスと SGT のマッピング (L3IF-SGT マッピング) の概要	81
バインディング送信元プライオリティ	81
デフォルトルート of SGT	82
SGT のマッピングの設定方法	82
デバイス SGT の手動設定	82
サブネットと SGT のマッピングの設定	83
VLAN と SGT のマッピングの設定	85
L3IF と SGT のマッピングの設定	88
ハードウェアキーストアのエミュレート	88
デフォルトルート of SGT の設定	89
SGT のマッピングの確認	90
サブネットと SGT のマッピングの設定確認	90
VLAN と SGT のマッピングの確認	91
L3IF と SGT のマッピングの確認	91
デフォルトルート of SGT の設定確認	91
SGT のマッピングの設定例	92
例：デバイス SGT の手動設定	92
例：サブネットと SGT のマッピングの設定	92
例：アクセスリンクを介した 1 つのホストに対する VLAN と SGT のマッピングの設定	93
例：入力ポートでの L3IF と SGT のマッピングの設定	94
例：ハードウェアキーストアのエミュレート	95
例：デバイスルートの SGT の設定	95
セキュリティグループタグのマッピングの機能履歴	96

第 8 章

Cisco TrustSec SGT キャッシング 97

Cisco TrustSec SGT キャッシング 97

Cisco TrustSec SGT キャッシングの制約事項 97

Cisco TrustSec SGT キャッシングに関する情報 99

SGT キャッシングを使用した SGT の特定と再適用 99

Cisco TrustSec SGT キャッシングの設定方法 100

SGT キャッシングのグローバル設定 100

インターフェイスでの SGT キャッシングの設定 101

Cisco TrustSec SGT キャッシングの確認 102

Cisco TrustSec キャッシングの設定例 105

例：SGT キャッシングのグローバル設定 105

例：インターフェイスの SGT キャッシングの設定 105

例：インターフェイスでの SGT キャッシングの無効化 105

Cisco TrustSec SGT キャッシングの機能の履歴 106

第 9 章

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリング 107

IP プレフィックスとセキュリティグループタグ (SGT) ベースのセキュリティ交換プロトコル (SXP) フィルタリングの制約事項 107

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングに関する情報 108

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの設定方法 109

SXP フィルタリストの設定 109

SXP フィルタグループの設定 110

グローバルリスナーまたはグローバルスピーカーのフィルタグループの設定 111

SXP フィルタリングの有効化 112

デフォルトルールまたはキャッチオールルールの設定 113

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの設定例 114

例：SXP フィルタリストの設定 114

例：SXP フィルタグループの設定 114

例：SXP フィルタリングの有効化 114

例：デフォルトルールまたはキャッチオールルールの設定 115

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの確認	115
SXP フィルタリングの syslog メッセージ	117
IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの機能履歴	118

第 10 章

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポート	119
Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポート	119
Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの制約事項	119
Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートに関する情報	120
Flexible NetFlow の Cisco TrustSec フィールド	120
Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの設定方法	120
フローレコードのキーフィールドとしての Cisco TrustSec フィールドの設定	121
NetFlow での SGT 名のエクスポートの設定	123
Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの設定例	124
例：フローレコードのキーフィールドとしての Cisco TrustSec フィールドの設定	124
例：NetFlow での SGT 名のエクスポートの設定	124
Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの機能履歴	124

第 11 章

TrustSec SGT の処理：L2 SGT のインポジションと転送	127
TrustSec SGT の処理：L2 SGT のインポジションと転送の前提条件	127
TrustSec SGT の処理：L2 SGT のインポジションと転送に関する情報	128
セキュリティグループおよび SGT	128
TrustSec SGT の処理：L2 SGT のインポジションと転送の設定方法	128
TrustSec SGT の処理：インターフェイスでの L2 SGT のインポジションと転送の手動による有効化	129
インターフェイスでの CTS SGT 伝達の無効化	130
例：TrustSec SGT の処理：インターフェイスでの L2 SGT のインポジションと転送の手動による有効化	131
TrustSec SGT の処理：L2 SGT のインポジションと転送の機能履歴	132

第 12 章

エンドポイントアドミッションコントロールの設定	133
エンドポイントアドミッションコントロールの概要	133

例 : Example: 802.1X 認証の設定	134
例 : MAC 認証バイパスの設定	134
例 : Web 認証プロキシの設定	134
例 : Flexible Authentication (FlexAuth; フレキシブル認証) シーケンスおよびフェールオーバー コンフィギュレーション	135
802.1X ホスト モード	135
認証前オープンアクセス	136
例 : DHCP スヌーピングおよび SGT の割り当て	136
エンドポイント アドミッション コントロールの機能履歴	136



第 1 章

Cisco TrustSec の概要

Cisco TrustSec は、信頼できるネットワークデバイスのドメインを確立することによってセキュアネットワークを構築します。ドメイン内の各デバイスは、そのピアによって認証されます。ドメイン内のデバイス間リンクでの通信は、暗号化、メッセージ整合性検査、データパスリブレイ防止メカニズムを組み合わせたセキュリティで保護されます。

- [Cisco TrustSec の制約事項 \(1 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec のアーキテクチャに関する情報 \(2 ページ\)](#)
- [セキュリティ グループ ベースのアクセス コントロール \(4 ページ\)](#)
- [許可とポリシーの取得 \(11 ページ\)](#)
- [環境データのダウンロード \(12 ページ\)](#)
- [RADIUS リレー機能 \(12 ページ\)](#)
- [リンク セキュリティ \(13 ページ\)](#)
- [SXP によるレガシー アクセス ネットワークへの SGT の伝播 \(15 ページ\)](#)
- [非 TrustSec 領域のスパンニングのためのレイヤ 3 SGT トランスポート \(17 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec 非対応スイッチング モジュールの Cisco TrustSec リフレクタ \(18 ページ\)](#)
- [VRF-Aware SXP \(19 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec の機能履歴の概要 \(20 ページ\)](#)

Cisco TrustSec の制約事項

- 無効なデバイス ID が指定された場合、Protected Access Credential (PAC) のプロビジョニングが失敗し、ハング状態のままになります。PAC をクリアし、正しいデバイス ID とパスワードを設定した後も、PAC は失敗します。

回避策として、Cisco Identity Services Engine (ISE) で、PAC が機能するように、
[Administration] > [System] > [Settings] > [Protocols] > [Radius] メニューの [Suppress Anomalous Clients] オプションをオフにします。

Cisco TrustSec のアーキテクチャに関する情報

Cisco TrustSec のセキュリティアーキテクチャは、信頼できるネットワーク デバイスのドメインを確立することによってセキュアネットワークを構築します。ドメイン内の各デバイスは、そのピアによって認証されます。ドメイン内のデバイス間リンクでの通信は、暗号化、メッセージ整合性検査、データパズリプレイ防止メカニズムを組み合わせたセキュリティで保護されます。Cisco TrustSec は、ネットワークに入るようにセキュリティグループ (SG) がパケットを分類するために認証中に取得したデバイスおよびユーザクレデンシャルを使用します。このパケット分類は、Cisco TrustSec ネットワークへの入力時にパケットにタグ付けされることにより維持されます。タグによってパケットはデータパス全体を通じて正しく識別され、セキュリティおよびその他のポリシー基準が適用されます。このタグはセキュリティグループタグ (SGT) と呼ばれ、エンドポイント デバイスはこの SGT に基づいてトラフィックをフィルタリングできるので、ネットワークへのアクセス コントロール ポリシーの適用が可能になります。



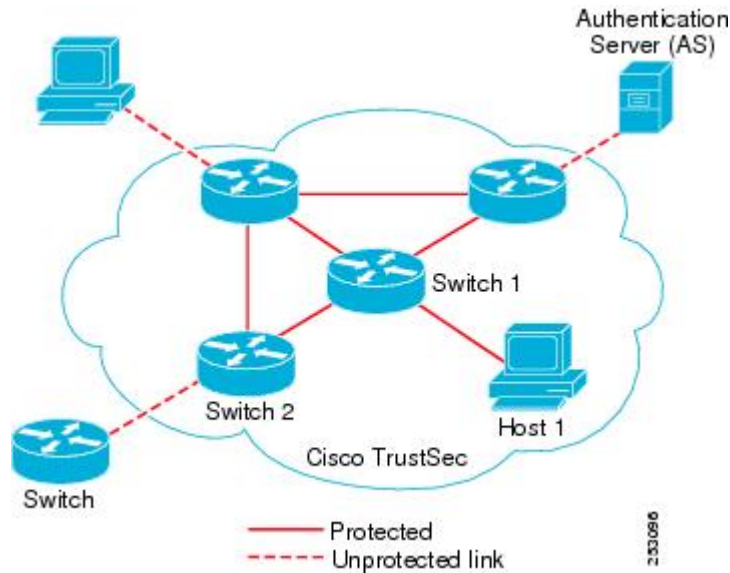
(注) Cisco TrustSec IEEE 802.1X リンクは、Cisco IOS XE Denali、Cisco IOS XE Everest、および Cisco IOS XE Fuji リリースでサポートされているプラットフォームではサポートされていないため、オーセンティケータのみがサポートされます。サブリカントはサポートされていません。

Cisco TrustSec のアーキテクチャは、3 種類の主要コンポーネントで構成されています。

- 認証されたネットワーキング インフラストラクチャ : Cisco TrustSec ドメインを開始するために最初のデバイス (シードデバイス) が認証サーバで認証した後、ドメインに追加された新しい各デバイスはドメイン内のピアデバイスにより認証されます。ピアは、ドメインの認証サーバに対する媒介として動作します。それぞれの新たに認証されたデバイスは認証サーバによって分類され、アイデンティティ、ロールおよびセキュリティポストチャに基づいてセキュリティグループ番号が割り当てられます。
- セキュリティグループベースのアクセスコントロール : Cisco TrustSec ドメイン内のアクセスポリシーは、トポロジとは無関係で、ネットワークアドレスではなく送信元デバイスおよび宛先デバイスのロール (セキュリティグループ番号で指定) に基づいています。個々のパケットには、送信元のセキュリティグループ番号のタグが付けられます。
- セキュアな通信 : 暗号化対応ハードウェアでは、暗号化、メッセージ整合性検査、データパズリプレイ保護メカニズムの組み合わせを使用してドメイン内のデバイス間の各リンクの通信を保護できます。

次の図に、Cisco TrustSec ドメインの例を示します。この例では、Cisco TrustSec ドメイン内に、ネットワーク接続されたデバイスが数台とエンドポイント装置が 1 台あります。エンドポイント装置 1 台とネットワーク接続デバイス 1 台がドメインの外部にあるのは、これらが Cisco TrustSec 対応デバイスでないか、またはアクセスを拒否されたためです。認証サーバは、Cisco TrustSec ドメインの外部にあると見なされます。これは、Cisco Identities Service Engine (Cisco ISE)、または Cisco Secure Access Control System (Cisco ACS) です。

図 1: Cisco TrustSec ネットワーク ドメインの例



Cisco TrustSec 認証プロセスの各参加者は、次のいずれかの役割を果たします。

- サプリカント：Cisco TrustSec ドメインへの参加を試行している、Cisco TrustSec ドメイン内のピアに接続されている認証されないデバイス。
- 認証サーバ：サプリカントのアイデンティティを確認し、Cisco TrustSec ドメイン内のサービスへのサプリカントのアクセスを決定するポリシーを発行します。
- オーセンティケータ：すでに Cisco TrustSec ドメインの一部であり、認証サーバに代わって新しいピアサプリカントを認証できる認証済みデバイス。

サプリカントとオーセンティケータの間のリンクの初回の確立時には、通常は次の一連のイベントが発生します。

1. 認証 (802.1X)：サプリカントは認証サーバによって認証され、オーセンティケータが仲介として機能します。相互認証は、2つのピア（サプリカントとオーセンティケータ）間で実行されます。
2. 認可：サプリカントのアイデンティティ情報に基づいて、認証サーバは、リンクされた各ピアにセキュリティグループの割り当てや ACL などの認可ポリシーを提供します。認証サーバは各ピアのアイデンティティを相互に提供し、各ピアはリンクに適切なポリシーを適用します。
3. セキュリティアソシエーションプロトコル (SAP) ネゴシエーション：リンクの両側で暗号化がサポートされている場合、サプリカントとオーセンティケータはセキュリティアソシエーション (SA) を確立するために必要なパラメータをネゴシエートします。



- (注) SAP は 100G インターフェイスではサポートされていません。100G インターフェイスでは、MACsec Key Agreement Protocol (MKA) と Extended Packet Numbering (XPN) を使用することを推奨します。

3つのステップがすべて完了すると、オーセンティケータはリンクの状態を無許可（ブロッキング）状態から許可状態に変更し、サブリカントは Cisco TrustSec ドメインのメンバになります。

Cisco TrustSec では、入力タギングと出力フィルタリングを使用して、スケーラブルな方法でアクセスコントロールポリシーを適用します。ドメインに入るパケットは、送信元デバイスに割り当てられたセキュリティグループ番号を含むセキュリティグループタグ（SGT）でタグ付けされます。このパケット分類は、Cisco TrustSec ドメイン内のデータパスに沿ってセキュリティ、およびその他のポリシーの基準を適用するために維持されます。データパスの最後の Cisco TrustSec デバイス（エンドポイントまたはネットワークの出力ポイント）は、Cisco TrustSec 送信元デバイスのセキュリティグループおよび最終の Cisco TrustSec デバイスのセキュリティグループに基づいてアクセスコントロールポリシーを適用します。ネットワークアドレスに基づいた以前のアクセスコントロールリストとは異なり、Cisco TrustSec アクセスコントロールポリシーは、セキュリティグループアクセスコントロールリスト（SGACL）と呼ばれるロールベースアクセスコントロールリスト（RBACL）形式です。



- (注) 入力とは、宛先へのパス上のパケットが最初の Cisco TrustSec 対応デバイスに入るパケットを指します。出力とは、パス上の最後の Cisco TrustSec 対応デバイスを出るパケットを指します。

セキュリティグループベースのアクセスコントロール

このセクションでは、セキュリティグループベースのアクセスコントロールリスト（SGACL）について説明します。

セキュリティグループおよび SGT

セキュリティグループは、アクセスコントロールポリシーを共有するユーザ、エンドポイントデバイス、およびリソースのグループです。セキュリティグループは Cisco ISE または Cisco Secure ACS の管理者が定義します。新しいユーザおよびデバイスが Cisco TrustSec ドメインに追加されると、認証サーバは、適切なセキュリティグループにこれらの新しいエンティティを割り当てます。Cisco TrustSec は各セキュリティグループに一意的な 16 ビットのセキュリティグループ番号を割り当てます。番号の範囲は Cisco TrustSec ドメイン内でグローバルです。デバイス内のセキュリティグループの数は認証済みのネットワークエンティティの数に制限されません。セキュリティグループ番号を手動で設定する必要はありません。

デバイスが認証されると、Cisco TrustSecはそのデバイスから発信されるすべてのパケットに、デバイスのセキュリティグループ番号が含まれているセキュリティグループタグ (SGT) をタグ付けします。タグ付けされたパケットはネットワークを通じて Cisco TrustSec ヘッダーで SGT を運びます。SGT は全社内の送信元の許可を特定する単一ラベルです。

SGT には、送信元のセキュリティグループが含まれているため、タグは送信元 SGT と呼ばれることもあります。宛先デバイスもまたセキュリティグループ (宛先 SG) に割り当てられるため、便宜上、このセキュリティグループを接続先グループタグ (DGT) と呼ぶこともあります。ただし、実際の Cisco TrustSec パケットタグには、宛先デバイスのセキュリティグループ番号は含まれていません。

セキュリティグループ ACL のサポート

セキュリティグループアクセスコントロールリスト (SGACL) はポリシーの適用です。これによって管理者は、セキュリティグループの割り当てと宛先リソースに基づいてユーザが実行する操作を制御できます。Cisco TrustSec ドメイン内のポリシーの適用は、軸の 1 つが送信元セキュリティグループ番号、もう 1 つの軸が宛先セキュリティグループ番号である、アクセス許可マトリックスで表示されます。マトリックス内の各セルには、SGACL の番号付きリストが含まれます。ここでは、送信元セキュリティグループに属し宛先セキュリティグループに属する宛先 IP を持つ、IP から送信されるパケットに適用される必要があるアクセス権限を指定します。

SGACL は、IP アドレスではなく、セキュリティアソシエーションまたはセキュリティグループタグ値に基づいたステートレスのアクセス制御メカニズムを提供し、フィルタリングします。SGACL ポリシーをプロビジョニングするには、次の 3 つの方法があります。

- **スタティック ポリシープロビジョニング** : **cts role-based permission** コマンドを使用して、ユーザが SGACL ポリシーを定義します。
- **ダイナミック ポリシープロビジョニング** : SGACL ポリシーの設定は、Cisco Secure ACS または Cisco Identity Services Engine の主にポリシー管理機能によって実行する必要があります。
- **認可変更 (CoA)** : 更新されたポリシーは、SGACL ポリシーが ISE で変更され、CoA が Cisco TrustSec デバイスにプッシュされるとダウンロードされます。

デバイスデータプレーンは、ポリシープロバイダー (ISE) から CoA パケットを受信し、CoA パケットにポリシーを適用します。その後、パケットはデバイスコントロールプレーンに転送され、着信 CoA パケットに対して次のレベルのポリシーが適用されます。ハードウェアとソフトウェアのポリシーカウンタのヒット情報を表示するには、特権 EXEC モードで **show cts role-based counters** コマンドを実行します。

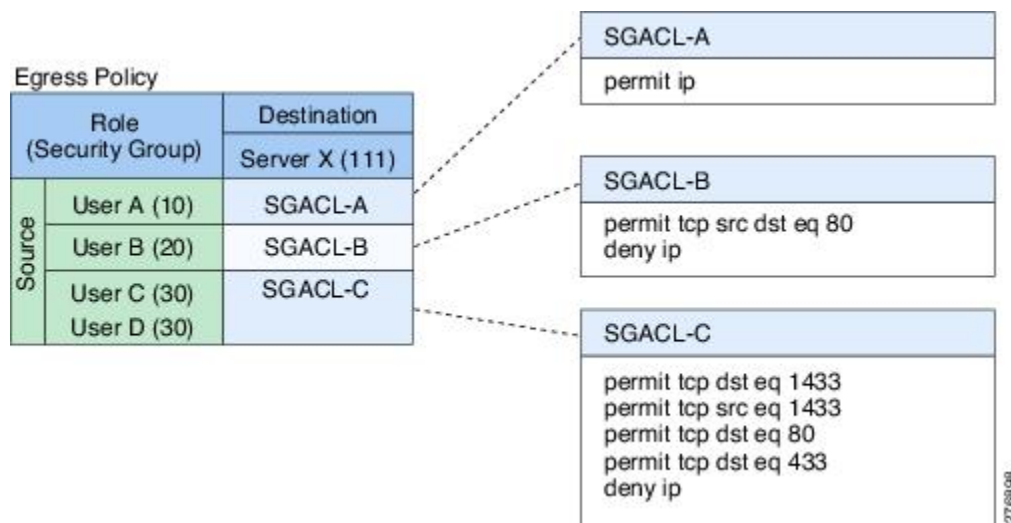
SGACL ポリシー

セキュリティグループアクセスコントロールリスト (SGACL) を使用して、ユーザと宛先リソースのセキュリティグループの割り当てに基づいて、ユーザが実行できる操作を制御できます。Cisco TrustSec ドメイン内のポリシーの適用は、軸の 1 つが送信元セキュリティグループ

プ番号、もう1つの軸が宛先セキュリティグループ番号である、許可マトリックスで表示されます。マトリックスの本体の各セルには送信元セキュリティグループから宛先セキュリティグループ宛てに送信されるパケットに適用される必要がある許可を指定する SGACL の順序リストを含めることができます。

次の図に、3つの定義済みのユーザーロールと1つの定義済み宛先リソースを含むシンプルなドメインの Cisco TrustSec 許可マトリックスの例を示します。ユーザーの役割に基づいて宛先サーバへのアクセスを3つの SGACL ポリシーで制御します。

図 2: SGACL ポリシーマトリックスの例



ネットワーク内のユーザーとデバイスをセキュリティグループに割り当て、セキュリティグループ間でアクセス制御を適用することにより、Cisco TrustSec はネットワーク内でロールベースのトポロジに依存しないアクセス制御を実現します。SGACLは従来のACLとは異なり、IPアドレスではなくデバイスアイデンティティに基づいてアクセスコントロールポリシーを定義するため、ネットワークデバイスはネットワーク全体を移動し、IPアドレスを変更することができます。ロールと許可が同じであれば、ネットワークトポロジが変更されてもセキュリティポリシーには影響しません。ユーザーがデバイスに追加されたら、適切なセキュリティグループにユーザーを割り当てるだけで、ユーザーはただちにそのグループの許可を受信します。



(注) SGACLポリシーは、デバイスからエンドホストデバイスに生成されるトラフィックではなく、2つのホストデバイス間で生成されるトラフィックに適用されます。

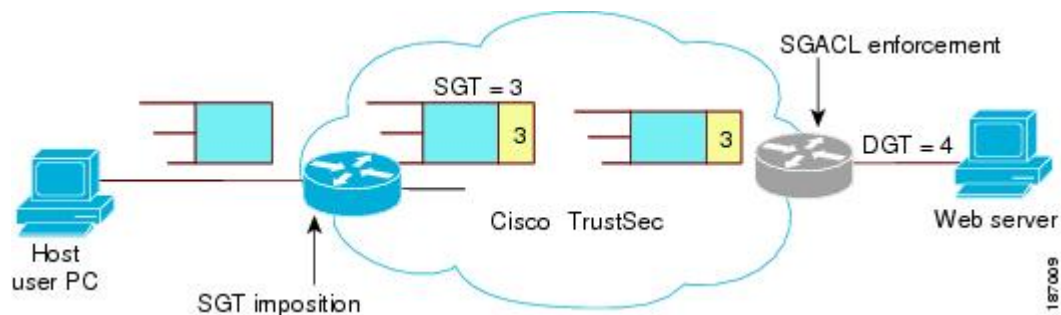
ロールベースの許可を使用すると ACL のサイズが大幅に節約され、メンテナンス作業も簡単になります。Cisco TrustSecによって、設定されているアクセスコントロールエントリ (ACE) の数は、指定されている許可の数によって決定されるため、ACE の数は従来の IP ネットワークでよりもずっと小さくなります。Cisco TrustSec での SGACL の使用は、従来の ACL と比較して TCAM リソースをより効率的に使用します。

入力タギングおよび出力の強制

Cisco TrustSec アクセスコントロールは、入力タギングと出力の適用を使用して実装されます。Cisco TrustSec ドメインの入力点では、送信元からのトラフィックは、送信元エンティティのセキュリティグループ番号を含む SGT でタグ付けされます。SGT は、ドメイン全体にわたってトラフィックと合わせて伝播されます。Cisco TrustSec ドメインの出力ポイントで、出力デバイスは送信元 SGT および宛先エンティティのセキュリティグループ番号（宛先 SG、または DGT）を使用して、SGACL ポリシーマトリクスから適用するアクセスポリシーを決定します。

Cisco TrustSec ドメインでは、次の図のように SGT の割り当てと SGACL の適用が実行されます。

図 3: Cisco TrustSec ドメインの SGT と SGACL



1. ホスト PC は Web サーバにパケットを送信します。PC と Web サーバは Cisco TrustSec ドメインのメンバではありませんが、パケットのデータパスには Cisco TrustSec ドメインが含まれています。
2. Cisco TrustSec の入力デバイスは、ホスト PC の認証サーバにより割り当てられたセキュリティグループ番号である、セキュリティグループ番号 3 の SGT を追加するようにパケットを変更します。
3. Cisco TrustSec の出力デバイスは、Web サーバの認証サーバによって割り当てられたセキュリティグループ番号である、送信元グループ 3 と接続先グループ 4 に適用する SGACL ポリシーを適用します。
4. SGACL がパケットを転送するように許可している場合は、Cisco TrustSec 出力スイッチは SGT を削除するようにパケットを変更し、Web サーバにパケットを転送します。

送信元セキュリティグループの判断

Cisco TrustSec ドメインの入口のネットワークデバイスは、Cisco TrustSec ドメインにパケットを転送する際に、パケットに SGT をタグ付けできるように、Cisco TrustSec ドメインに入るパケットの SGT を判断する必要があります。出力のネットワークデバイスは、SGACL を適用するために、パケットの SGT を判断する必要があります。

ネットワーク デバイスは、次のいずれかの方法でパケットの SGT を判断できます。

- ポリシー取得時に送信元の SGT を取得する：Cisco TrustSec 認証フェーズ後、ネットワーク デバイスは、ピア デバイスが信頼できるかどうかを示すポリシー情報を、認証サーバから取得します。ピア デバイスが信頼できない場合、認証サーバはそのピア デバイスから着信するすべてのパケットに適用する SGT も提供します。
- パケットの送信元 SGT を取得する：パケットが信頼できるピア デバイスから送信される場合、パケットは、SGT を伝送します。これは、そのパケットにとって、そのネットワーク デバイスが Cisco TrustSec ドメイン内の最初のネットワーク デバイスではない場合に適用されます。
- 送信元アイデンティティに基づいて送信元 SGT を検索する：アイデンティティ ポート マッピング (IPM) を使用すると、接続されているピアアイデンティティのリンクを手動で設定できます。ネットワーク デバイスは、SGT および信頼状態を含むポリシー情報を認証サーバに要求します。
- 送信元 IP アドレスに基づいて送信元 SGT を検索する：場合によっては、送信元 IP アドレスに基づいてパケットの SGT を判断するようにパケットを手動で設定できます。SGT Exchange Protocol (SXP) も、IP-address-to-SGT マッピングテーブルに値を格納できます。

宛先セキュリティ グループの判断

Cisco TrustSec ドメインの出力のネットワーク デバイスは、SGACL を適用する宛先グループ (DGT) を決定します。ネットワーク デバイスは、パケットの送信元セキュリティ グループを決定するために使用されるのと同じ方法 (パケットのタグからのグループ番号の取得を除く) を使用して宛先セキュリティ グループを決定します。宛先セキュリティ グループ番号はパケットのタグに含まれません。

場合によっては、入口のデバイスまたは出口以外のその他のデバイスが、使用できる宛先グループの情報を持っていることもあります。このような場合、SGACL は出力デバイスではなくこれらのデバイスに適用されます。

ルーテッドおよびスイッチド トラフィックでの SGACL の強制

SGACL の強制は IP トラフィックだけに適用されますが、強制はルーティングまたはスイッチングされるトラフィックに適用できます。

ルーテッドトラフィックの場合、SGACL の適用は、宛先ホストに接続されたルーテッドポートを持つ出力スイッチ (通常はディストリビューションスイッチまたはアクセススイッチ) によって実行されます。SGACL の適用をグローバルに有効にすると、SVI インターフェイスを除くすべてのレイヤ 3 インターフェイスで適用が自動的に有効になります。

スイッチングされるトラフィックの場合は、SGACL の強制はルーティング機能のない単一スイッチング ドメイン内のトラフィックフローで実行されます。2 台の直接接続されたサーバ間のサーバ間トラフィックのデータセンター アクセス スイッチ上で実行された SGACL の強制が、その例です。この例では、通常、サーバ間のトラフィックはスイッチングされます。SGACL の強制は、VLAN 内でスイッチングされるパケットまたは VLAN に関連付けられた SVI に転

送られるパケットに適用できます。ただし実行は VLAN ごとに明示的にイネーブルにする必要があります。

SGACL ロギングと ACE 統計情報

SGACL でロギングが有効になっている場合、デバイスは次の情報を記録します。

- 送信元セキュリティグループタグ (SGT) および宛先 SGT
- SGACL ポリシー名
- パケットプロトコルタイプ
- パケットで実行されるアクション

ログオプションは個々の ACE に適用され、ACE に一致するパケットがログに記録されます。log キーワードで記録された最初のパケットは、syslog メッセージを生成します。後続のログメッセージは 5 分間隔で生成および報告されます。ロギング対応 ACE が別のパケット (ログメッセージを生成したパケットと同一の特性を持つ) と一致する場合、一致したパケットの数が増加 (カウンタ) し、レポートされます。

ロギングを有効にするには、SGACL 構成の ACE 定義の前に **log** キーワードを使用します。たとえば、**permit ip log** のようになります。

次に、送信元と宛先の SGT、ACE の一致 (許可または拒否アクション)、およびプロトコル、つまり TCP、UDP、IGMP、および ICMP 情報を表示するサンプルログを示します。

```
*Jun 2 08:58:06.489: %C4K_IOSINTF-6-SGACLHIT: list deny_udp_src_port_log-30 Denied
udp 24.0.0.23(100) -> 28.0.0.91(100), SGT8 DGT 12
```

show cts role-based counters コマンドを使用して表示できる既存の「セルごとの」SGACL 統計情報に加えて、**show ip access-list sgacl_name** コマンドを使用して ACE 統計情報も表示できます。これについて追加設定は必要ありません。

次に、**show ip access-list** コマンドを使用して ACE カウントを表示する例を示します。

```
Device# show ip access-control deny_udp_src_port_log-30

Role-based IP access list deny_udp_src_port_log-30 (downloaded)
10 deny udp src eq 100 log (283 matches)
20 permit ip log (50 matches)
```



- (注) 着信トラフィックがセルに一致するが、セルの SGACL に一致しない場合、トラフィックは許可され、セルの HW-許可のカウンタが増加します。

次に、セルの SGACL の動作例を示します。

SGACL ポリシーは「deny icmp echo」で 5 ～ 18 に設定され、TCP ヘッダーで 5 ～ 18 の着信トラフィックがあります。セルが 5 ～ 18 に一致するが、トラフィックが icmp と一致しない場合、トラフィックは許可され、セル 5 ～ 18 の HW-許可カウンタが増加します。

```
Device# show cts role-based permissions from 5 to 18
```

```
IPv4 Role-based permissions from group 5:sgt_5_Contractors to group
18:sgt_18_data_user2:sgacl_5_18-01
RBACL Monitor All for Dynamic Policies : FALSE
RBACL Monitor All for Configured Policies : FALSE
```

```
Device# show ip access-lists sgACL_5_18-01
```

```
Role-based IP access list sgACL_5_18-01 (downloaded)
10 deny icmp echo log (1 match)
```

```
Device# show cts role-based counters from 5 to 18
```

```
Role-based IPv4 counters
From To SW-Denied HW-Denied SW-Permitt HW-Permitt SW-Monitor HW-Monitor
5 18 0 0 0 1673202 0 0
```

VRF 対応 SGACL ロギング

SGACL システムログには VRF 情報が含まれます。現在ログに記録されているフィールドに加えて、ロギング情報には VRF 名が含まれます。更新されたロギング情報は次のようになります。

```
*Nov 15 02:18:52.187: %RBM-6-SGACLHIT_V6: ingress_interface='GigabitEthernet1/0/15'
sgacl_name='IPV6_TCP_DENY' action='Deny' protocol='tcp' src-vrf='CTS-VRF' src-ip='25::2'
src-port='20'
dest-vrf='CTS-VRF' dest-ip='49::2' dest-port='30' sgt='200' dgt='500'
logging_interval_hits='1'
```

SGACL モニタ モード

Cisco TrustSec の事前導入段階で、管理者は、モニタモードを使用して、ポリシーが意図したとおりに機能することを確認するために、セキュリティポリシーを適用しない状態でテストします。セキュリティポリシーが意図したとおりに機能しない場合には、モニタモードが、その問題を識別するための便利なメカニズムと、SGACL の適用を有効にする前にポリシーを修正する機会を提供します。これにより、管理者は、ポリシーを適用する前にポリシーアクションの結果をより可視的に確認でき、対象のポリシーがセキュリティ要件を満たしている（ユーザが認証されなければリソースへのアクセスは拒否される）ことを確認できます。

モニタリング機能は、SGT-DGT ペア レベルで提供されます。SGACL モニタ モード機能を有効にすると、拒否アクションがラインカード上の ACL 許可として実装されます。これにより、SGACL カウンタおよびロギングでは、接続が SGACL ポリシーによりどう処理されているか

を表示できます。すべてのモニタ対象トラフィックが許可されるため、SGACL モニタモードでは、SGACL によるサービスの中断はありません。

許可とポリシーの取得

デバイス認証が終了すると、サブリカントとオーセンティケータの両方が認証サーバからセキュリティ ポリシーを取得します。2つのピアは、リンク認可を実行し、Cisco TrustSec デバイス ID に基づいてリンクセキュリティ ポリシーを相互に適用します。リンクの認証方式は、802.1X または手動認証に設定できます。リンクのセキュリティが 802.1X である場合、各ピアは認証サーバから受信したデバイス ID を使用します。リンクのセキュリティが手動の場合、ピア デバイス ID を割り当てる必要があります。

認証サーバは次の属性を返します。

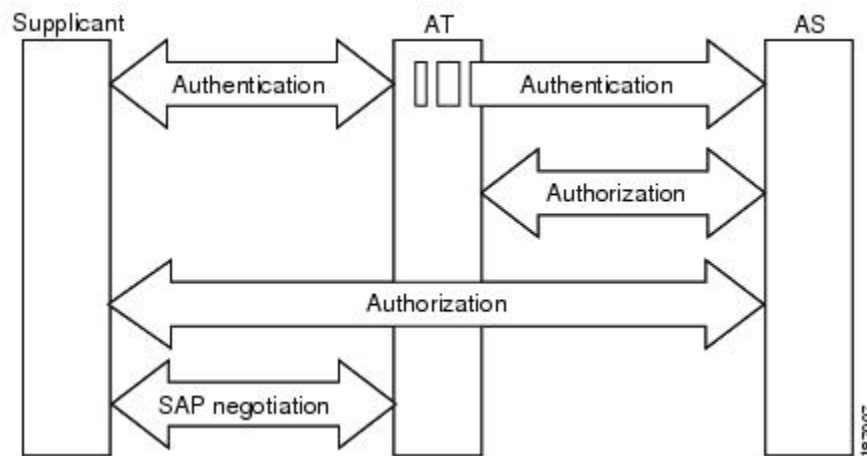
- Cisco TrustSec の信頼状態：パケットに SGT を付けるにあたり、ピア デバイスが信用できるかどうかを示します。
- ピア SGT：ピアが属しているセキュリティ グループを示します。ピアが信頼できない場合は、ピアから受信したすべてのパケットにこの SGT がタグ付けされます。SGACL がピアの SGT に関連付けられているかどうかデバイスが認識できない場合、デバイスは認証サーバに追加要求を送信して SGACL をダウンロードする場合があります。
- 許可期限：ポリシーの期限が切れるまでの秒数を示します。Cisco TrustSec デバイスはポリシーと許可を期限が切れる前にリフレッシュする必要があります。デバイスはデータの有効期限が切れていなければ認証およびポリシーデータをキャッシュし、リブート後に再利用できます。



(注) Cisco TrustSec デバイスは、認証サーバからピアの適切なポリシーを取得できない場合に備えて、最小限のデフォルト アクセス ポリシーをサポートする必要があります。

次の図に、NDAC および SAP ネゴシエーションプロセスを示します。

図 4: NDAC および SAP ネゴシエーション



環境データのダウンロード

Cisco TrustSec 環境データは、Cisco TrustSec ノードとしてのデバイスの機能を支援するひとまとまりの情報またはポリシーです。デバイスは、Cisco TrustSec ドメインに最初に加入する際に、認証サーバから環境データを取得しますが、一部のデータをデバイスに手動で設定することもできます。たとえば、Cisco TrustSec のシードデバイスには認証サーバの情報を設定する必要がありますが、この情報は、デバイスが認証サーバから取得するサーバリストを使用して、後から追加することができます。

デバイスは、期限前に Cisco TrustSec 環境データをリフレッシュする必要があります。また、このデータの有効期限が切れていなければ、環境データをキャッシュし、リブート後に再利用することもできます。

デバイスは RADIUS を使用して、認証サーバから次の環境データを取得します。

- サーバリスト：クライアントがその後の RADIUS 要求に使用できるサーバのリスト（認証および許可の両方）PAC のリフレッシュは、これらのサーバを介して行われます。
- デバイス SG：そのデバイス自体が属しているセキュリティグループ
- 有効期間：Cisco TrustSec デバイスが環境データをリフレッシュする頻度を左右する期間

RADIUS リレー機能

802.1X 認証プロセスで Cisco TrustSec オーセンティケータのロールを引き受けるデバイスは、認証サーバへの IP 接続を通じて、UDP/IP での RADIUS メッセージの交換により、デバイスが認証サーバからポリシーと許可を取得できるようにします。サブリカントデバイスは認証サーバとの IP 接続がなくてもかまいません。サブリカントに認証サーバとの IP 接続がない場合、

Cisco TrustSec はオーセンティケータをサブリカントの RADIUS リレーとして機能させることができます。

サブリカントは、RADIUS サーバの IP アドレスと UDP ポートを持つオーセンティケータに特別な EAPOL メッセージを送信し、RADIUS 要求を完了します。オーセンティケータは、受信した EAPOL メッセージから RADIUS 要求を抽出し、これを UDP/IP を通じて認証サーバに送信します。認証サーバから RADIUS 応答が返ると、オーセンティケータはメッセージを EAPOL フレームにカプセル化して、サブリカントに転送します。

リンク セキュリティ

リンクの両側で 802.1AE Media Access Control Security (MACsec) をサポートしている場合、セキュリティ アソシエーション プロトコル (SAP) ネゴシエーションが実行されます。サブリカントとオーセンティケータの間で EAPOL-Key が交換され、暗号スイートのネゴシエーション、セキュリティ パラメータの交換、およびキーの管理が実行されます。これら 3 つの作業が正常に完了すると、セキュリティ アソシエーション (SA) が確立します。

ソフトウェア バージョン、暗号ライセンス、およびリンク ハードウェア サポートに応じて、SAP ネゴシエーションは次の動作モードの 1 つを使用できます。

- Galois/Counter Mode (GCM) : 認証および暗号化ありを指定します
- GCM 認証 (GMAC) : 認証あり、暗号化なしを指定します
- カプセル化なし : カプセル化なし (クリア テキスト) を指定します
- ヌル : カプセル化あり、認証なし、暗号化なしを指定します

カプセル化なしを除くすべてのモードで、Cisco TrustSec 対応のハードウェアが必要です。

リンクセキュリティ用の SAP-PMK の設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	interface type number 例 : <pre>Device(config)# interface TenGigabitEthernet 1/1/4</pre>	インターフェイスを設定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	switchport mode trunk 例 : <pre>Device(config-if)# switchport mode trunk</pre>	トランキング VLAN レイヤ 2 インターフェイスを指定します。
ステップ 5	cts manual 例 : <pre>Device(config-if)# cts manual</pre>	Cisco TrustSec 手動コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 6	no propagate sgt 例 : <pre>Device(config-if-cts-manual)# no propagate sgt</pre>	ピアが SGT を処理できない場合、このコマンドの no 形式を使用します。 no propagate sgt コマンドを使用すると、インターフェイスからピアに SGT が送信されなくなります。
ステップ 7	sap pmk key [mode-list mode1 [mode2 [mode3 [mode4]]]] 例 : <pre>Device(config-if-cts-manual)# sap pmk 001234567890 mode-list gcm-encrypt gmac</pre>	SAP の Pairwise Master Key (PMK) と動作モードを設定します。Cisco TrustSec の手動モードでは、SAP はデフォルトでディセーブルになっています。 <ul style="list-style-type: none"> • key : 文字数が偶数個で最大 32 文字の 16 進値。 SAP 動作の mode オプションの詳細は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • gcm-encrypt : 認証および暗号化 (注) ソフトウェア ライセンスが MACsec 暗号化をサポートする場合、MACsec の認証と暗号化にこのモードを選択します。 • gmac : 認証、暗号化なし • no-encap : カプセル化なし • null : カプセル化、認証または暗号化なし

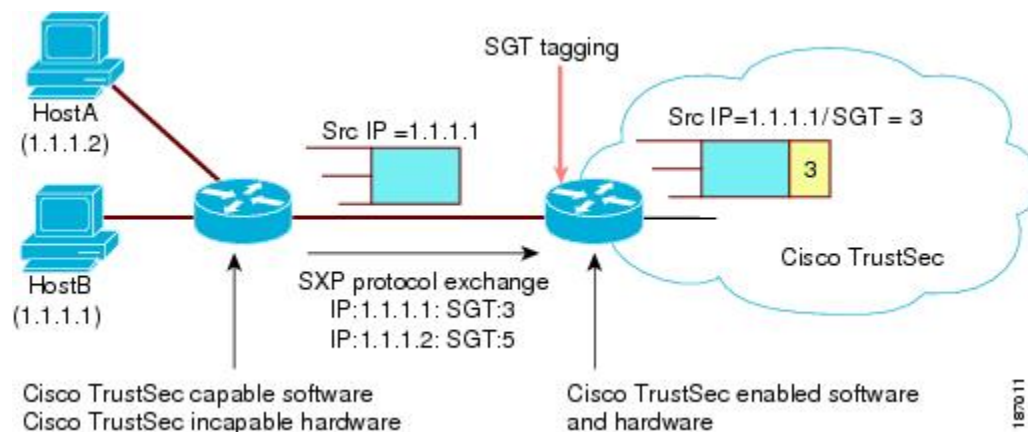
	コマンドまたはアクション	目的
		(注) インターフェイスでデータリンク暗号化を使用できない場合は、デフォルトおよび唯一使用可能な SAP 動作モードは no-encap コマンドです。SGT はサポートされません。
ステップ 8	end 例 : Device(config-if-cts-manual)# end	Cisco TrustSec 手動コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SXP によるレガシー アクセス ネットワークへの SGT の伝播

パケットへの SGT のタグ付けには、ハードウェアによるサポートが必要です。Cisco TrustSec 認証に参加する機能があっても、パケットに SGT をタグ付けするハードウェア機能がないデバイスがネットワークにある場合があります。SGT 交換プロトコル (SXP) を使用して、これらのデバイスは、Cisco TrustSec 対応のハードウェアを搭載している Cisco TrustSec ピア デバイスに IP アドレスと SGT のマッピングを渡すことができます。

通常、SXP は Cisco TrustSec ドメイン エッジの入力アクセス レイヤ デバイスと Cisco TrustSec ドメイン内のディストリビューション レイヤ デバイス間で動作します。アクセス レイヤ デバイスは入力パケットの適切な SGT を判断するために、外部送信元デバイスの Cisco TrustSec 認証を実行します。アクセス レイヤ デバイスは IP デバイス トラッキング および (任意で) DHCP スヌーピングを使用して送信元デバイスの IP アドレスを学習し、その後 SXP を使用して送信元デバイスの IP アドレス および SGT を、ディストリビューション デバイスに渡します。Cisco TrustSec 対応のハードウェアを備えたディストリビューション デバイスはこの IP と SGT のマッピング情報を使用してパケットに適切にタグを付け、SGACL ポリシーを適用します。

図 5: SXP プロトコルによる SGT 情報の伝播



Cisco TrustSec ハードウェア サポート対象外のピアと Cisco TrustSec ハードウェア サポート対象のピア間の SXP 接続は、手動で設定する必要があります。SXP 接続を設定する場合は、次の作業を実行する必要があります。

- SXP データの整合性と認証が必要になる場合は、ピアデバイスの両方に同じ SXP パスワードを設定する必要があります。SXP パスワードは各ピア接続に対して明示的に指定することも、デバイスに対してグローバルに設定することもできます。SXP パスワードは必須ではありませんが、使用することを推奨します。
- 各ピアを SXP 接続に SXP スピーカーまたは SXP リスナーとして設定する必要があります。スピーカー デバイスはリスナー デバイスに IP-to-SGT 情報を渡します。
- 送信元 IP アドレスを指定して各ピアの関係付けに使用したり、特定の送信元 IP アドレスを設定していないピア接続に対してデフォルトの送信元 IP アドレスを設定したりすることができます。送信元 IP アドレスを指定しない場合、デバイスはピアへの接続のインターフェイスの IP アドレスを使用します。

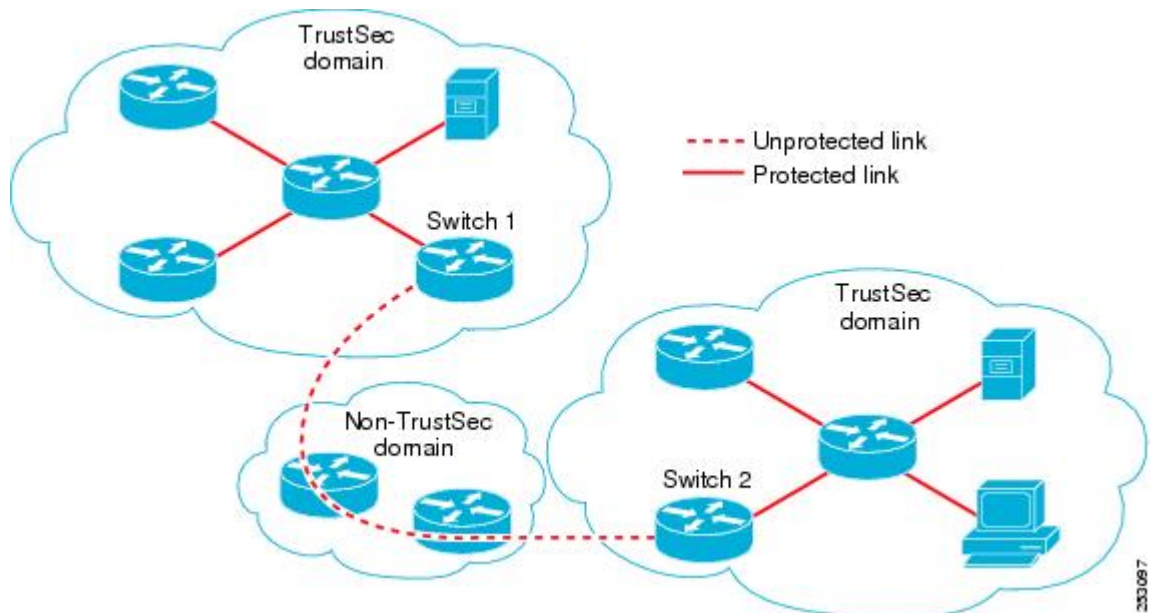
SXP は複数のホップを許可します。つまり、Cisco TrustSec ハードウェア サポート対象外デバイスのピアが Cisco TrustSec ハードウェア サポートの対象外でもある場合、2 番目のピアはハードウェア対応ピアに到達するまで IP と SGT のマッピング情報の伝播を継続して、3 番目のピアへの SXP 接続を設定できます。デバイスは 1 つの SXP 接続では SXP リスナーとして、別の SXP 接続では SXP スピーカーとして設定できます。

Cisco TrustSec デバイスは TCP キープアライブ メカニズムを使用して、SXP ピアとの接続を維持します。ピア接続を確立または回復するために、デバイスは設定可能な再試行期間を使用して接続が成功するか、接続が設定から削除されるまで接続の確立を繰り返し試行します。

非 TrustSec 領域のスパニングのためのレイヤ 3 SGT トランスポート

パケットが非 TrustSec を宛先として Cisco TrustSec ドメインを離れると、出力 Cisco TrustSec デバイスは外部ネットワークにパケットを転送する前に Cisco TrustSec ヘッダーおよび SGT を削除します。ただし、次の図に示すように、パケットが別の Cisco TrustSec ドメインへのパス上にある非 TrustSec ドメインを通過するだけの場合、Cisco TrustSec レイヤ 3 SGT トランスポート機能を使用して SGT を維持できます。この機能では、出力 Cisco TrustSec デバイスは、SGT のコピーを含む ESP ヘッダーを使用してパケットをカプセル化します。カプセル化されたパケットが次の Cisco TrustSec ドメインに到達すると、入力 Cisco TrustSec デバイスは ESP カプセル化を解除して、SGT のパケットを伝播します。

図 6: 非 TrustSec ドメインのスパニング



Cisco TrustSec レイヤ 3 SGT トランスポートをサポートするために、Cisco TrustSec 入力または出力レイヤ 3 ゲートウェイとして機能するすべてのデバイスは、リモート Cisco TrustSec ドメインの適格なサブネットと、それらの領域内の除外されたサブネットを一覧表示するトラフィック ポリシー データベースを維持する必要があります。Cisco Secure ACS から自動的にダウンロードできない場合、デバイスごとにこのデータベースを手動で設定できます。

デバイスは 1 つのポートからレイヤ 3 SGT トランスポートデータを送信し、別のポートでレイヤ 3 SGT トランスポートデータを受信できますが、入力および出力ポートの両方が Cisco TrustSec 対応のハードウェアであることが必要です。



- (注) Cisco TrustSec はレイヤ 3 SGT トランスポートのカプセル化パケットを暗号化しません。非 TrustSec ドメインを通過するパケットを保護するために、IPsec などの他の保護方式を設定できます。

Cisco TrustSec 非対応スイッチング モジュールの Cisco TrustSec リフレクタ

Cisco TrustSec ドメインのシスコデバイスには、次のいずれかのタイプのスイッチングモジュールが含まれている場合があります。

- Cisco TrustSec 対応：ハードウェアは SGT の挿入および伝播をサポートします。
- Cisco TrustSec-Aware：ハードウェアは SGT の挿入および伝播をサポートしませんが、ハードウェアはパケットの送信元および宛先 SGT を特定するために検索を実行できます。
- Cisco TrustSec 非対応：ハードウェアは SGT の挿入および伝播をサポートせず、ハードウェア検索で SGT を特定することもできません。

スイッチに Cisco TrustSec 対応のスーパーバイザエンジンが含まれる場合は、同じスイッチ内のレガシー Cisco TrustSec 非対応スイッチングモジュールに対応するために、Cisco TrustSec リフレクタ機能を使用できます。Cisco TrustSec リフレクタは SPAN を使用して Cisco TrustSec 非対応スイッチングモジュールからのトラフィックを、SGT の割り当ておよび挿入のためにスーパーバイザエンジンにリフレクトします。

2つの相互に排他的なモード（入力および出力）は、Cisco TrustSec リフレクタでサポートされます。デフォルトはいずれのリフレクタもイネーブルでないピュアモードです。Cisco TrustSec 入力のリフレクタは、ディストリビューションスイッチに対向しているアクセススイッチで設定され、Cisco TrustSec 出力のリフレクタはディストリビューションスイッチで設定されます。

入力のリフレクタ

Cisco TrustSec 入力のリフレクタは、Cisco TrustSec 非対応スイッチングモジュールが Cisco TrustSec ドメインのエッジにあり、Cisco TrustSec 対応のスーパーバイザエンジンのアップリンクポートが Cisco TrustSec 対応ディストリビューションに接続している、アクセススイッチで導入されます。

Cisco TrustSec 入力のリフレクタの設定を受け入れるには、次の条件を満たす必要があります。

- スーパーバイザ エンジンが Cisco TrustSec 対応でなければなりません。
- Cisco TrustSec 非対応 DFC は、すべて電源がオフにする必要があります。
- Cisco TrustSec 出力のリフレクタはスイッチ上に設定しないでください。

- Cisco TrustSec 入力リフレクタをディセーブルにする前に、Cisco TrustSec 非対応スイッチング モジュールの電力を切る必要があります。

出力のリフレクタ

Cisco TrustSec 出力のリフレクタは Cisco TrustSec 非対応スイッチングモジュールがアクセススイッチに対向するレイヤ3のアップリンクを使用して、ディストリビューションスイッチに実装されます。Cisco TrustSec 出力のリフレクタはレイヤ3のアップリンクだけでサポートされ、レイヤ2 インターフェイス、SVI、サブインターフェイス、またはトンネルではサポートされないため、NAT トラフィックではサポートされません。

Cisco TrustSec 出力のリフレクタの設定を受け入れるには、次の条件を満たす必要があります。

- スーパーバイザ エンジンまたは DFC のスイッチング モジュールが Cisco TrustSec 対応である必要があります。
- Cisco TrustSec は、スーパーバイザ エンジンのアップリンク ポートまたは Cisco TrustSec 対応 DFC スwitching モジュールの非ルーテッドインターフェイスでイネーブルにしないでください。
- Cisco TrustSec 出力リフレクタをディセーブルにする前に、Cisco TrustSec 非対応スイッチング モジュールの電力を切る必要があります。
- Cisco TrustSec 入力のリフレクタはスイッチ上に設定しないでください。

VRF-Aware SXP

仮想ルーティングおよびフォワーディング (VRF) の SXP の実装は、特定の VRF と SXP 接続をバインドします。Cisco TrustSec をイネーブルにする前に、ネットワーク トポロジがレイヤ2 またはレイヤ3 の VPN に対して正しく設定されており、すべての VRF が設定されていることを前提としています。

SXP VRF サポートは、次のようにまとめることができます。

- 1 つの VRF には 1 つの SXP 接続のみをバインドできます。
- 別の VRF が重複する SXP ピアまたは送信元 IP アドレスを持つ可能性があります。
- 1 つの VRF で学習 (追加または削除) された IP-SGT マッピングは、同じ VRF ドメインのみ更新できます。SXP 接続は異なる VRF にバインドされたマッピングを更新できません。SXP 接続が VRF で終了しない場合は、その VRF の IP-SGT マッピングは SXP によって更新されません。
- VRF ごとに複数のアドレス ファミリがサポートされています。そのため、VRF ドメインの 1 つの SXP 接続が IPV4 および IPV6 両方の IP-SGT マッピングを転送できます。
- SXP には VRF あたりの接続数および IP-SGT マッピング数の制限はありません。

レイヤ 2 VRF-Aware SXP および VRF の割り当て

VRF からレイヤ 2 VLAN への割り当ては、**cts role-based l2-vrf vrf-name vlan-list** グローバル コンフィギュレーション コマンドで指定されます。VLAN は VLAN 上に IP アドレスが設定されたスイッチ仮想インターフェイス (SVI) がない限り、レイヤ 2 VLAN と見なされます。VLAN の SVI に IP アドレスが設定されると、VLAN はレイヤ 3 VLAN になります。

cts role-based l2-vrf コマンドで設定された VRF 割り当ては、VLAN がレイヤ 2 VLAN として維持されている間はアクティブです。VRF の割り当てがアクティブな間に、学習した IP-SGT バインディングも VRF と IP プロトコルバージョンに関連付けられた転送情報ベース (FIB) テーブルに追加されます。VLAN の SVI がアクティブになると、VRF から VLAN への割り当てが非アクティブになり、VLAN で学習されたすべてのバインドが SVI の VRF に関連付けられた FIB テーブルに移動されます。

VRF から VLAN への割り当ては、割り当てが非アクティブになっても保持されます。SVI が削除された、または SVI の IP アドレスの設定が解除された場合に再アクティブ化されます。再アクティブ化された場合、IP-SGT バインドは、SVI の FIB に関連付けられた FIB テーブルから、**cts role-based l2-vrf** コマンドによって割り当てられた VRF に関連付けられた FIB テーブルに戻されます。

Cisco TrustSec の機能履歴の概要

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたりリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	Cisco TrustSec Overview	Cisco TrustSec は、信頼できるネットワーク デバイスのドメインを確立することによってセキュア ネットワークを構築します。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 2 章

REST での SGACL と環境データのダウンロード

このモジュールでは、REST API での SGACL および環境データのダウンロードについて説明します。

- [REST での SGACL と環境データのダウンロードの前提条件](#) (21 ページ)
- [REST での SGACL と環境データのダウンロードの制約事項](#) (22 ページ)
- [REST での SGACL と環境データのダウンロードに関する情報](#) (22 ページ)
- [REST での SGACL と環境データのダウンロードを設定する方法](#) (27 ページ)
- [REST での SGACL と環境データのダウンロード](#) (32 ページ)
- [REST 設定での SGACL と環境データのデバッグ](#) (33 ページ)
- [REST での SGACL と環境データのダウンロードの設定例](#) (34 ページ)
- [REST での SGACL と環境データのダウンロードの機能履歴](#) (34 ページ)

REST での SGACL と環境データのダウンロードの前提条件

- Cisco Identity Services Engine (ISE) のバージョンは 2.7 以降である必要があります。
- Cisco TrustSec 対応デバイスは、Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 以降のリリースを使用する必要があります。
- Cisco ISE のネットワークデバイス設定を更新して、ネットワークデバイスの IP アドレス (NAS-IP) からの REST API コールを許可する設定を含める必要があります。Cisco ISE 設定で指定されたデバイス ID とパスワードは、Cisco ISE への REST API コールを行うネットワークデバイスによってユーザ名とパスワードとして含まれます。

REST での SGACL と環境データのダウンロードの制約事項

- Cisco TrustSec の認可変更 (CoA) は、プロトコルとして RADIUS を使用します。
- ERS サーバポートとしてサポートされるのはポート 9063 だけです。
- Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 では、サードパーティ認証局 (CA) 証明書はサポートされていません。自己署名証明書のみがサポートされています。
- サーバの統計情報は、環境データのリフレッシュ後は保持されません。
- Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 では、IPv6 サーバはサポートされていません。Cisco IOS XE 17.2.1 では、IPv6 サーバがサポートされています。
- Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 では、サーバごとに 1 つの IPv4 アドレスのみがサポートされています。
- サーバごとに 1 つの完全修飾ドメイン名 (FQDN) のみがサポートされます。

REST での SGACL と環境データのダウンロードに関する情報

REST での SGACL と環境データのダウンロードの概要

Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 以降のリリースでは、Cisco TrustSec は、Cisco Identity Services Engine (ISE) からのポリシーのプロビジョニングと環境データのダウンロードに REST ベースのトランスポートプロトコルを使用します。REST ベースのプロトコルは安全性に優れ、以前のリリースで使用されていた RADIUS プロトコルよりも、信頼性の高い高速なセキュリティグループアクセスコントロールリスト (SGACL) ポリシーおよび環境データのプロビジョニングを提供します。

Cisco TrustSec データの REST API ベースおよび RADIUS ベースのダウンロードの両方がサポートされています。ただし、1 つのデバイスでアクティブにできるプロトコルは 1 つだけです。Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 では、REST ベースのプロトコルがデフォルトです。ただし、**cts authorization list** コマンドを設定することで、プロトコルを RADIUS に変更できます。



(注) Cisco TrustSec の認可変更 (CoA) は、引き続きプロトコルとして RADIUS を使用します。

Cisco TrustSec セキュリティグループアクセスコントロールリスト (SGACL) と環境データは、ポリシーのインストール後にアクティブデバイスからスタンバイデバイスに同期されます。ただし、REST API 接続またはセッションはスイッチオーバー中に同期されません。

Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 では、サーバごとに 1 つの IPv4 アドレスのみがサポートされています。Cisco IOS XE Amsterdam 17.2.1 以降のリリースでは、サーバごとに 8 つの IPv4 アドレスと 8 つの IPv6 アドレスがサポートされています。

Cisco IOS XE Amsterdam 17.2.1 では、Cisco TrustSec デバイスは Cisco ISE からの 429 応答コードを受け入れます。この応答コードは、過負荷になると Cisco ISE によって送信されます。特定のサーバの 429 応答コードを受信すると、デバイスはサーバをデッドとしてマークし、リスト内の次のサーバ（プライベートまたはパブリック）に切り替えます。次の再試行は 60 秒後に行われます。

Cisco TrustSec 環境データ

環境データは、Cisco TrustSec 機能を補足する運用データで構成されます。デバイスから Cisco ISE への環境データ要求は、次のデータで構成されます。

- デバイス名：デバイスの名前を指定します。
- デバイス機能：追加データを指定します。

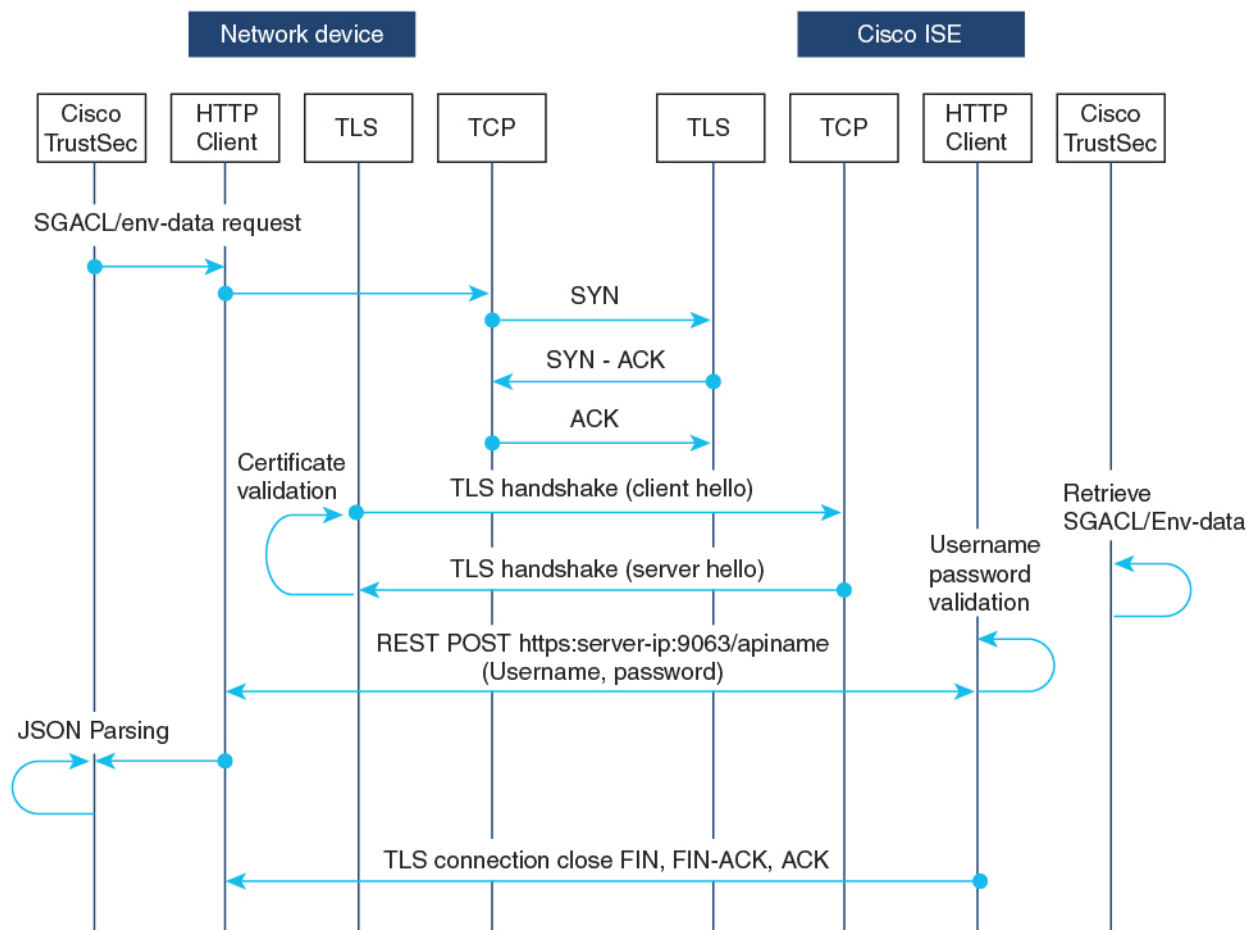
Cisco ISE からデバイスへの環境データ応答は、次のデータで構成されます。

- デバイスのセキュリティグループタグ (SGT)：デバイス名に基づいて Cisco ISE から取得されます。
- サーバリスト：Cisco ISE で指定された Cisco TrustSec サーバのリストを表示します。
- SG-Name テーブル：SGT とデバイス名間のマッピングを表示します。SGT は数字で表示され、デバイス名はテキスト形式で表示されます。
- リフレッシュ時間：環境データがリフレッシュされる時間を示します。

ネットワークデバイスとサーバ間のメッセージフロー

次の図は、ネットワークデバイスとサーバ間の REST コールの接続管理を示しています。

図 7: ネットワークデバイスとサーバ間のメッセージフロー



- Cisco ISE REST API サービスは、ポート 9063 で Transport Layer Security (TLS) 1.2 サーバを実行するセキュアソケットで実行され、SGACL および環境データのネットワークデバイス要求を処理します。
- デバイスによる TLS 接続の確立には「Make or Break」のアプローチが使用され、デバイスと Cisco ISE の間に永続的な TLS 接続はありません。TLS 接続が確立された後、その接続を使用して、デバイスから特定のリソースの Uniform Resource Locator (URL) に複数の REST API コールを送信できます。すべての REST 要求が処理されると、サーバからの TCP-FIN メッセージによって接続が切断されます。新しい REST API コールを送信するには、サーバとの新しい接続を確立する必要があります。
- デバイスから Cisco ISE への REST API コールは、TCP 接続の確立で開始されます。デバイスからの入力接続を許可するには、デバイスの IP アドレスを使用して Cisco ISE を設定する必要があります。Cisco ISE で設定されていない送信元 IP アドレスからの TCP 接続要求はドロップされ、監査ログが作成されます。
- ユーザ名とパスワード：すべての REST API コールに、リソースの Uniform Resource Identifier (URI) へのアクセスを要求する際のユーザ名とパスワード認証を含める必要があります。

この認証により、サーバは発信者にリソースへのアクセス権を付与するか、要求を拒否するかを決定できます。

- Cisco ISE との TLS 接続を正常に確立するには、サーバを信頼するために、デバイスにサーバ証明書署名または PEM をトラストポイントとして (**crypto pki trustpoint** コマンドを使用して) インストールする必要があります。サーバ証明書のフィンガープリントまたは署名のみをエクスポートし、トラストポイントのデバイスにインストールする必要があります。サーバ証明書の秘密キーのインポートは必要ありません。
- TLS 接続の確立後、デバイス上の HTTP クライアントは、指定されたリソースで Cisco ISE への REST コールを開始します。

ポリシーサーバの選択基準

複数の HTTP ポリシーサーバが Cisco TrustSec デバイスに設定されています。サーバが選択されると、デバイスはこのサーバを使用して、サーバがデッドとしてマークされるまで Cisco ISE とやり取りします。

サーバの選択には 2 つのタイプがあります。

- 順序どおりの選択：これはデフォルトの動作です。サーバが設定された順序（パブリックサーバリスト）またはダウンロードされた順序（プライベートサーバリスト）で選択されます。サーバが選択されると、そのデバイスがデッドとしてマークされるまで使用され、その後リストの次のサーバが選択されます。

環境データが正常にダウンロードされ、サーバリストが使用可能になると、これらのサーバがプライベートサーバリストに追加されます。

- ランダムなサーバ選択：デバイスで複数の HTTP ポリシーサーバが設定されている場合、常に最初に設定されたサーバが選択されると、1 つの Cisco ISE インスタンスが過負荷になる可能性があります。この状況を回避するには、各デバイスでランダムにサーバを選択します。ランダムな番号がデバイスによって生成され、この番号に基づいてサーバが選択されます。デバイスごとにランダムな番号を生成するには、デバイスの一意のボード ID と Cisco TrustSec プロセス ID を使用して乱数ジェネレータを初期化します。

サーバが選択されると、サーバがデッドとしてマークされるまで、以降のすべての要求がこのサーバに送信されます。サーバがデッドになると、ランダムなサーバ選択ロジックが次のアライブサーバを選択します。新しいサーバを選択する場合、アクティブサーバの数にデッドサーバは追加されません。サーバ番号は 0 から始まります。

選択されたサーバ = (生成された乱数) % (アクティブサーバの総数)。

サーバ選択ロジックをランダム方式に変更するには、**cts policy-server order random** コマンドを使用します。

サーバと IP アドレスの選択プロセス

サーバ選択の順序は、プライベートサーバリスト（サーバリストダウンロードの一部として受信）、パブリックサーバリスト（設定済みサーバ）の順です。これらのサーバリスト内での順序は、**cts policy-server order random** コマンドが有効かどうかに基づいて、ランダムな選択または順序どおり選択のどちらかになります。

Cisco IOS XE 17.2.1 以降のリリースでは、サーバごとに複数の IP（IPv4 と IPv6 の両方）アドレスがサポートされています。IP 選択の順序は、IPv4 アドレス、IPv6 アドレス、FQDN の順です。

このセクションでは、サーバと IP アドレスの選択の仕組みについて説明します。

1. デバイスを初めてブートアップすると、パブリック（設定済み）リストからサーバが選択されます。
2. **cts environment-data enable** コマンドが設定されている場合、デバイスはパブリックサーバを使用して Cisco ISE からプライベートサーバリストをダウンロードします。
3. プライベートリストを正常に受信すると、後続のすべての要求はプライベートリストを使用します。
4. サーバと IP アドレスを選択すると、デバイスはサーバと IP アドレスの組み合わせを使用して Cisco ISE に接続します。このサーバは、応答の取得に失敗するまで Cisco ISE とやり取りします。
5. プライベートリスト内の現在アクティブなサーバから応答を受信しなかった場合、デバイスはリスト内の次のサーバに切り替えます。サーバが初めて選択された場合、IP 選択ロジックは最初の到達可能な IP または IPv6 アドレスを検索します。
6. サーバと IP アドレスを選択すると、デバイスはダウンするまで使用されます。
7. プライベートリスト内のどのサーバにも到達できない場合、デバイスはパブリックリスト内のサーバへの接続を試みます。サーバスイッチングロジックと IP 選択は、プライベートリストとパブリックリストで同じです。
8. サーバの変更は、サーバリストがリフレッシュされたときのみ行われます。
9. プライベートサーバリストとパブリックサーバリストの両方のすべてのサーバが停止している場合、デバイスはサーバと IP アドレスの選択ロジックをプライベートリストの先頭から再起動します。
10. 特定のサーバと IP アドレスの組み合わせに障害が発生すると、デバイスは 60 秒間待機してから新しい組み合わせを試行します。

サーバの有効性チェック

サーバが動作しているかどうかは、環境データまたは SGACL 要求を Cisco ISE に送信した後、に判別されます。サーバがサーバリストの一部として設定またはダウンロードされた後は、有

効性検出のフェーズはありません。デフォルトのサーバステータスは、すべてのサーバタイプで有効です。

要求が Cisco ISE に送信され、サーバに到達できない場合、または応答が失われた場合、サーバはデッド状態に移行します。サーバ選択ロジックは、同じサーバと次の IP アドレス（複数のアドレスが設定されている場合）を選択して、Cisco ISE 要求の次のセットを送信します。デバイスが Cisco ISE から過負荷応答（HTTP 429）を受信した場合、ロジックはリスト内の次のサーバを選択します。

サーバは、次のいずれかの理由でデッドとしてマークされる可能性があります。

- 設定された IP アドレスに到達できない。
- ポート番号が正しくない。
- IP アドレスを持つ Cisco ISE インスタンスがダウンしている。
- Cisco ISE へのインターフェイスがダウンしている。
- Transport Layer Security (TLS) ハンドシェイクに失敗した。
- HTTP レスポンスのタイムアウト。
- ドメイン名が正しく設定されていない（ドメイン名が使用されている場合）。

サーバに静的 IP アドレスとドメイン名の両方が設定されている場合は、静的 IP アドレスが優先されます。静的 IP アドレスへの応答がない場合、デバイスはドメイン名で試行します。静的 IP アドレスとドメイン名の両方を含む応答を受信しない場合、サーバはデッドとしてマークされます。

プライベートリストのすべてのサーバがデッドとしてマークされると、デバイスはパブリックリストを使用します。残りのすべてのサーバもデッドとしてマークされると、回復メカニズムが開始されます。デバイスは、次の Cisco TrustSec 要求（ポリシーのリフレッシュ、環境データのダウンロードまたはリフレッシュなど）を待機し、すべてのサーバをアライブとしてマークしてダウンロードを再試行します。新しい Cisco TrustSec 要求のトリガーがない場合、サーバはデッド状態のままになります。

REST での SGACL と環境データのダウンロードを設定する方法

ユーザ名とパスワードの設定

デバイスで設定する前に、Cisco ISE でユーザ名とパスワードを REST API アクセス用のログイン情報として設定します。詳細については、「Cisco TrustSec Policies Configuration」の章の「[Cisco TrustSec HTTP Servers](#)」セクションを参照してください。



(注) **cts authorization-list** コマンドを使用して RADIUS ベースの設定を試行したときに HTTP ベースの構成がすでに有効になっている、コンソールに次のエラーメッセージが表示されます。

```
Error: 'cts policy-server or cts environment-data' related configs are enabled.
Disable http-based configs, to enable 'cts authorization'
```

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none">パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts policy-server name server-name 例： Device(config)# cts policy-server name ISE-server	Cisco TrustSec ポリシーサーバを設定し、ポリシーサーバ コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	exit 例： Device(config-policy-server)# exit	ポリシーサーバ コンフィギュレーション モードを終了して、グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 5	cts policy-server username username password {0 6 7 password} {password} 例： Device(config)# cts policy-server username admin password 6 password1	ユーザ名とパスワードを設定します。 (注) デバイスで設定する前に、Cisco ISE でこのユーザ名とパスワードを REST API アクセス用のログイン情報として作成する必要があります。
ステップ 6	end 例： Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

証明書登録の設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	crypto pki trustpoint name 例： Device(config)# crypto pki trustpoint mytp	トラストポイントおよび設定された名前を宣言して、CA トラストポイント コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	exit 例： Device(ca-trustpoint)# exit	CA トラストポイント コンフィギュレーション モードを終了し、グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 5	crypto pki authenticate name 例： Device(config)# crypto pki authenticate mytp	認証局 (CA) 証明書を取得して、認証します。証明書フィンガープリントをチェックするよう求められた場合、証明書フィンガープリントをチェックします。 (注) CA 証明書がコンフィギュレーションにすでにロードされている場合、このコマンドはオプションです。
ステップ 6	end 例： Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

Cisco TrustSec ポリシーのダウンロード

cts role-based enforcement は、Cisco TrustSec ポリシーをダウンロードするようにすでに設定されている必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none">パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts policy-server name server-name 例： Device(config)# cts policy-server name ISE-server	Cisco TrustSec ポリシーサーバを設定し、ポリシーサーバコンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	address domain-name name 例： Device(config-policy-server)# address domain-name domain1	ポリシーサーバのドメイン名のアドレスを設定します。
ステップ 5	address {ipv4 ipv6} policy-server-address 例： Device(config-policy-server)# address ipv4 10.1.1.1 Device(config-policy-server)# address ipv6 2001.DB8::1	ポリシーサーバの IPv4 または IPv6 アドレスを設定します。 <ul style="list-style-type: none">Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1 では、IPv4 アドレスのみがサポートされています。
ステップ 6	tls server-trustpoint name 例： Device(config-policy-server)# tls server-trustpoint tls1	トランスポート層セキュリティのトラストポイントを設定します。
ステップ 7	timeout seconds 例： Device(config-policy-server)# timeout 15	(任意) 応答のタイムアウトを秒単位で設定します。 <ul style="list-style-type: none">デフォルトは 5 秒です。
ステップ 8	retransmit number-of-retries 例： Device(config-policy-server)# retransmit 4	(任意) サーバからの最大リトライ回数を設定します。 <ul style="list-style-type: none">デフォルトは 4 です。
ステップ 9	port port-number 例：	(任意) ポリシーサーバのポート番号を設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
	Device (config-policy-server) # port 9063	(注) ERS サーバのポート番号は 9063 である必要があります。このポート番号は変更できません。
ステップ 10	content-type json 例： Device (config-policy-server) # content-type json	(任意) Cisco ISE から SGACL および環境データを送信するコンテンツタイプを設定します。 (注) デフォルトでは、このコマンドが設定されていない場合でも、JSON がコンテンツタイプとして使用されます。
ステップ 11	end 例： Device (config-policy-server) # end	ポリシーサーバコンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

環境データのダウンロード

HTTP 接続に使用する送信元インターフェイスは、**ip http client source-interface** コマンドで指定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	cts policy-server device-id device-ID 例： Device (config) # cts policy-server device-id server1	環境データ要求を Cisco ISE に送信するようにポリシーサーバのデバイス ID を設定します。 • このデバイス ID は、Cisco ISE でネットワーク アクセス デバイス (NAD) を追加するために使用したものである必要があります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	cts environment-data enable 例 : Device(config)# cts environment-data enable	Cisco ISE からの環境データのダウンロードを有効にします。 (注) cts environment-data enable コマンドと cts authorization list コマンドは相互に排他的な関係にあります。これらのコマンドを一緒に設定することはできません。
ステップ 5	end 例 : Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

REST での SGACL と環境データのダウンロード

次のコマンドを任意の順序で使用します。

- **show cts policy-server details name**

指定されたポリシーサーバに関する情報を表示します。

```
Device# show cts policy-server details name ise_server_1

Server Name      : ise_server_1
Server Status    : Active
  IPv4 Address    : 10.64.69.84
  IPv6 Address    : 2001:DB::2
  Trustpoint      : ISE84
  Port-num        : 9063
  Retransmit count : 3
  Timeout         : 15
  App Content type : JSON
```

- **show cts policy-server statistics active**

アクティブなポリシーサーバに関する静的情報を表示します。

active にせずにコマンドを使用すると、すべてのサーバの統計情報が表示されます。

```
Device# show cts policy-server statistics active

Server Name      : ise_server_1
Server State     : ALIVE
  Number of Request sent      : 7
  Number of Request sent fail : 0
  Number of Response received : 4
  Number of Response rcv fail : 3
    HTTP 200 OK                : 4
    HTTP 400 BadReq            : 0
    HTTP 401 Unauthorized Req  : 0
    HTTP 403 Req Forbidden     : 0
```

```

HTTP 404 NotFound           : 0
HTTP 408 ReqTimeout        : 0
HTTP 415 Unsupported Media  : 0
HTTP 500 ServerErr         : 0
HTTP 501 Req NoSupport     : 0
HTTP 503 Service Unavailable: 0
TCP or TLS handshake error : 3
HTTP Other Error           : 0

```

• show cts server-list

環境データの一部としてダウンロードされるサーバのリストを表示します。これらのサーバは、プライベートサーバリストの一部になります。



(注) 次の出力には、HTTP ベースのダウンロード情報が表示されています。

```

Device# show cts server-list

HTTP Server-list:
  Server Name      : cts_private_server_0
  Server State     : ALIVE
  IPv4 Address     : 10.64.69.151
  IPv6 Address     : 2001:DB8:8086:6502::
  IPv6 Address     : 2001:db8::2
  IPv6 Address     : 2001:db8::402:99
  IPv6 Address     : 2001:DB8:4::802:16
  Domain-name     : ise-267.cisco.com
  Trustpoint      : cts_trustpoint_0

  Server Name      : cts_private_server_1
  Server State     : ALIVE
  IPv4 Address     : 10.10.10.3
  IPv4 Address     : 10.10.10.2
  IPv6 Address     : 2001:DB8::20
  IPv6 Address     : 2001:DB8::21
  Domain-name     : www.ise.cisco.com
  Trustpoint      : cts_trustpoint_1

```

REST 設定での SGACL と環境データのデバッグ

設定をデバッグするには、次の **debug** コマンドを使用します。

• debug cts policy-server http

HTTP クライアントのデバッグを有効にします。

• debug cts policy-server json

JSON クライアントのデバッグを有効にします。

RESTでのSGACLと環境データのダウンロードの設定例

例：ユーザ名とパスワードの設定

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts policy-server name ISE-server
Device(config-policy-server)# exit
Device(config)# cts policy-server username admin 6 password1
Device(config)# end
```

例：Cisco TrustSec ポリシーのダウンロード

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based enforcement
Device(config)# cts policy-server name ISE-server
Device(config-policy-server)# address domain-name domain1
Device(config-policy-server)# address ipv4 10.1.1.1
Device(config-policy-server)# address ipv6 2001:DB8::1
Device(config-policy-server)# tls server-trustpoint tls1
Device(config-policy-server)# timeout 15
Device(config-policy-server)# retransmit 4
Device(config-policy-server)# port 2010
Device(config-policy-server)# end
```

例：環境データのダウンロード

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts policy-server name ISE-server
Device(config-policy-server)# exit
Device(config)# cts policy-server device-id server1
Device(config)# cts env-data enable
Device(config)# end
```

RESTでのSGACLと環境データのダウンロードの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Amsterdam 17.1.1	REST での SGACL と環境データのダウンロード	Cisco TrustSec は、Cisco ISE からの SGACL ポリシーのプロビジョニングとデータのダウンロードに REST ベースのトランスポートプロトコルを使用します。
Cisco IOS XE Amsterdam 17.2.1	IPv6 ポリシーサーバによる HTTP SGACL の適用	ポリシーサーバの IPv6 アドレスがサポートされています。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 3 章

アイデンティティ、接続および SGT の設定

- [アイデンティティと接続の設定 \(37 ページ\)](#)

アイデンティティと接続の設定

このモジュールでは、次の機能について説明します。

- Cisco TrustSec シードデバイスのクレデンシャル、AAA 設定
- Cisco TrustSec 非シードデバイスのクレデンシャル、AAA 設定
- アップリンクポートでの 802.1X モードの Cisco TrustSec 認証と Macsec
- アップリンクポートでの手動モードの Cisco TrustSec と MACsec
- インターフェイスの SAP キーの再生成

アイデンティティと接続の設定方法

このセクションでは、アイデンティティと接続の設定方法を説明します。

Cisco TrustSec シードデバイスのクレデンシャル、AAA 設定

認証サーバに直接接続されているか、または接続は間接でも TrustSec ドメインを開始する最初のデバイスである Cisco TrustSec 対応デバイスは、シードデバイスと呼ばれます。他の Cisco TrustSec ネットワーク デバイスは非シードデバイスです。



- (注)
- Cisco Identity Services Engine (Cisco ISE) または Cisco Secure Access Control Server (Cisco ACS) にも、デバイスの Cisco TrustSec クレデンシャルを設定する必要があります。
 - **cts authorization list** コマンドは、Cisco Identity Services Engine (ISE) から Cisco TrustSec 環境データと SGACL ポリシーをダウンロードするように設定する必要があります。

Cisco TrustSec ドメインを開始できるように、シードデバイスで NDAC および AAA を有効にするには、次の手順を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	cts credentials id device-id password password 例 : Device# cts credentials id device1 password Cisco123	EAP-FAST を使用して他の Cisco TrustSec デバイスで認証するときこのデバイスが使用する Cisco TrustSec デバイス ID およびパスワードを指定します。 <i>device-id</i> 引数は、最大 32 文字で大文字と小文字を区別します。
ステップ 2	enable 例 : Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> • パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 3	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	aaa new-model 例 : Device(config)# aaa new-model	AAA をイネーブルにします。
ステップ 5	aaa authentication dot1x default group radius 例 : Device(config)# aaa authentication dot1x default group radius	RADIUS として 802.1X ポート ベース 認証方式を指定します。
ステップ 6	aaa authorization network mlist group radius 例 : Device(config)# aaa authorization network mlist group radius	ネットワーク関連のすべてのサービス 要求に対して RADIUS 認証を使用するようにデバイスを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> • <i>mlist</i> : Cisco TrustSec AAA サーバ グループ。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	cts authorization list <i>mlist</i> 例 : Device(config)# cts authorization list <i>mlist</i>	Cisco TrustSec の AAA サーバグループを指定します。非シードデバイスはオーセンティケータからサーバリストを取得します。
ステップ 8	aaa accounting dot1x default start-stop group radius 例 : Device(config)# aaa accounting dot1x default start-stop group radius	RADIUS を使用して 802.1X アカウンティングをイネーブルにします。
ステップ 9	radius-server host <i>ip-addr</i> auth-port 1812 acct-port 1813 pac key <i>secret</i> 例 : Device(config)# radius-server host 10.20.3.1 auth-port 1812 acct-port 1813 pac key AbCe1234	RADIUS 認証サーバのホストアドレス、サービスポートおよび暗号キーを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • <i>ip-addr</i> : 認証サーバの IP アドレス。 • <i>secret</i> : 認証サーバによって共有される暗号キー。
ステップ 10	radius-server vsa send authentication 例 : Device(config)# radius-server vsa send authentication	認証段階でデバイスによって生成される RADIUS Access-Request 内のベンダー固有属性 (VSA) を認識して使用するようにデバイスを設定します。
ステップ 11	dot1x system-auth-control 例 : Device(config)# dot1x system-auth-control	802.1x ポートベースの認証をグローバルにイネーブルにします。
ステップ 12	exit 例 : Device(config)# exit	設定モードを終了します。

Cisco TrustSec 非シード デバイスのクレデンシャル、AAA 設定



(注) Cisco Identity Services Engine または Cisco Secure ACS にも、デバイスの Cisco TrustSec クレデンシャルを設定する必要があります。

Cisco TrustSec ドメインに参加できるように、非シードデバイスで NDAC および AAA をイネーブルにするには、次の手順を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	cts credentials id <i>device-id</i> password <i>password</i> 例 : Device# cts credentials id <i>device-id</i> password <i>password</i>	EAP-FAST を使用して他の Cisco TrustSec デバイスで認証するときこのデバイスが使用する Cisco TrustSec デバイス ID およびパスワードを指定します。 <i>device-id</i> 引数は、最大 32 文字で大文字と小文字を区別します。
ステップ 2	enable 例 : Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 3	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	aaa new-model 例 : Device(config)# aaa new-model	AAA をイネーブルにします。
ステップ 5	aaa authentication dot1x default group radius 例 : Device(config)# aaa authentication dot1x default group radius	RADIUS として 802.1X ポート ベース認証方式を指定します。
ステップ 6	aaa authorization network <i>mlist</i> group radius 例 : Device(config)# aaa authorization network <i>mlist</i> group radius	ネットワーク関連のすべてのサービス要求に対して RADIUS 認証を使用するようにデバイスを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <i>mlist</i> : Cisco TrustSec の AAA サーバグループを指定します。
ステップ 7	aaa accounting dot1x default start-stop group radius 例 : Device(config)# aaa accounting dot1x default start-stop group radius	RADIUS を使用して 802.1X アカウンティングをイネーブルにします。
ステップ 8	radius-server vsa send authentication 例 : Device(config)# radius-server vsa send authentication	認証段階でデバイスによって生成される RADIUS Access-Request 内のバンダー固有属性 (VSA) を認識して使用するようにデバイスを設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	dot1x system-auth-control 例： Device (config) # dot1x system-auth-control	802.1x ポートベースの認証をグローバルにイネーブルにします。
ステップ 10	exit 例： Device (config) # exit	設定モードを終了します。

インターフェイスの SAP キーの再生成

暗号キーを手動で更新する機能は、多くの場合、ネットワーク アドミニストレーションのセキュリティ要件の一部です。SAP キー リフレッシュは通常、ネットワーク イベントおよび設定不可能な内部タイマーの組み合わせによりトリガーされ、自動的に行われます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	cts rekey interface type slot/port 例： Device# cts rekey int gig 1/1	MACsec リンクで SAP キーの再ネゴシエーションを強制します。

追加認証サーバ関連のパラメータの設定

デバイスと Cisco TrustSec サーバ間の相互対話を設定するには、次の作業を 1 つまたは複数行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none">パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts server deadtime seconds 例： Device (config) # cts server deadtime 20	(任意) いったん停止中としてマークされたグループ内のサーバを、どのくらいの期間、サービス用に選択してはいけな いかを指定します。デフォルトは 20 秒

	コマンドまたはアクション	目的
		です。指定できる範囲は 1 ~ 864000 です。
ステップ 4	cts server load-balance method least-outstanding [batch-size transactions] [ignore-preferred-server] 例： <pre>Device(config)# cts server load-balance method least-outstanding batch-size 50 ignore-preferred-server</pre>	(任意) Cisco TrustSec プライベートサーバグループに RADIUS ロードバランシングをイネーブルにし、最も未処理のトランザクションが少ないサーバを選択します。デフォルトでは、ロードバランシングは適用されません。デフォルトの transactions は 25 です。 ignore-preferred-server キーワードは、セッション全体を通じて同じサーバを使用しないようにデバイスに指示します。
ステップ 5	cts server test {server-IP-address all} {deadtime seconds enable idle-time seconds } 例： <pre>Device(config)# cts server test 10.15.20.102 idle-time 120</pre>	(任意) 指定されたサーバまたはダイナミックサーバリスト内のすべてのサーバに対してサーバ存続性テストを設定します。デフォルトでは、テストはすべてのサーバに対してイネーブルになっています。デフォルトの idle-time は 60 秒で、範囲は 1 ~ 14400 です。
ステップ 6	exit 例： <pre>Device(config)# exit</pre>	設定モードを終了します。
ステップ 7	show cts server-list 例： <pre>Device# show cts server-list</pre>	Cisco TrustSec サーバのリストのステータスおよび設定の詳細を表示します。

例：追加認証サーバ関連のパラメータの設定

スイッチと Cisco TrustSec サーバ間の相互対話を設定するには、次の作業を 1 つまたは複数行います。

次に、サーバ設定を設定して Cisco TrustSec サーバリストを表示する例を示します。

```
Device# configure terminal
Device(config)# cts server load-balance method least-outstanding batch-size 50
ignore-preferred-server
Device(config)# cts server test all deadtime 20
Device(config)# cts server test all enable
Device(config)# exit
Device#show cts server-list
CTS Server Radius Load Balance = ENABLED
Method = least-outstandin
```

```

Batch size = 50
Ignore preferred server
Server Group Deadtime = 20 secs (default)
Global Server Liveness Automated Test Deadtime = 20 secs
Global Server Liveness Automated Test Idle Time = 60 mins
Global Server Liveness Automated Test = ENABLED (default)

Preferred list, 1 server(s):
*Server: 10.15.20.102, port 1812, A-ID 87B3503255C4384485BB808DC24C6F55
    Status = ALIVE
    auto-test = TRUE, idle-time = 120 mins, deadtime = 20 secs
Installed list: SL1-1E6E6AE57D4E2A9B320D1844C68BA291, 3 server(s):
*Server: 10.15.20.102, port 1812, A-ID 87B3503255C4384485BB808DC24C6F55
    Status = ALIVE
    auto-test = TRUE, idle-time = 60 mins, deadtime = 20 secs
*Server: 10.15.20.101, port 1812, A-ID 255C438487B3503485BBC6F55808DC24
    Status = ALIVE
    auto-test = TRUE, idle-time = 60 mins, deadtime = 20 secs
Installed list: SL2-1E6E6AE57D4E2A9B320D1844C68BA293, 3 server(s):
*Server: 10.0.0.1, port 1812, A-ID 04758B1F05D8C1439F27F9509E07CFB6.
    Status = ALIVE
    auto-test = TRUE, idle-time = 60 mins, deadtime = 20 secs
*Server: 10.0.0.2, port 1812, A-ID 04758B1F05D8C1439F27F9509E07CFB6.
    Status = DEAD
    auto-test = TRUE, idle-time = 60 mins, deadtime = 20 sec

```

Cisco TrustSec インターフェイス設定の確認

Cisco TrustSec 関連のインターフェイスの設定を表示するには、次のコマンドを使用します。 **show cts interface**

```
Device# show cts interface gigabitethernet 1/1/1
```

```

Global Dot1x feature is Disabled
Interface GigabitEthernet1/1/1:
  CTS is enabled, mode:      MANUAL
  IFC state:                 OPEN
  Interface Active for 00:54:01.936
  Authentication Status:    NOT APPLICABLE
    Peer identity:          "unknown"
    Peer's advertised capabilities: "sap"
  Authorization Status:     SUCCEEDED
    Peer SGT:               18
    Peer SGT assignment:    Trusted
  SAP Status:                SUCCEEDED
  Version:                   2
  Configured pairwise ciphers:
    gcm-encrypt

  Replay protection:        enabled
  Replay protection mode:   STRICT

  Selected cipher:          gcm-encrypt

  Propagate SGT:            Enabled
  Cache Info:
    Expiration               : N/A
    Cache applied to link    : NONE

  Statistics:

```

```

authc success:          0
authc reject:           0
authc failure:          0
authc no response:      0
authc logoff:           0
sap success:            3
sap fail:               0
authz success:          4
authz fail:             0
port auth fail:        0

```

```
L3 IPM:  disabled.
```

アイデンティティ、接続、および SGT の機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	アイデンティティ、接続 および SGT	認証サーバに直接接続されているか、または接続は間接でも Cisco TrustSec ドメインを開始する最初のデバイスである Cisco TrustSec 対応デバイスは、シードデバイスと呼ばれます。他の Cisco TrustSec ネットワーク デバイスは非シードデバイスです。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 4 章

セキュリティグループ ACL ポリシーの設定

セキュリティ グループ アクセス コントロール リスト (SGACL) を使用して、ユーザと宛先リソースのセキュリティグループの割り当てに基づいて、ユーザが実行できる操作を制御できます。Cisco TrustSec ドメイン内のポリシーの適用は、軸の 1 つが送信元セキュリティグループ番号、もう 1 つの軸が宛先セキュリティグループ番号である、許可マトリクスで表示されます。マトリクスの本体の各セルには、送信元セキュリティグループから宛先セキュリティグループ宛てに送信されるパケットに適用される必要がある許可を指定する、SGACL の順序リストを含めることができます。

- [セキュリティグループ ACL ポリシーの設定の制限 \(45 ページ\)](#)
- [セキュリティグループの ACL ポリシーの情報 \(46 ページ\)](#)
- [セキュリティグループ ACL ポリシーの設定方法 \(47 ページ\)](#)
- [セキュリティグループ ACL ポリシーの設定例 \(57 ページ\)](#)
- [セキュリティグループ ACL ポリシーの機能履歴 \(59 ページ\)](#)

セキュリティグループ ACL ポリシーの設定の制限

- ハードウェアの制限により、Cisco TrustSec SGACL はハードウェアのパント (CPU バウンド) トラフィックに適用できません。ソフトウェアでの SGACL の適用は、スイッチ仮想インターフェイス (SVI)、レイヤ 2 およびレイヤ 3 の Location Identifier Separation Protocol (LISP)、およびループバック インターフェイスの CPU バウンドトラフィックに対してバイパスされます。
- SGACL ポリシーを設定する際に、IP バージョンを **IPv4** または **IPv6** から **非依存** (IPv4 と IPv6 の両方に適用) に変更した場合 (逆も同様)、IPv4 と IPv6 に対応する SGACL ポリシーは管理 VRF インターフェイスを介して完全にダウンロードされません。
- SGACL ポリシーを設定する際に、既存の IP バージョンを他のバージョン (**IPv4** または **IPv6** または **非依存**) に変更した場合 (逆も同様)、RADIUS を使用して Cisco Identity Services Engine (ISE) からの認可変更 (CoA) を実行できません。代わりに、SSH を使用して **cts refresh policy** コマンドを実行し、手動でポリシーをリフレッシュします。

- デフォルトのアクションを **deny all** とした SGT 許可モデルを使用する場合、デバイスのリロード後に Cisco TrustSec ポリシーが ISE サーバから部分的にダウンロードされることがあります。

これを回避するには、デバイスで静的ポリシーを定義します。**deny all** オプションが適用されている場合でも、静的ポリシーはトラフィックを許可します。これにより、デバイスは ISE サーバからポリシーをダウンロードし、定義された静的ポリシーを上書きできます。デバイス SGT では、グローバル コンフィギュレーションモードで次のコマンドを設定します。

- **cts role-based permissions from <sgt_num> to unknown**
- **cts role-based permissions from unknown to <sgt_num>**

セキュリティグループの ACL ポリシーの情報

このセクションでは、SGACL ポリシーの設定について説明します。

SGACL ロギング

標準 IP アクセスリストによって許可または拒否されたパケットに関するログメッセージが、デバイスによって表示されます。つまり、SGACL と一致するパケットがあった場合は、そのパケットに関するログ通知メッセージがコンソールに送信されます。コンソールに表示されるメッセージのレベルは、syslog メッセージを管理する **logging console** コマンドで管理されます。Cisco IOS XE Amsterdam 17.3.1 以前のリリースでは、SGACL ロギングは、CPU 集約型のメカニズムで行われていました。Cisco IOS XE Amsterdam 17.3.1 以降のリリースでは、SGACL ロギングは、はるかに高いロギングレートを可能にする NetFlow ハードウェアを使用するように拡張されました。



- (注) ハードウェアでの SGACL ロギングは、ロールベースアクセスコントロールリスト (RBACL) でのみサポートされています。

SGACL をトリガーする最初のパケットはフローを作成し、非アクティブフローとアクティブフローの NetFlow タイムアウトはそれぞれ 30 秒および 1 分でロギングされます。後続のパケットは、5 分間隔で収集された後、ロギングされます。ログメッセージにはアクセスリスト番号、パケットの許可または拒否に関する状況、パケットの送信元 IP アドレスまたは宛先 IP アドレス、パケットが入力されたインターフェイス、および直前の 5 分間に許可または拒否された送信元からのパケット数が示されます。



- (注)
- ハードウェアでの SGACL ロギングは NetFlow を使用して行われるため、NetFlow ベースの機能がインターフェイスに適用されると、そのインターフェイスのロギングは古いメカニズムにフォールバックします。NetFlow ベースの機能が削除されると、そのインターフェイスの NetFlow ハードウェアを介したロギングが再開されます。残りのインターフェイスは、NetFlow ハードウェアを介してロギングを継続します。
 - 一度にデバイスに接続できる NetFlow モニタは 15 台だけです。SGACL ロギングには、IPv4 および IPv6 ロギング用にそれぞれ 1 つの NetFlow モニタが必要です。NetFlow モニタがロギングに使用できない場合、SGACL ロギングは以前のメカニズムを介して行われます。必要な数の NetFlow モニタが使用可能になったら、**cts role-based permissions** コマンドを実行して、NetFlow ハードウェアを介してロギングを再度トリガーします。
 - ログアクセス制御エントリ (ACE) に、送信元ポート番号、宛先ポート番号、および使用中のプロトコル以外のフィールドがある場合、ロギングは以前のメカニズムを介して行われます。

セキュリティグループ ACL ポリシーの設定方法

このセクションでは、さまざまな SGACL ポリシー設定について説明します。

SGACL ポリシーの設定プロセス

SGACL ポリシーを設定してイネーブルにするには、次の手順を実行します。

1. SGACL ポリシーの設定は、Cisco Secure Access Control Server (ACS) または Cisco Identity Services Engine (ISE) の主にポリシー管理機能によって実行する必要があります。

SGACL ポリシーの設定のダウンロードに Cisco Secure ACS または Cisco ISE 上の AAA を使用しない場合は、SGACL のマッピングとポリシーを手動で設定できます。



- (注)
- Cisco Secure ACS または Cisco ISE からダイナミックにダウンロードされた SGACL ポリシーは、競合のローカル定義されたポリシーよりも優先されます。
2. ルーテッドポートの出力トラフィックに対する SGACL ポリシーの適用を有効にするには、「SGACL ポリシーの適用のグローバルな有効化」セクションに記載されているように、SGACL ポリシー適用を有効にします。
 3. VLAN 内のスイッチングされたトラフィック、または VLAN に関連付けられた SVI に転送されるトラフィックに対して SGACL ポリシーの適用を有効にするには、「VLAN に対する SGACL ポリシーの適用の有効化」セクションの説明に従って、特定の VLAN に対して SGACL ポリシーの適用を有効にします。

SGACL ポリシーの適用のグローバルな有効化

Cisco TrustSec をイネーブルにしたルーテッドインターフェイスで SGACL ポリシーの強制をグローバルにイネーブルにする必要があります。

ルーテッドインターフェイスの SGACL ポリシーの強制をイネーブルにするには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	cts role-based enforcement 例： Device(config)# cts role-based enforcement	ルーテッドインターフェイスで Cisco TrustSec SGACL ポリシーの強制をイネーブルにします。
ステップ 4	end 例： Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

インターフェイスあたりの SGACL ポリシーの適用の有効化

まず、Cisco TrustSec を有効にしたルーテッドインターフェイスで SGACL ポリシーの適用をグローバルに有効にする必要があります。この機能はポート チャネルインターフェイスではサポートされません。

レイヤ 3 インターフェイスでの SGACL ポリシーの適用を有効化するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	interface type slot/port 例： Device(config)# interface gigabitethernet 6/2	インターフェイスを設定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	cts role-based enforcement 例： Device(config-if)# cts role-based enforcement	ルーテッド インターフェイスで Cisco TrustSec SGACL ポリシーの強制的イネーブルにします。
ステップ 5	end 例： Device(config-if)# end	インターフェイス コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	show cts interface 例： Device# show cts interface	(任意) インターフェイスごとの Cisco TrustSec ステートおよび統計情報を表示します。

VLAN に対する SGACL ポリシーの強制的イネーブル化

VLAN 内のスイッチングされたトラフィック、または VLAN に関連付けられた SVI に転送されるトラフィックに対してアクセス コントロールを適用するには、特定の VLAN に対して SGACL ポリシーの強制的イネーブルにする必要があります。

VLAN または VLAN リスト内で、SGACL ポリシーの強制的イネーブルにするには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	cts role-based enforcement vlan-list <i>vlan-list</i> 例： Device(config)# cts role-based enforcement vlan-list 31-35,41	VLAN または VLAN リストで Cisco TrustSec SGACL ポリシーの強制をイネーブルにします。
ステップ 4	end 例： Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SGACL モニタ モードの設定

SGACL モニタモードを設定する前に、次の点を確認してください。

- Cisco TrustSec が有効になっている。
- カウンタが有効になっている。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts role-based monitor all 例： Device(config)# cts role-based monitor all	グローバルモニタモードを有効にします。
ステップ 4	cts role-based monitor permissions from {sgt_num} to {dgt_num} [ipv4 ipv6] 例： Device(config)# cts role-based permissions from 2 to 3 ipv4	IPv4/IPv6 ロール ベース アクセス コントロールリスト (RBACL) (セキュリティグループタグ接続先グループタグ [SGT-DGT] ペア) のモニタモードを有効にします。7
ステップ 5	end 例： Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	show cts role-based permissions from {sgt_num} to {dgt_num} [ipv4 ipv6] [details] 例： Device# show cts role-based permissions from 2 to 3 ipv4 details	(任意) SGACL ポリシーとペアごとのモニタモード機能に関する詳細を表示します。<SGT-DGT> ペアに対してセルごとのモニタモードが有効になっている場合、コマンド出力が表示されます。
ステップ 7	show cts role-based counters [ipv4 ipv6] 例： Device# show cts role-based counters ipv4	(任意) IPv4 および IPv6 イベントのすべての SGACL 適用の統計情報を表示します。

SGACL ポリシーの手動設定

SGT と DGT の範囲にバインドされたロールベース アクセス コントロール リストは、出力トラフィックに適用される Cisco TrustSec ポリシーである SGACL を形成します。SGACL ポリシーの設定は、Cisco ISE または Cisco Secure ACS のポリシー管理機能を使用するのが最適です。SGACL ポリシーを手動で（つまりローカルに）設定するには、ロールベース ACL を設定し、ロールベース ACL を SGT の範囲にバインドします。



- (注) Cisco ISE または Cisco ACS から動的にダウンロードされた SGACL ポリシーは、手動で設定されたポリシーと競合する場合、それを上書きします。

IPv4 SGACL ポリシーの設定と適用



- (注) SGACL および RBACL を設定する場合、名前付きアクセスコントロールリスト (ACL) はアルファベットで始まる必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	ip access-list role-based <i>rbacl-name</i> 例： <pre>Device(config)# ip access-list role-based allow_webtraff</pre>	RBACLを作成して、ロールベース ACL コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	<pre>{[<i>sequence-number</i>] default permit deny remark}</pre> 例： <pre>Device(config-rb-acl)# 10 permit tcp dst eq 80 dst eq 20</pre>	RBACL のアクセス コントロール エントリ (ACE) を指定します。 拡張名前付きアクセス リスト コンフィギュレーション モードで使用可能なコマンドおよびオプションの大部分を、送信元および宛先フィールドを省略して使用できます。 次の ACE キーワードはサポートされていません。 <ul style="list-style-type: none"> • reflect • evaluate • time-range
ステップ 5	exit 例： <pre>Device(config-rb-acl)# exit</pre>	ロールベース ACL コンフィギュレーション モードを終了し、グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 6	cts role-based permissions {default [from {<i>sgt_num</i> unknown} to {<i>dgt_num</i> unknown}]} {<i>rbacls</i> ipv4 <i>rbacls</i>} 例： <pre>Device(config)# cts role-based permissions from 55 to 66 allow_webtraff</pre>	SGT と DGT を RBACL にバインドします。この設定は、Cisco ISE または Cisco Secure ACS で設定された許可マトリックスにデータを入力することに似ています。 <ul style="list-style-type: none"> • default : デフォルトの権限リスト。 • <i>sgt_num</i> : 0 ~ 65,519。送信元グループタグ。 • <i>dgt_num</i> : 0 ~ 65,519。宛先グループタグ。 • unknown : SGACL がセキュリティグループ (送信元または宛先) を特定できないパケットに適用されます。 • ipv4 : RBACL が IPv4 であることを示します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • <i>rbacls</i> : RBACL の名前。
ステップ 7	end 例 : Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 8	show cts role-based permissions 例 : Device# show cts role-based permissions	(任意) RBACL 設定に対する権限を表示します。
ステップ 9	show ip access-lists {rbacls ipv4 rbacls} 例 : Device# show ip access-lists allow_webtraff	(任意) すべての RBACL または指定された RBACL の ACE を表示します。

IPv6 SGACL ポリシーの設定

IPv6 SGACL ポリシーを手動で設定するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	ipv6 access-list role-based sgacl-name 例 : Device(config)# ipv6 access-list role-based sgaclname	名前付き IPv6 SGACL を作成して、IPv6 ロールベース ACL コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	{permit deny } protocol [dest-option dest-option-type {doh-number doh-type}] [dscp cp-value] [flow-label fl-value] [mobility mobility-type {mh-number mh-type}] [routing routing-type routing-number] [fragments] [log log-input] [sequence seqno] 例 :	RBACL のアクセス コントロール エントリ (ACE) を指定します。 拡張名前付きアクセス リスト コンフィギュレーション モードで使用可能なコマンドおよびオプションの大部分を、送信元および宛先フィールドを省略して使用できます。

	コマンドまたはアクション	目的
	Device(config-ipv6rb-acl)# permit 33 dest-option dscp af11	次の ACE キーワードはサポートされていません。 <ul style="list-style-type: none"> • reflect • evaluate • time-range
ステップ 5	end 例： Device(config-ipv6rb-acl)# end	IPv6 ロールベース ACL コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

手動で SGACL ポリシーを適用する方法

手動で SGACL ポリシーを適用するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	cts role-based permissions default [ipv4 ipv6] sgacl-name1 [sgacl-name2 [sgacl-name3 ...]] 例： Device(config)# cts role-based permissions default MYDEFAULTSGACL	デフォルト SGACL を指定します。デフォルト ポリシーは明示的なポリシーが送信元と宛先セキュリティグループの間がない場合に適用されます。
ステップ 4	cts role-based permissions from {source-sgt unknown} to {dest-sgt unknown} [ipv4 ipv6] sgacl-name1 [sgacl-name2 [sgacl-name3 ...]] 例： Device(config)# cts role-based permissions from 3 to 5 SRB3 SRB5	SGT および DGT に適用する SGACL を指定します。source-sgt および dest-sgt の値範囲は 1～65533 です。デフォルトでは、SGACL は IPv4 であると見なされます。 <ul style="list-style-type: none"> • from : 送信元 SGT を指定します。 • to : 宛先セキュリティグループを指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • unknown : SGACL がセキュリティグループ (送信元または宛先) を特定できないパケットに適用されます。 <p>(注) ACS から動的にダウンロードされた SGACL ポリシーは、競合の手動ポリシーよりも優先されます。</p>
ステップ 5	end 例 : Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SGACL ポリシーの表示

Cisco TrustSec デバイスクレデンシャルと AAA の設定後、認証サーバからダウンロードされたか、または手動で設定された Cisco TrustSec SGACL ポリシーを検証できます。Cisco TrustSec は、インターフェイスに対する認証および許可、SXP または手動 IP アドレスおよび SGT の手動マッピングによって新しい SGT 交換プロトコル (SXP) を学習すると、SGACL ポリシーをダウンロードします。

キーワードを使用または省略して、許可マトリックスの全部または一部を表示できます。

- **from** キーワードを省略すると、許可マトリックスのカラムが表示されます。
- **to** キーワードを省略すると、許可マトリックスの行が表示されます。
- **from** および **to** キーワードを省略すると、許可マトリックス全体が表示されます。
- **from** および **to** キーワードが指定されている場合、許可マトリックスから 1 つのセルが表示され、**details** キーワードを使用できます。**details** が入力された場合、1 つのセルの SGACL の ACE が表示されます。

SGACL ポリシーの許可マトリックスの内容を表示するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	show cts role-based permissions default [ipv4 ipv6 details] 例： Device# show cts role-based permissions default MYDEFAULTSGACL	デフォルトポリシーの SGACL のリストを表示します。
ステップ 3	show cts role-based permissions from {source-sgt unknown} to {dest-sgt unknown}] [ipv4 ipv6 details] 例： Device# show cts role-based permissions from 3	SGT および DGT に適用する SGACL を指定します。 <i>source-sgt</i> および <i>dest-sgt</i> の値範囲は 1～65533 です。デフォルトでは、SGACL は IPv4 であると見なされます。 <ul style="list-style-type: none"> • from : 送信元 SGT を指定します。 • to : 宛先セキュリティグループを指定します。 • unknown : SGACL がセキュリティグループ（送信元または宛先）を特定できないパケットに適用されます。 (注) ACS から動的にダウンロードされた SGACL ポリシーは、競合の手動ポリシーよりも優先されます。
ステップ 4	exit 例： Device# exit	特権 EXEC モードを終了します。

ダウンロードされた SGACL ポリシーのリフレッシュ

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	cts refresh policy {peer [peer-id] sgt [sgt_number default unknown]} 例：	認証サーバからの SGACL ポリシーの即時リフレッシュを実行します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>Device# cts refresh policy peer my_cisco_ise</pre>	<ul style="list-style-type: none"> • <i>peer-id</i> が指定される場合、指定されたピア接続に関連するポリシーだけがリフレッシュされます。すべてのピアポリシーを更新するには、IDを指定しないで[Enter]を押します。 • SGT 番号が指定されている場合、その SGT に関連するポリシーだけがリフレッシュされます。すべての SGT ポリシーをリフレッシュするには、SGT 番号を指定せずに[Enter]を押します。デフォルトポリシーをリフレッシュするには、[default]を選択します。不明ポリシーをリフレッシュするには、[unknown]を選択します。
ステップ 3	<pre>exit</pre> <p>例 :</p> <pre>Device# exit</pre>	特権 EXEC モードを終了します。

セキュリティグループ ACL ポリシーの設定例

次のセクションでは、さまざまな SGACL ポリシーの設定例を示します。

例 : SGACL ポリシーの適用のグローバルな有効化

次に、SGACL ポリシーの適用をグローバルに有効にする例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based enforcement
```

例 : インターフェイスあたりの SGACL ポリシーの適用の有効化

次に、インターフェイスごとに SGACL ポリシーの適用を有効にする例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# interface gigabitethernet 1/0/2
Device(config-if)# cts role-based enforcement
Device(config-if)# end
```

例：VLAN に対する SGACL ポリシーの適用の有効化

次に、VLAN 上で SGACL ポリシーの適用を有効にする例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based enforcement vlan-list 31-35,41
Device(config)# exit
```

例：SGACL モニタモードの設定

次に、SGACL モニタモードを設定する例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based monitor enable
Device(config)# cts role-based permissions from 2 to 3 ipv4
Device# show cts role-based permissions from 2 to 3 ipv4

IPv4 Role-based permissions from group 2:sgt2 to group 3:sgt3 (monitored):
  denytcpudpicmp-10
  Deny IP-00

Device# show cts role-based permissions from 2 to 3 ipv4 details

IPv4 Role-based permissions from group 2:sgt2 to group 3:sgt3 (monitored):
  denytcpudpicmp-10
  Deny IP-00

Details:
Role-based IP access list denytcpudpicmp-10 (downloaded)
  10 deny tcp
  20 deny udp
  30 deny icmp
Role-based IP access list Permit IP-00 (downloaded)
  10 permit ip

Device# show cts role-based counters ipv4

Role-based IPv4 counters
From    To    SW-Denied  HW-Denied  SW-Permitt  HW_Permitt  SW-Monitor  HW-Monitor
*       *     0          0          8           18962       0           0
2       3     0          0          0           0           0           341057
```

例：SGACL ポリシーの手動設定

次に、SGACL ポリシーを手動で設定する例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# ip access role allow_webtraff
Device(config-rb-acl)# 10 permit tcp dst eq 80
Device(config-rb-acl)# 20 permit tcp dst eq 443
Device(config-rb-acl)# 30 permit icmp
Device(config-rb-acl)# 40 deny ip
Device(config-rb-acl)# exit
```

```
Device(config)# cts role-based permissions from 55 to 66 allow_webtraff

Device# show ip access allow_webtraff

Role-based IP access list allow_webtraff
 10 permit tcp dst eq www
 20 permit tcp dst eq 443
 30 permit icmp
 40 deny ip

Device# show cts role-based permissions from 2 to 5

Role-based permissions from group 2 to group 5:
srb2
srb5
```

例：SGACL の手動適用

次に、SGACL ポリシーを手動で適用する例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based permissions default MYDEFAULTSGACL
Device(config)# cts role-based permissions from 3 to 5 SRB3 SRB5
Device(config)# exit
```

例：SGACL ポリシーの表示

次に、セキュリティグループ 3 から送信されたトラフィックの SGACL ポリシーの許可マトリクスの内容を表示する例を示します。

```
Device> enable
Device# show cts role-based permissions from 3

Role-based permissions from group 3 to group 5:
  SRB3
  SRB5
Role-based permissions from group 3 to group 7:
  SRB4
```

セキュリティグループ ACL ポリシーの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	セキュリティグループ ACL ポリシー	SGACL を使用して、ユーザと宛先リソースのセキュリティグループの割り当てに基づいて、ユーザが実行できる操作を制御できます。
Cisco IOS XE Amsterdam 17.3.1	拡張 SGACL ロギング	拡張 ACL ロギングにより、NetFlow ハードウェアを使用してはるかに高いレートでロギングを実行できます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 5 章

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティ

Cisco TrustSec セキュリティ グループ アクセス コントロール リスト (SGACL) は、Cisco StackWise 技術をサポートしているスイッチでのハイアベイラビリティ機能をサポートしています。この技術によってステータフルな冗長性が提供され、スイッチスタックはアクセス制御 エントリを強制し、処理できます。

- [Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの前提条件 \(61 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの制約事項 \(61 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティに関する情報 \(62 ページ\)](#)
- [Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの確認 \(63 ページ\)](#)
- [SGACL ハイアベイラビリティの機能履歴 \(64 ページ\)](#)

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの前提条件

このマニュアルでは、次のことを前提としています。

- Cisco TrustSec およびセキュリティ グループ アクセス コントロール リスト (SGACL) 構成を理解している。
- デバイスは、スタックとして機能するように設定されている。
- スタック内のすべてのデバイスが同一バージョンの Cisco IOS XE ソフトウェアを実行している。

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの制約事項

- アクティブスイッチとスタンバイスイッチの両方で同時に障害が発生した場合、SGACL のステータフルスイッチオーバーは発生しません。

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティに関する情報

Cisco TrustSec セキュリティ グループ アクセス コントロール リスト (SGACL) は、Cisco StackWise 技術をサポートしているスイッチでのハイアベイラビリティ機能をサポートしています。この技術によってステータフルな冗長性が提供され、スイッチスタックはアクセス制御 エントリを強制し、処理できます。

この機能を有効にする Cisco TrustSec 固有の設定はありません。これは、Cisco IOS XE Denali 16.2.1 以降のリリースでサポートされます。

高可用性の概要

スイッチスタックでは、スタックマネージャが最も高い優先順位を持つスイッチをアクティブ スイッチとして割り当て、次に高い優先順位を持つスイッチをスタンバイスイッチとして割り当てます。自動または CLI ベースのステータフルスイッチオーバー中は、スタンバイスイッチがアクティブスイッチになり、次に優先順位の高いスイッチなどがスタンバイスイッチになります。

運用データは、初期のシステムブートアップ、運用データの変更（認可変更 (CoA) と呼ばれる）、または運用データのリフレッシュ時に、アクティブスイッチからスタンバイスイッチに同期されます。

ステータフルスイッチオーバー中に、新たにアクティブになったスイッチは、運用データを要求してダウンロードします。環境データ (ENV-data) とロールベース アクセス コントロール リスト (RBACL) は、リフレッシュ時間が完了するまで更新されません。

次の運用データがアクティブスイッチにダウンロードされます。

- 環境データ (ENV-data) : リフレッシュ時または初期化時に RBACL 情報を取得するための優先サーバリストで構成される可変長フィールド。
- Protected Access Credential (PAC) : セキュアトンネリング (EAP-FAST) のトンネルを介した拡張可能な認証プロトコル Flexible Authentication (FlexAuth; フレキシブル認証) を保護するために、スイッチとオーセンティケータ間で相互に一意に共有される共有秘密。
- ロールベースのポリシー (RBACL または SGACL) : スイッチ上のすべてのセキュリティ グループタグ (SGT) マッピングのポリシー定義で構成される可変長ロールベースのポリシーリスト。



(注) デバイス ID とパスワードの詳細で構成される Cisco TrustSec クレデンシャルは、アクティブスイッチでコマンドとして実行されます。

Cisco TrustSec SGACL のハイアベイラビリティの確認

Cisco TrustSec SGACL ハイアベイラビリティ設定を確認するには、アクティブスイッチとスタンバイスイッチの両方で **show cts role-based permissions** コマンドを実行します。コマンドの出力は、両方のスイッチで同じである必要があります。

次に、アクティブスイッチでの **show cts role-based permissions** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts role-based permissions

IPv4 Role-based permissions default (monitored):
    default_sgacl-01
    Deny IP-00
IPv4 Role-based permissions from group 10:SGT_10 to group 15:SGT_15:
    SGACL_3-01
IPv4 Role-based permissions from group 14:SGT_14 to group 15:SGT_15:
    multiple_ace-14
RBACL Monitor All for Dynamic Policies : FALSE
RBACL Monitor All for Configured Policies : FALSE
```

次に、スタンバイスイッチでの **show cts role-based permissions** コマンドの出力例を示します。

```
Device-stby# show cts role-based permissions

IPv4 Role-based permissions default (monitored):
    default_sgacl-01
    Deny IP-00
IPv4 Role-based permissions from group 10:SGT_10 to group 15:SGT_15:
    SGACL_3-01
IPv4 Role-based permissions from group 14:SGT_14 to group 15:SGT_15:
    multiple_ace-14
RBACL Monitor All for Dynamic Policies : FALSE
RBACL Monitor All for Configured Policies : FALSE
```

ステートフルスイッチオーバー後、アクティブスイッチで次のコマンドを実行して機能を確認します。

次に、**show cts pacs** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts pacs

AID: A3B6D4D8353F102346786CF220FF151C
PAC-Info:
    PAC-type = Cisco Trustsec
    AID: A3B6D4D8353F102346786CF220FF151C
    I-ID: CTS_ED_21
    A-ID-Info: Identity Services Engine
    Credential Lifetime: 17:22:32 IST Mon Mar 14 2016
PAC-Opaque:
000200B80003000100040010A3B6D4D8353F102346786CF220FF151C0006009C00030100E044B2650D8351FD06
F23623C470511E0000001356DEA96C00093A80538898D40F633C368B053200D4C9D2422A7FEB4837EA9DBB89D1
E51DA4E7B184E66D3D5F2839C11E5FB386936BB85250C61CA0116FDD9A184C6E96593EEAF5C39BE08140AFBB19
4EE701A0056600CFF5B12C02DD7ECEAA3CCC8170263669C483BD208052A46C31E39199830F794676842ADEECBB
A30FC4A5A0DEDA93
Refresh timer is set for 01:00:05
```

次に、**show cts environment-data** コマンドの出力例を示します。

```

Device# show cts environment-data

CTS Environment Data
=====
Current state = COMPLETE
Last status = Successful
Local Device SGT:
  SGT tag = 0:Unknown
Server List Info:
Installed list: CTSServerList1-000D, 1 server(s):
  *Server: 10.78.105.47, port 1812, A-ID A3B6D4D8353F102346786CF220FF151C
  Status = ALIVE
  auto-test = FALSE, keywrap-enable = FALSE, idle-time = 60 mins, deadtime = 20 secs
Multicast Group SGT Table:
Security Group Name Table:
0001-45 :
  0-00:Unknown
  2-ba:SGT_2
  3-00:SGT_3
  4-00:SGT_4
  5-00:SGT_5
  6-00:SGT_6
  7-00:SGT_7
  8-00:SGT_8
  9-00:SGT_9
  10-16:SGT_10
!
!
!
Environment Data Lifetime = 3600 secs
Last update time = 14:32:53 IST Mon Mar 14 2016
Env-data expires in 0:00:10:04 (dd:hr:mm:sec)
Env-data refreshes in 0:00:10:04 (dd:hr:mm:sec)
Cache data applied = NONE
State Machine is running

```

次に、ステートフル スイッチオーバー後の **show cts role-based permissions** コマンドの出力例を示します。

```

Device# show cts role-based permissions

IPv4 Role-based permissions default:
  default_sgacl-01
  Deny IP-00
IPv4 Role-based permissions from group 10:SGT_10 to group 15:SGT_15:
  SGACL_3-01
IPv4 Role-based permissions from group 14:SGT_14 to group 15:SGT_15:
  multiple_ace-14
RBACL Monitor All for Dynamic Policies : FALSE
RBACL Monitor All for Configured Policies : FALSE

```

SGACL ハイアベイラビリティの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	SGACL ハイ アベイラビリティ	Cisco TrustSec SGACL は、Cisco StackWise 技術をサポートしているスイッチでのハイアベイラビリティ機能をサポートしています。この技術によってステータフルな冗長性が提供され、スイッチスタックはアクセス制御エントリを強制し、処理できます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 6 章

SGT 交換プロトコルの設定

SGT 交換プロトコル (SXP) を使用すると、Cisco TrustSec のハードウェアサポートがないネットワークデバイスにセキュリティグループタグ (SGT) を伝播できます。このモジュールでは、ネットワークのスイッチに Cisco TrustSec SXP を設定する方法について説明します。

Cisco TrustSec は、信頼できるネットワーク デバイスのドメインを確立することによってセキュアネットワークを構築します。ドメイン内の各デバイスは、そのピアによって認証されます。ドメイン内のデバイス間リンクでの通信は、暗号化、メッセージ整合性検査、データパスリブレイ防止メカニズムを組み合わせたセキュリティで保護されます。

セキュリティグループタグ (SGT) 交換プロトコル (SXP) は、CTS をサポートする複数のプロトコルの 1 つであり、本書では Cisco TrustSec-SXP と呼びます。Cisco TrustSec-SXP は、パケットのタグ付け機能がないネットワークデバイス全体に IP と SGT のバインドの情報を伝播する、制御プロトコルです。Cisco TrustSec-SXP は、IP と SGT のバインドをネットワーク上の認証ポイントからアップストリームデバイスへ渡します。このプロセスにより、スイッチ、ルータ、ファイアウォールのセキュリティ サービスは、アクセス デバイスから学習したアイデンティティ情報を伝えることができます。

- [SGT 交換プロトコルの前提条件 \(67 ページ\)](#)
- [SGT 交換プロトコルの制約事項 \(68 ページ\)](#)
- [SGT 交換プロトコルに関する情報 \(68 ページ\)](#)
- [SGT 交換プロトコルの設定方法 \(70 ページ\)](#)
- [SGT 交換プロトコルの設定例 \(76 ページ\)](#)
- [SGT 交換プロトコルの接続の確認 \(76 ページ\)](#)
- [SGT 交換プロトコルの機能履歴 \(77 ページ\)](#)

SGT 交換プロトコルの前提条件

SXP を導入する前に、Cisco TrustSec-SGT Over Exchange Protocol (SXP) ネットワークを確立する必要があります。このネットワークには次の前提条件があります。

- Cisco TrustSec の機能を既存のルータで使用するには、Cisco TrustSec のセキュリティ ライセンスを購入していること。ルータを発注済みで Cisco TrustSec の機能が必要な場合は、発送前に、このライセンスが使用するルータにプリインストールされていること。

- Cisco TrustSec ソフトウェアをすべてのネットワークデバイス上で実行すること。
- すべてのネットワークデバイス間が接続されていること。
- 認証には Cisco Identity Services Engine 1.0 が必要です。認証には Secure Access Control Server (ACS) Express Appliance サーバも使用できますが、Cisco TrustSec ではすべての ACS 機能がサポートされていません。ACS 5.1 が Cisco TrustSec-SXP ライセンスで動作していること。
- 異なるルータで異なる値に **retry open timer** コマンドを設定します。

SGT 交換プロトコルの制約事項

- Cisco TrustSec 交換プロトコルは論理インターフェイスでサポートされておらず、物理インターフェイスだけでサポートされています。
- Cisco IOS XE Everest 16.6.4 以降のリリースでは、ダイナミックホスト制御プロトコル (DHCP) スヌーピングが有効になっている場合、DHCP パケットに対する Cisco TrustSec の適用は、適用ポリシーによってバイパスされます。

SGT 交換プロトコルに関する情報

このセクションでは、SGT 交換プロトコルについて説明します。

SGT 交換プロトコルの概要

Cisco TrustSec は、信頼できるネットワークデバイスのドメインを確立することによってセキュアネットワークを構築します。ドメイン内の各デバイスは、そのピアによって認証されます。ドメイン内のデバイス間リンクでの通信は、暗号化、メッセージ整合性検査、データパスリプレイ防止メカニズムを組み合わせたセキュリティで保護されます。

セキュリティグループタグ (SGT) 交換プロトコル (SXP) は、Cisco TrustSec をサポートする複数のプロトコルの 1 つです。SXP は、パケットのタグ付け機能がないネットワークデバイス全体に IP と SGT のバインドの情報を伝播する、制御プロトコルです。Cisco TrustSec は、出力インターフェイスでパケットをフィルタリングします。エンドポイント認証時に、Cisco TrustSec ドメイン (エンドポイントの IP アドレス) にアクセスするホストはダイナミックホスト制御プロトコル (DHCP) スヌーピングおよび IP デバイストラッキングによってアクセスデバイスで SGT に関連付けられます。アクセスデバイスは、Cisco TrustSec ハードウェア対応出力のデバイスに、SXP 経路でそのアソシエーションまたはバインドを送信します。これらのデバイスは、送信元の IP と SGT のバインドのテーブルを維持します。パケットは、セキュリティグループアクセスコントロールリスト (SGACL) を適用することにより、Cisco TrustSec ハードウェア対応デバイスによって出力インターフェイスでフィルタリングされます。SXP は、IP と SGT のバインドをネットワーク上の認証ポイントからアップストリームデバイスへ渡しま

す。このプロセスにより、スイッチ、ルータ、ファイアウォールのセキュリティサービスは、アクセス デバイスから学習したアイデンティティ情報を伝えることができます。

SGT は、次のエンドポイント アドミッション コントロール (EAC) アクセス方式のいずれかを使用して割り当てることができます。

- 802.1X ポートベースの認証
- MAC 認証バイパス (MAB)
- Web 認証

SXP は、トランスポートプロトコルとして TCP を使用し、接続を開始するために TCP ポート 64999 を使用します。SXP は、認証と完全性チェックに Message Digest 5 (MD5) を使用します。これには、定義された2つのロールとして、スピーカー (イニシエータ) とリスナー (レシーバ) があります。

セキュリティ グループ タギング

セキュリティグループタグは、一意のロールに割り当てられる一意の 16 ビットタグです。送信元ユーザ、デバイス、またはエンティティの権限を表し、Cisco TrustSec ドメインの入力でタグ付けされます。SXP は、認証時に取得したデバイスおよびユーザのクレデンシャルを使用して、ネットワークに進入するパケットをセキュリティグループ (SG) で分類します。このパケット分類は、Cisco TrustSec ネットワークへの入力時にパケットにタグ付けされることにより維持されます。タグによってパケットはデータベース全体を通じて識別され、セキュリティおよびその他のポリシー基準が適用されます。セキュリティグループタグ (SGT) によってエンドポイントデバイスはトラフィックをフィルタリングできるので、ネットワークへのアクセス コントロールポリシーの適用が可能になります。静的ポート ID は、ポートに接続された特定のエンドポイントの SGT 値をルックアップするために使用されます。

SGT の割り当て

パケットのセキュリティグループタグ (SGT) は、パケットが Cisco TrustSec リンクでタグ付けされたとき、または単一のエンドポイントがポートで認証されたときに、ポートレベルで割り当てることができます。着信パケットの SGT は、次の方法で決定されます。

- SGT でタグ付けされたパケットが信頼ポートに着信すると、パケットのタグはパケットの SGT と見なされます。
- パケットが SGT でタグ付けされているが、信頼できないポートに着信した場合、パケットの SGT は無視され、ピア SGT がポートに設定されます。
- パケットに SGT がない場合、ピア SGT はポートに設定されます。

SGT を割り当てる次の方法がサポートされています。

- IPM (dot1x、MAB、Web 認証)

- VLAN と VLAN と SGT のマッピングは、認証方式がすでに IP アドレスを割り当てられた認証済みエントリに SGT を提供する際に確立されます。デバイスプロセスは、エンドポイントセッションをモニタし、IP と SGT のバインドの変更または削除を検出します。
- SXP (SGT 交換プロトコル) リスナー

SGT 交換プロトコルの設定方法

このセクションでは、SGT 交換プロトコルを設定する方法について説明します。

デバイス SGT の手動設定

通常の Cisco TrustSec 動作では、認証サーバがデバイスから発信されるパケット用に、そのデバイスに SGT を割り当てます。認証サーバにアクセスできない場合は、使用する SGT を手動で設定できますが、認証サーバから割り当てられた SGT のほうが、手動で割り当てた SGT よりも優先されます。

デバイスの SGT を手動で設定するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	cts sgt tag 例： Device(config)# cts sgt tag	デバイスから送信されるパケットの SGT を設定します。tag 引数は 10 進表記です。指定できる範囲は 1～65533 です。
ステップ 3	exit 例： Device(config)# exit	設定モードを終了します。

SXP ピア接続の設定

両方のデバイスで SXP ピア接続を設定する必要があります。一方のデバイスはスピーカーで、他方のデバイスはリスナーになります。パスワード保護を使用している場合は、必ず両エンドに同じパスワードを使用してください。



- (注) デフォルトの SXP 送信元 IP アドレスが設定されておらず、かつ接続の SXP 送信元アドレスが指定されていない場合、Cisco TrustSec ソフトウェアは既存のローカル IP アドレスから SXP 送信元 IP アドレスを抽出します。SXP 送信元アドレスは、デバイスから開始される各 TCP 接続ごとに異なる場合があります。

SXP ピア接続を設定するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp connection peer peer-ipv4-addr[source src-ipv4-addr] password {default none} mode {local peer} {speaker listener} { vrf vrf-name} 例 : Device(config)# cts sxp connection peer 10.10.1.1 password default mode local listener	SXP アドレス接続を設定します。 オプションの source キーワードには発信元デバイスの IPv4 アドレスを指定します。アドレスが指定されていない場合、接続は、デフォルトの送信元アドレス (設定されている場合)、またはポートのアドレスを使用します。 password キーワードには、SXP で接続に使用するパスワードを指定します。次のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> default : cts sxp default password コマンドを使用して設定したデフォルトの SXP パスワードを使用します。 none : パスワードを使用しないでください。 mode キーワードでは、リモートピアデバイスのロールを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> local : 指定したモードはローカルデバイスを参照します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • peer : 指定したモードはピアデバイスを参照します。 • speaker : デフォルトこのデバイスが接続の際にスピーカーになります。 • listener : このデバイスが接続の際にリスナーになります。 <p>オプションの vrf キーワードでは、ピアに対する VRF を指定します。デフォルトはデフォルト VRF です。</p>
ステップ 4	exit 例 : Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 5	show cts sxp connections 例 : Device# show cts sxp connections	(任意) SXP 接続情報を表示します。

デフォルトの SXP パスワードの設定

デフォルトでは、SXP は接続のセットアップ時にパスワードを使用しません。

デフォルト SXP パスワードを設定するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> • パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp default password [0 6 7]password 例 : Device(config)# cts sxp default password 0 hello	SXP のデフォルトパスワードを設定します。クリアテキストパスワード (0 を使用するかオプションなし) または暗号化パスワード (6 または 7 オプションを

	コマンドまたはアクション	目的
		使用) を入力できます。パスワードの最大長は 32 文字です。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

デフォルトの SXP 送信元 IP アドレスの設定

SXP は送信元 IP アドレスが指定されないと、新規の TCP 接続すべてにデフォルトの送信元 IP アドレスを使用します。デフォルト SXP 送信元 IP アドレスを設定しても、既存の TCP 接続には影響しません。

デフォルト SXP 送信元 IP アドレスを設定するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp default source-ip src-ip-addr 例： Device(config)# cts sxp default source-ip 10.0.1.2	SXP のデフォルトの送信元 IP アドレスを設定します。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SXP の復帰期間の変更

ピアが SXP 接続を終了すると、内部ホールドダウン タイマーが開始されます。内部ホールドダウンタイマーが終了する前にピアが再接続すると、SXP 復帰期間タイマーが開始されます。SXP 復帰期間タイマーがアクティブな間、Cisco TrustSec ソフトウェアは前回の接続で学習した SGT マッピング エントリを保持し、無効なエントリを削除します。デフォルト値は 120 秒

(2分) です。SXP 復帰期間を 0 秒に設定すると、タイマーがディセーブルになり、前回の接続のすべてのエントリが削除されます。

SXP の復帰期間を変更するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp reconciliation period seconds 例： Device(config)# cts sxp reconciliation period 360	SXP 復帰タイマーを変更します。デフォルト値は 120 秒 (2 分) です。範囲は 0 ~ 64000 です。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SXP リトライ期間の変更

SXP リトライ期間によって、Cisco TrustSec ソフトウェアが SXP 接続を再試行する頻度が決まります。SXP 接続が正常に確立されなかった場合、Cisco TrustSec ソフトウェアは SXP リトライ期間タイマーの終了後に、新たな接続の確立を試行します。デフォルト値は 120 秒です。SXP 再試行期間を 0 秒に設定するとタイマーは無効になり、接続は再試行されません。

SXP のリトライ期間を変更するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例：	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	Device# configure terminal	
ステップ 3	cts sxp retry period seconds 例： Device(config)# cts sxp retry period 360	SXP リトライ タイマーを変更します。デフォルト値は 120 秒 (2 分) です。範囲は 0 ~ 64000 です。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SXP で学習された IP アドレスと SGT マッピングの変更をキャプチャするための syslog の作成方法

グローバル コンフィギュレーション モードで **cts sxp log binding-changes** コマンドを設定すると、IP アドレスと SGT バインドの変更 (追加、削除、変更) が発生するたびに SXP の syslog (sev 5 syslog) が生成されます。これらの変更は SXP 接続で学習されて伝播されます。デフォルトは、**no cts sxp log binding-changes** です。

バインディングの変更のログギングをイネーブルにするには、次の作業を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp log binding-changes 例： Device(config)# cts sxp log binding-changes	IP と SGT のバインドの変更のログギングを有効にします。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SGT 交換プロトコルの設定例

このセクションでは、SGT 交換プロトコルの設定例を示します。

例：Cisco TrustSec SXP および SXP ピア接続の有効化

以下に、SXP を有効にし、デバイス A（スピーカー）とデバイス B（リスナー）間に SXP ピア接続を設定する方法の例を示します。

```
Device# configure terminal
Device(config)# cts sxp enable
Device(config)# cts sxp default password Cisco123
Device(config)# cts sxp default source-ip 10.10.1.1
Device(config)# cts sxp connection peer 10.20.2.2 password default mode local speaker
```

以下に、デバイス B（リスナー）とデバイス A（スピーカー）間に SXP ピア接続を設定する方法の例を示します。

```
Device# configure terminal
Device(config)# cts sxp enable
Device(config)# cts sxp default password Cisco123
Device(config)# cts sxp default source-ip 10.20.2.2
Device(config)# cts sxp connection peer 10.10.1.1 password default mode local listener
```

例：デフォルトの SXP パスワードと送信元 IP アドレスの設定

次に、デフォルトの SXP パスワードと送信元 IP アドレスを設定する例を示します。

```
Device# configure terminal
Device(config)# cts sxp default password Cisco123
Device(config)# cts sxp default source-ip 10.20.2.2
Device(config)# end
```

SGT 交換プロトコルの接続の確認

SXP 接続を表示するには、次の作業を行います。

コマンド	目的
<code>show cts sxp connections</code>	SXP ステータスと接続に関する詳細情報を表示します。
<code>show cts sxp connections [brief]</code>	SXP ステータスと接続に関する要約情報を表示します。

次に、**show cts sxp connections** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts sxp connections

SXP                : Enabled
Default Password   : Set
Default Source IP   : 10.10.1.1
Connection retry open period: 10 secs
Reconcile period   : 120 secs
Retry open timer is not running
-----
Peer IP            : 10.20.2.2
Source IP          : 10.10.1.1
Conn status        : On
Conn Version       : 2
Connection mode    : SXP Listener
Connection inst#   : 1
TCP conn fd        : 1
TCP conn password  : default SXP password
Duration since last state change: 0:00:21:25 (dd:hr:mm:sec)
Total num of SXP Connections = 1
```

次に、**show cts sxp connections brief** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts sxp connections brief

SXP                : Enabled
Default Password   : Set
Default Source IP   : Not Set
Connection retry open period: 120 secs
Reconcile period   : 120 secs
Retry open timer is not running
-----
Peer_IP            Source_IP            Conn Status    Duration
-----
10.1.3.1           10.1.3.2           On              6:00:09:13 (dd:hr:mm:sec)
Total num of SXP Connections = 1
```

SGT 交換プロトコルの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	SGT 交換プロトコル	SXP は、Cisco TrustSec のハードウェアサポートがないネットワークデバイスに SGT を伝播します。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 7 章

セキュリティグループタグのマッピングの設定

サブネットとセキュリティグループタグ (SGT) のマッピングは、指定したサブネット内のすべてのホストアドレスに SGT をバインドします。このマッピングが実行されると、Cisco TrustSec により、指定のサブネットに属する送信元 IP アドレスを持つ任意の着信パケットに SGT が課せられます。

- [SGT のマッピングの制約事項 \(79 ページ\)](#)
- [SGT のマッピングに関する情報 \(80 ページ\)](#)
- [SGT のマッピングの設定方法 \(82 ページ\)](#)
- [SGT のマッピングの確認 \(90 ページ\)](#)
- [SGT のマッピングの設定例 \(92 ページ\)](#)
- [セキュリティグループタグのマッピングの機能履歴 \(96 ページ\)](#)

SGT のマッピングの制約事項

サブネットと SGT のマッピングの制約事項

- /31 プレフィックスの IPv4 サブ ネットワークを拡張できません。
- サブネットホストアドレスは、**network-map bindings bindings** パラメータが、指定したサブネットのサブネットホストの合計数よりも小さいか、**bindings** が 0 の場合、セキュリティグループタグ (SGT) にバインドできません。
- セキュリティ交換プロトコル (SXP) スピーカーおよびリスナーが SXPv3 以降のバージョンを実行している場合のみ、IPv6 拡張および伝播が実行されます。

デフォルトルートの SGT マッピングの制約事項

- デフォルトルートの設定は、サブネット /0 でのみ受け入れられます。サブネット /0 なしで **host-ip** のみを入力すると、次のメッセージが表示されます。

```
Device(config)#cts role-based sgt-map 0.0.0.0 sgt 1000
Default route configuration is not supported for host ip
```

SGT のマッピングに関する情報

このセクションでは、SGT マッピングに関する情報を提供します。

サブネットと SGT のマッピングの概要

サブネットと SGT のマッピングは、指定したサブネット内のすべてのホストアドレスに SGT をバインドします。Cisco TrustSec は着信パケットの送信元 IP アドレスが指定したサブネットに属する場合そのパケットに SGT を適用します。サブネットおよび SGT は、**cts role-based sgt-map net_address/prefix sgt sgt_number** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して CLI で指定されます。単一のホストは、このコマンドでマップされる可能性があります。

IPv4 ネットワークでは、セキュリティ交換プロトコル (SXP) v3 以降のバージョンは SXPv3 ピアからサブネットの *net_address/prefix* ストリングを受信し、解析できます。SXP の以前のバージョンでは、SXP リスナー ピアにエクスポートする前に、サブネットのプレフィックスをホストバインドのセットに変換します。

たとえば、IPv4 サブネット 192.0.2.0/24 は次のように拡張されます (ホストアドレスの 3 ビットのみ)。

- ホストアドレス 198.0.2.1 から 198.0.2.7 : タグ付けされて SXP ピアに伝播します。
- ネットワークおよびブロードキャストアドレス 198.0.2.0 および 198.0.2.8 : タグ付けされず、伝播しません。

SXPv3 がエクスポートできるサブネットバインドの数を制限するには、**cts sxp mapping network-map** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

サブネットバインディングはスタティックで、アクティブホストの学習はありません。これらは SGT インポジションおよび SGACL の適用にローカルで使用できます。サブネットと SGT のマッピングによってタグ付けされたパケットは、レイヤ 2 またはレイヤ 3 Cisco TrustSec リンクに伝播できます。

IPv6 ネットワークの場合、SXPv3 は SXPv2 または SXPv1 ピアにサブネットバインディングをエクスポートできません。

VLAN と SGT のマッピングの概要

VLAN と SGT のマッピング機能は、指定した VLAN からのパケットに SGT をバインドします。これは、次のような点で、レガシーネットワークからの Cisco TrustSec 対応ネットワークへの移行を簡素化します。

- レガシーのスイッチ、ワイヤレスコントローラ、アクセスポイント、VPN などの、Cisco TrustSec 対応ではないが VLAN 対応のデバイスをサポートします。

- データセンターのサーバセグメンテーションなどの、VLAN および VLAN ACL がネットワークを分割するトポロジに対する下位互換性を提供します。

VLAN と SGT のバインドは、`cts role-based sgt-map vlan-list` グローバル コンフィギュレーション コマンドで設定します。

Cisco TrustSec 対応スイッチ上で、スイッチ仮想インターフェイス (SVI) であるゲートウェイが VLAN に割り当てられており、そのスイッチで IP デバイストラッキングが有効になっている場合、Cisco TrustSec は、SVI サブネットにマッピングされている VLAN 上のすべてのアクティブなホストに対して IP と SGT のバインドを作成できます。

アクティブ VLAN のホストの IP-SGT バインディングは SXP リスナーにエクスポートされません。マッピングされた各 VLAN のバインドは VRF に関連付けられた IP-to-SGT テーブルに挿入されます。VLAN は SVI または `cts role-based l2-vrf` コマンドでマッピングされます。

VLAN と SGT のバインドの優先順位は最も低く、SXP または CLI ホスト コンフィギュレーションなどのその他のソースからのバインドを受け取った場合は、無視されます。バインドの優先順位は、「バインド送信元の優先順位」セクションに記載されています。

レイヤ3論理インターフェイスとSGTのマッピング (L3IF-SGT マッピング) の概要

L3IF-SGT マッピングは、基盤となる物理インターフェイスに関係なく、次のレイヤ3インターフェイスのいずれかのトラフィックに SGT を直接マッピングできます。

- ルーテッドポート
- SVI (VLAN インターフェイス)
- レイヤ2ポートのレイヤ3サブインターフェイス
- トンネルインターフェイス

(SGTアソシエーションが Cisco ISE または Cisco ACS アクセスサーバから動的に取得される) 特定の SGT 番号またはセキュリティグループ名を指定するには、`cts role-based sgt-map interface` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

アイデンティティポートマッピング (`cts` インターフェイス手動サブモードコンフィギュレーション) および L3IF-SGT が異なる IP と SGT のバインドを必要とする場合、IPM が優先されます。IP と SGT のバインドのその他の競合は、「バインド送信元の優先順位」セクションにリストされている優先順位に従って解決されます。

バインディング送信元プライオリティ

Cisco TrustSec は完全優先方式で IP-SGT バインドソース間の競合を解決します。たとえば、SGT は `policy { dynamic identity peer-name | static sgt tag }` Cisco Trustsec 手動インターフェイスモード コマンド (アイデンティティポートマッピング) を使用してインターフェイスに適用

されます。現在の優先順位の適用順序は、最も小さい (1) から最高 (7) まで、次のとおりです。

1. VLAN : VLAN-SGT マッピングが設定された VLAN 上のスヌーピングされた ARP パケットから学習されたバインディング。
2. CLI : `cts role-based sgt-map` グローバル コンフィギュレーション コマンドの IP-SGT 形式を使用して設定されたアドレス バインディング。
3. レイヤ 3 インターフェイス : (L3IF) 一貫した L3IF-SGT マッピングやアイデンティティポートマッピングを使用する 1 つ以上のインターフェイスを通るパスを持つ FIB 転送エントリが原因で追加されたバインディング。
4. SXP : SXP ピアから学習されたバインディング。
5. IP_ARP : タグ付けされた ARP パケットが CTS 対応リンクで受信されたときに学習されたバインディング。
6. LOCAL : EPM とデバイス トラッキングによって学習された認証済みホストのバインディング。このタイプのバインディングには、L2 [I]PM が設定されたポートの ARP スヌーピングによって学習された個々のホストも含まれます。
7. INTERNAL : ローカルで設定された IP アドレスとデバイス独自の SGT 間のバインディング。

デフォルトルートの SGT

デフォルトルートのセキュリティグループタグ (SGT) は、デフォルトルートに SGT 番号を割り当てます。

デフォルトルートは、指定されたルートと一致しないルートであるため、ラストリゾートの宛先へのルートです。デフォルトルートは、ルーティングテーブルに明示的にリストされていないネットワークが宛先になっているパケットの転送に使用されます。

SGT のマッピングの設定方法

このセクションでは、SGT マッピングを設定する例を示します。

デバイス SGT の手動設定

通常の Cisco TrustSec 動作では、認証サーバがデバイスから発信されるパケット用に、そのデバイスに SGT を割り当てます。認証サーバにアクセスできない場合は、使用する SGT を手動で設定できますが、認証サーバから割り当てられた SGT のほうが、手動で割り当てた SGT よりも優先されます。

デバイスの SGT を手動で設定するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sgt tag 例： Device(config)# cts sgt 1234	Cisco TrustSec の SXP をイネーブルにします。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

サブネットと SGT のマッピングの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp mapping network-map bindings 例： Device(config)# cts sxp mapping network-map 10000	<ul style="list-style-type: none"> サブネットと SGT のマッピングのホスト数の制限を設定します。 bindings 引数は、SGT にバインドされる、SXP リスナーにエクスポートできるサブネット IP ホストの最大数を指定します。 bindings : (0 ~ 65,535) デフォルトは 0（実行される拡張なし）です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	<p>cts role-based sgt-map <i>ipv4_address/prefix</i> <i>sgt number</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config)# cts role-based sgt-map 10.10.10.10/29 sgt 1234</pre>	<p>(IPv4) CIDR 表記でサブネットを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> サブネットと SGT のマッピング設定を取り消すには、このコマンドの <i>no</i> 形式を使用します。ステップ 2 で指定するバインディングの数は、サブネット上のホストアドレスの数以上である必要があります（ネットワーク、およびブロードキャストアドレスを除く）。<i>sgt number</i> キーワードは、指定したサブネットの各ホストアドレスにバインドするセキュリティグループタグを指定します。 <i>ipv4_address</i> : ドット付き 10 進表記で IPv4 ネットワークアドレスを指定します。 <i>prefix</i> : (0 ~ 30) ネットワークアドレス内のビット数を指定します。 <i>sgt number</i> : (0 ~ 65,535) セキュリティグループタグ (SGT) 番号を指定します。
ステップ 5	<p>cts role-based sgt-map <i>ipv6_address::prefix</i> <i>sgt number</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config)# cts role-based sgt-map 2020::/64 sgt 1234</pre>	<p>(IPv6) コロン 16 進表記でサブネットを指定します。サブネットと SGT のマッピング設定を取り消すには、このコマンドの <i>no</i> 形式を使用します。</p> <p>ステップ 2 で指定するバインディングの数は、サブネット上のホストアドレスの数以上である必要があります（ネットワーク、およびブロードキャストアドレスを除く）。<i>sgt number</i> キーワードは、指定したサブネットの各ホストアドレスにバインドするセキュリティグループタグを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <i>ipv6_address</i> : コロン 16 進表記で IPv6 ネットワークアドレスを指定します。 <i>prefix</i> : (0 ~ 128) ネットワークアドレス内のビット数を指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • sgt number : (0 ~ 65,535) セキュリティグループタグ (SGT) 番号を指定します。
ステップ 6	exit 例 : Device(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

VLAN と SGT のマッピングの設定

Cisco TrustSec デバイスで VLAN-SGT マッピングを設定するタスクフロー。

- 着信 VLAN の同じ VLAN_ID でデバイス上に VLAN を作成します。
- エンドポイントのクライアントに対して、デフォルトゲートウェイになるようにデバイスの VLAN に SVI を作成します。
- VLAN トラフィックに SGT を適用するようにデバイスを設定します。
- デバイスの IP デバイストラッキングを有効にします。
- VLAN にデバイストラッキングポリシーをアタッチします。



(注) マルチスイッチネットワークでは、SISF ベースのデバイストラッキングにより、機能を実行しているスイッチ間でバインドテーブルエントリを分散できます。これは、ホストがアクセスポートに表示されるスイッチでバインドエントリが作成され、トランクポートを介して表示されるホストに対してエントリが作成されないことを前提としています。マルチスイッチセットアップでこれを行うには、『*Security Configuration Guide*』の「*Configuring SISF-Based Device Tracking*」の章にある「*Configuring a Multi-Switch Network to Stop Creating Binding Entries from a Trunk Port*」の手順に従って、別のポリシーを設定し、トランクポートにアタッチすることを推奨します。

- VLAN と SGT のマッピングがデバイスで発生することを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 :	特権 EXEC モードを有効にします。

	コマンドまたはアクション	目的
	Device# enable	<ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	vlan vlan_id 例： Device(config)# vlan 100	TrustSec 対応ゲートウェイデバイスに VLAN 100 を作成し、VLAN コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 4	[no] shutdown 例： Device(config-vlan)# no shutdown	VLAN 100 をプロビジョニングします。
ステップ 5	exit 例： Device(config-vlan)# exit	VLAN コンフィギュレーションモードを終了し、グローバル コンフィギュレーションモードに戻ります。
ステップ 6	interface type slot/port 例： Device(config)# interface vlan 100	インターフェイスタイプを指定して、インターフェイス コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 7	ip address slot/port 例： Device(config-if)# ip address 10.1.1.2 255.0.0.0	VLAN 100 のスイッチ仮想インターフェイス (SVI) を設定します。
ステップ 8	[no] shutdown 例： Device(config-if)# no shutdown	SVI をイネーブルにします。
ステップ 9	exit 例： Device(config-if)# exit	インターフェイス コンフィギュレーションモードを終了し、グローバル コンフィギュレーションモードに戻ります。
ステップ 10	cts role-based sgt-map vlan-list vlan_id sgt sgt_number 例： Device(config)# cts role-based sgt-map vlan-list 100 sgt 10	指定した SGT を指定した VLAN を割り当てます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 11	device-tracking policy <i>policy-name</i> 例 : Device (config)# device-tracking policy policy1	ポリシーを指定し、デバイストラッキングポリシーコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 12	tracking enable 例 : Device (config-device-tracking)# tracking enable	ポリシー属性のデフォルトのデバイストラッキング設定を上書きします。
ステップ 13	exit 例 : Device (config-device-tracking)# exit	デバイストラッキングポリシーコンフィギュレーションモードを終了します。続いて、グローバルコンフィギュレーションモードに戻ります。
ステップ 14	vlan configuration <i>vlan_id</i> 例 : Device (config)# vlan configuration 100	デバイストラッキングポリシーをアタッチする VLAN を指定し、その VLAN のコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 15	device-tracking attach-policy <i>policy-name</i> 例 : Device (config-vlan-config)# device-tracking attach-policy policy1	指定された VLAN にデバイストラッキングポリシーをアタッチします。
ステップ 16	end 例 : Device (config-vlan-config)# end	VLAN コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 17	show cts role-based sgt-map <i>{ipv4_netaddr ipv4_netaddr/prefix </i> <i>ipv6_netaddr ipv6_netaddr/prefix all</i> <i>[ipv4 ipv6] host { ipv4__addr ipv6_addr</i> <i>} summary [ipv4 ipv6]</i> 例 : Device# show cts role-based sgt-map all	(任意) VLAN と SGT のマッピングを表示します。
ステップ 18	show device-tracking policy <i>policy-name</i> 例 : Device# show device-tracking policy policy1	(任意) 現在のポリシー属性を表示します。

L3IF と SGT のマッピングの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts role-based sgt-map interface type slot/port [security-group name sgt number] 例： Device(config)# cts role-based sgt-map interface gigabitEthernet 1/1 sgt 77	SGT は指定されたインターフェイスへの入力トラフィックに適用されます。 • interface type slot/port : 使用可能なインターフェイスのリストを表示します。 • security-group name : SGT ペアリングに対するセキュリティグループ名は Cisco ISE または Cisco ACS で設定されています。 • sgt number : (0 ~ 65,535) 。セキュリティグループタグ (SGT) 番号を指定します。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	設定モードを終了します。
ステップ 5	show cts role-based sgt-map all 例： Device# cts role-based sgt-map all	入力トラフィックに指定された SGT がタグ付けされたことを確認します。

ハードウェアキーストアのエミュレート

ハードウェアキーストアが存在しないか使用できない場合は、キーストアのソフトウェアエミュレーションを使用するようにスイッチを設定できます。ソフトウェアキーストアの使用を設定するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	cts keystore emulate 例： Device(config)# cts keystore emulate	ハードウェアキーストアの代わりにキーストアのソフトウェアエミュレーションを使用するようにスイッチを設定します。
ステップ 4	exit 例： Device(config)# exit	設定モードを終了します。
ステップ 5	show keystore 例： Device# show keystore	キーストアのステータスと内容を表示します。保存された秘密は表示されません。

デフォルトルートの SGT の設定

始める前に

ip route 0.0.0.0 コマンドを使用して、デバイスにデフォルトルートがすでに作成されていることを確認します。そうでない場合、デフォルトルート（デフォルトルートの SGT に付属）は不明な宛先を取得するため、ラストリゾートの宛先は CPU を指します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	cts role-based sgt-map 0.0.0.0/0 sgt number 例 : <pre>Device(config)# cts role-based sgt-map 0.0.0.0/0 sgt 3</pre>	デフォルトルートの SGT 番号を指定します。有効値は 0 ~ 65,519 です。 (注) <ul style="list-style-type: none"> • host_address/subnet は、IPv4 アドレス (0.0.0.0/0) または IPv6 アドレス (0:0::/0) のどちらかです。 • デフォルトルートの設定は、サブネット /0 でのみ受け入れられます。サブネット /0 なしで host-ip のみを入力すると、次のメッセージが表示されます。 <pre>Device(config)#cts role-based sgt-map 0.0.0.0 sgt 1000 Default route configuration is not supported for host ip</pre>
ステップ 4	exit 例 : <pre>Device(config)# exit</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを終了します。

SGT のマッピングの確認

次のセクションでは、SGT マッピングを確認する方法を示します。

サブネットと SGT のマッピングの設定確認

サブネットと SGT のマッピングの設定情報を表示するには、次の show コマンドのいずれかを使用します。

コマンド	目的
show cts sxp connections	SXP スピーカーとリスナーの接続と、動作ステータスを表示します。
show cts sxp sgt-map	SXP リスナーにエクスポートした IP と SGT のバインディングを表示します。

コマンド	目的
show running-config	サブネットと SGT のコンフィギュレーションコマンドが実行コンフィギュレーションファイル内にあることを確認します。

VLAN と SGT のマッピングの確認

VLAN と SGT の設定情報を表示するには、次の show コマンドを使用します。

表 1:

コマンド	目的
show device-tracking policy	デバイストラッキングポリシーの現在のポリシー属性を表示します。
show cts role-based sgt-map	IP アドレスと SGT のバインドを表示します。

L3IF と SGT のマッピングの確認

L3IF と SGT の設定情報を表示するには、次の show コマンドを使用します。

コマンド	目的
show cts role-based sgt-map all	すべての IP アドレスと SGT のバインドを表示します。

デフォルトルートの SGT の設定確認

デフォルトルートの SGT の設定確認

```
device# show role-based sgt-map all
Active IPv4-SGT Bindings Information
```

```
IP Address          SGT      Source
=====
0.0.0.0/0           3        CLI
11.0.0.0/8          11        CLI
11.0.0.10           1110     CLI
11.1.1.1            1111     CLI
21.0.0.2            212      CLI
```

```
IP-SGT Active Bindings Summary
=====
Total number of CLI      bindings = 5
Total number of active  bindings = 5
```

SGT のマッピングの設定例

このセクションでは、SGT のマッピングの設定例を示します。

例：デバイス SGT の手動設定

```
Device# configure terminal
Device(config)# cts sgt 1234
Device(config)# exit
```

例：サブネットと SGT のマッピングの設定

次の例は、SXPv3 を実行しているデバイス（Device 1 と Device 2）間の IPv4 サブネットと SGT のマッピングを設定する方法を示します。

1. デバイス間の SXP スピーカー/リスナー ピアリングを設定します。

```
Device1# configure terminal
Device1(config)# cts sxp enable
Device1(config)# cts sxp default source-ip 1.1.1.1
Device1(config)# cts sxp default password 1szygyy1
Device1(config)# cts sxp connection peer 2.2.2.2 password default mode local speaker
```

2. Device 1 の SXP リスナーとして Device 2 を設定します。

```
Device2(config)# cts sxp enable
Device2(config)# cts sxp default source-ip 2.2.2.2
Device2(config)# cts sxp default password 1szygyy1
Device2(config)# cts sxp connection peer 1.1.1.1 password default mode local listener
```

3. Device 2 で、SXP 接続が動作していることを確認してください。

```
Device2# show cts sxp connections brief | include 1.1.1.1
      1.1.1.1                2.2.2.2                On                3:22:23:18
(dd:hr:mm:sec)
```

4. サブネットワークが Device 1 に拡張されるように設定します。

```
Device1(config)# cts sxp mapping network-map 10000
Device1(config)# cts role-based sgt-map 10.10.10.0/30 sgt 101
Device1(config)# cts role-based sgt-map 11.11.11.0/29 sgt 11111
Device1(config)# cts role-based sgt-map 192.168.1.0/28 sgt 65000
```

5. Device 2 で、Device 1 からのサブネットと SGT の拡張を確認します。ここには、10.10.10.0/30 サブネットワーク用の拡張が 2 個、11.11.11.0/29 サブネットワーク用の拡張が 6 個、192.168.1.0/28 サブネットワーク用の拡張が 14 個存在する必要があります。

```
Device2# show cts sxp sgt-map brief | include 101|11111|65000
IPv4,SGT: <10.10.10.1 , 101>
IPv4,SGT: <10.10.10.2 , 101>
IPv4,SGT: <11.11.11.1 , 11111>
IPv4,SGT: <11.11.11.2 , 11111>
IPv4,SGT: <11.11.11.3 , 11111>
```

```

IPv4,SGT: <11.11.11.4 , 11111>
IPv4,SGT: <11.11.11.5 , 11111>
IPv4,SGT: <11.11.11.6 , 11111>
IPv4,SGT: <192.168.1.1 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.2 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.3 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.4 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.5 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.6 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.7 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.8 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.9 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.10 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.11 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.12 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.13 , 65000>
IPv4,SGT: <192.168.1.14 , 65000>

```

6. Device 1 の拡張数を確認します。

```

Device1# show cts sxp sgt-map
IP-SGT Mappings expanded:22
There are no IP-SGT Mappings

```

7. Device 1 と Device 2 の設定を保存し、グローバル コンフィギュレーション モードを終了します。

```

Device1(config)# copy running-config startup-config
Device1(config)# exit
Device2(config)# copy running-config startup-config
Device2(config)# exit

```

例：アクセスリンクを介した1つのホストに対する VLAN と SGT のマッピングの設定

次の例では、単一のホストは、アクセスデバイス上の VLAN 100 に接続します。TrustSec デバイスのスイッチ仮想インターフェイスは VLAN 100 のエンドポイントのデフォルトゲートウェイになります (IP アドレス 10.1.1.1)。TrustSec デバイスは VLAN 100 からのパケットにセキュリティグループタグ (SGT) 10 を適用します。

1. アクセスデバイス上に VLAN 100 を作成します。

```

access_device# configure terminal
access_device(config)# vlan 100
access_device(config-vlan)# no shutdown
access_device(config-vlan)# exit
access_device(config)#

```

2. アクセスリンクとして TrustSec デバイスのインターフェイスを設定します。エンドポイントのアクセス ポートの設定は、この例では省略されます。

```

access_device(config)# interface gigabitEthernet 6/3
access_device(config-if)# switchport
access_device(config-if)# switchport mode access
access_device(config-if)# switchport access vlan 100

```

3. TrustSec デバイスに VLAN 100 を作成します。

```
TS_device(config)# vlan 100
TS_device(config-vlan)# no shutdown
TS_device(config-vlan)# end
TS_device#
```

4. 着信 VLAN 100 のゲートウェイとして SVI を作成します。

```
TS_device(config)# interface vlan 100
TS_device(config-if)# ip address 10.1.1.2 255.0.0.0
TS_device(config-if)# no shutdown
TS_device(config-if)# end
TS_device(config)#
```

5. VLAN 100 のホストにセキュリティ グループ タグ (SGT) 10 を割り当てます。

```
TS_device(config)# cts role-based sgt-map vlan 100 sgt 10
```

6. TrustSec デバイスの IP デバイストラッキングを有効にします。それが動作していることを確認します。

```
TS_device(config)# ip device tracking
TS_device# show ip device tracking all
```

```
IP Device Tracking = Enabled
IP Device Tracking Probe Count = 3
IP Device Tracking Probe Interval = 100
```

```
-----
IP Address      MAC Address    Vlan   Interface      STATE
-----
```

```
Total number interfaces enabled: 1
Vlan100
```

7. (任意) エンドポイントからデフォルトゲートウェイを ping します (この例では、ホスト IP アドレス 10.1.1.1)。SGT 10 が VLAN 100 のホストにマッピングされていることを確認します。

```
TS_device# show cts role-based sgt-map all
```

```
Active IP-SGT Bindings Information
```

```
IP Address      SGT           Source
=====
```

```
10.1.1.1       10            VLAN
```

```
IP-SGT Active Bindings Summary
```

```
=====
Total number of VLAN bindings = 1
Total number of CLI bindings = 0
Total number of active bindings = 1
```

例：入力ポートでの L3IF と SGT のマッピングの設定

次の例では、デバイスラインカードのレイヤ3インターフェイスで、すべての入力トラフィックに SGT3 がタグ付けされるように設定します。接続されたサブネットのプレフィックスがすでにわかっています。

1. インターフェイスを設定します。

```
Device# configure terminal
Device(config)# interface gigabitEthernet 6/3 sgt 3
Device(config)# exit
```

2. インターフェイスに着信するトラフィックが適切にタグ付けされることを確認します。

```
Device# show cts role-based sgt-map all
IP Address          SGT          Source
=====
15.1.1.15           4            INTERNAL
17.1.1.0/24         3            L3IF
21.1.1.2            4            INTERNAL
31.1.1.0/24         3            L3IF
31.1.1.2            4            INTERNAL
43.1.1.0/24         3            L3IF
49.1.1.0/24         3            L3IF
50.1.1.0/24         3            L3IF
50.1.1.2            4            INTERNAL
51.1.1.1            4            INTERNAL
52.1.1.0/24         3            L3IF
81.1.1.1            5            CLI
102.1.1.1           4            INTERNAL
105.1.1.1           3            L3IF
111.1.1.1           4            INTERNAL
IP-SGT Active Bindings Summary
=====
Total number of CLI      bindings = 1
Total number of L3IF    bindings = 7
Total number of INTERNAL bindings = 7
Total number of active  bindings = 15
```

例：ハードウェアキーストアのエミュレート

次に、ソフトウェアキーストアの使用を設定および確認する例を示します。

```
Device# configure terminal
Device(config)# cts keystore emulate
Device(config)# exit
Device#show keystore
No hardware keystore present, using software emulation.
Keystore contains the following records (S=Simple Secret, P=PAC, R=RSA):
Index   Type   Name
-----
0        S      CTS-password
1        P      ECF05BB8DFAD854E8376DEA4EF6171CF
```

例：デバイスルートのSGTの設定

```
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based sgt-map 0.0.0.0/0 sgt 3
Device(config)# exit
```

セキュリティグループタグのマッピングの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	セキュリティグループタグのマッピング	サブネットと SGT のマッピングは、指定したサブネット内のすべてのホストアドレスに SGT をバインドします。このマッピングが実行されると、Cisco TrustSecにより、指定のサブネットに属する送信元 IP アドレスを持つ任意の着信パケットに SGT が課せられます。
Cisco IOS XE Gibraltar 16.11.1	デフォルトルート SGT の分類	デフォルトルート SGT は、指定されたルートと一致しないルートに SGT タグ番号を割り当てます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 8 章

Cisco TrustSec SGT キャッシング

- [Cisco TrustSec SGT キャッシング \(97 ページ\)](#)

Cisco TrustSec SGT キャッシング

Cisco TrustSec SGT キャッシング機能は、セキュリティグループタグ (SGT) の移動性を柔軟にする Cisco TrustSec の機能を強化します。この機能は、IP-SGT バインドを特定し、対応する SGT をキャッシュすることで、通常のディープ パケット インスペクションを処理するすべてのネットワークサービスを通じて、またパケットが該当する SGT で再度タグ付けされるサービス出力ポイントにおいて、ネットワークパケットを転送します。

IPv4 SGT キャッシングのみがサポートされます。ハイアベイラビリティは SGT キャッシングでサポートされています。

Cisco TrustSec SGT キャッシングの制約事項

グローバルな SGT キャッシング設定と、インターフェイス固有の入力設定は相互に排他的です。次のシナリオでは、SGT キャッシングをグローバルおよびインターフェイス上の両方で構成しようとした場合に、警告メッセージが表示されます。

- **cts role-based sgt-cache ingress** コマンドをインターフェイス設定モードで使用して、インターフェイスが SGT キャッシングを有効にし、**cts role-based sgt-caching** コマンドを使用してグローバル設定を試行した場合、この例が示すような警告メッセージが表示されます。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# interface gigabitEthernet 1/0/1
Device(config-if)# cts role-based sgt-cache ingress
Device(config-if)# exit
Device(config)# cts role-based sgt-caching
```

```
There is at least one interface that has ingress sgt caching configured. Please
remove all interface ingress sgt caching configuration(s) before attempting global
enable.
```

この制限は、レイヤ 3 ルーテッドポートインターフェイスにのみ適用されます。また、SGT キャッシングが機能するには、ポートが信頼できるポートである必要があります。

- SGT キャッシングは内部的に NetFlow TCAM (Ternary Content Addressable Memory) スペースを使用するため、インターフェイス上ではいつでも Flexible NetFlow または SGT キャッシングのどちらかを特定の方向で有効にできます。
- **cts role-based sgt-caching** コマンドを使用してグローバル コンフィギュレーションを有効にし、インターフェイス コンフィギュレーション モードで **cts role-based sgt-cache ingress** コマンドを使用してインターフェイス コンフィギュレーションを試行すると、次の例に示すように、警告メッセージが表示されます。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based sgt-caching
Device(config)# interface gigabitEthernet 1/0/1
Device(config-if)# cts role-based sgt-cache ingress
```

Note that ingress sgt caching is already active on this interface due to global sgt-caching enable.

- IPv6 SGT キャッシングはサポートされていません。
- SGT キャッシングは、リンクローカル IPv6 送信元アドレスに対して実行できません。
リンクローカルアドレスとは、ホストが接続されているネットワークセグメント (リンク) またはブロードキャストドメイン内の通信にのみ有効なネットワークアドレスです。リンクローカルアドレスは、単一のネットワークセグメントを超えて一意であるとは限りません。したがって、デバイスはリンクローカルアドレスを持つパケットを転送しません。リンクローカルアドレスが一意ではないため、送信元がリンクローカル IPv6 アドレスであるパケットには SGT タグは割り当てられません。
- SGT キャッシングは、Application Visibility and Control (AVC)、有線デバイス AVC (WDAVC)、暗号化トラフィック分析 (ETTA)、または NetFlow/Flexible NetFlow 機能が設定されているポートインターフェイス上で共存できません。SGT キャッシングとこれらの機能のいずれかが同じインターフェイス上で設定されている場合、エラーメッセージがコンソールに表示されます。
上記の機能のいずれかとともに SGT キャッシングが有効になっている場合、次のエラーメッセージがコンソールに表示されます。SGT キャッシングは設定できません。設定を削除します。ただし、SGT キャッシング機能が **show running-config** コマンドの出力に表示されます。共存できない機能を削除した後、SGT キャッシングを手動で削除して再設定する必要があります。
- 出力 SGT キャッシングと L2 SGT キャッシングは、Cisco Catalyst 9500 シリーズ スイッチの C9500-32C、C9500-32QC、C9500-48Y4C、および C9500-24Y4C モデルではサポートされていません。

Cisco TrustSec SGT キャッシングに関する情報

SGT キャッシングを使用した SGT の特定と再適用

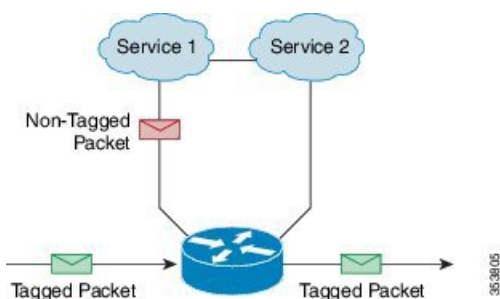
Cisco TrustSec は、セキュリティグループタグ (SGT) キャッシングを使用して、SGT でタグ付けされたトラフィックを、SGT を認識していないサービスを通じて渡すことができますようにします。SGT を伝播できないサービスには、WAN の高速化または最適化、侵入防御システム (IPS)、およびアップストリーム ファイアウォールがあります。

VLAN で SGACL キャッシングを設定するには、対応するポートおよび VLAN で SGT キャッシングを有効にする必要があります。

ワンアームモード (下の図を参照) では、SGT でタグ付けされたパケットはデバイス (タグがキャッシュされた場所) に入力され、サービスにリダイレクトされます。そのサービスが完了した後、パケットはデバイスに戻されるか、別のデバイスにリダイレクトされます。このようなシナリオでは、次のようになります。

1. Cisco TrustSec SGT キャッシング機能により、デバイスは、着信パケットからの IP-SGT バインド情報を特定し、この情報をキャッシュします。
2. デバイスは、SGT を伝播できないサービスにパケットをリダイレクトします。
3. サービスが完了した後、パケットはデバイスに戻されます。
4. サービスの出力ポイントで、適切な SGT がパケットに再適用されます。
5. サービスからデバイスに戻されたパケットには、ロールベースの強制が適用されます。
6. SGT のパケットは、他の Cisco TrustSec 対応デバイスのダウンストリームに転送されます。

図 8: ワンアーム モードでの SGT キャッシング



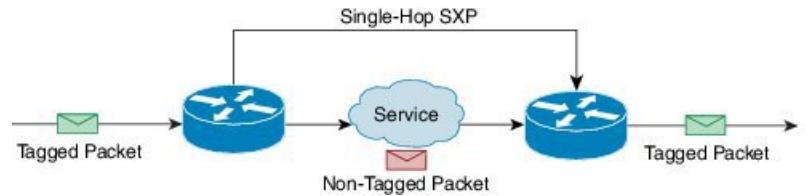
特定のインスタンスでは、Bump-In-The-Wire (BITW) トポロジに導入されるサービスがあります (上の図を参照)。このようなシナリオでは、次のようになります。

1. サービスを通過するパケットはデバイスに戻されません。
2. シングルホップ SGT Exchange Protocol (SXP) を使用して、IP-SGT バインドを特定し、特定されたバインドをエクスポートします。
3. ネットワーク内のアップストリームデバイスは、SXPを通じて IP-SGT バインドを特定し、適切なタグを再適用するか、それらを SGT ベース強制に使用します。出力キャッシング

中、元のネットワークアドレス移動（NAT）前の送信元 IP アドレスは、特定された IP-SGT バインド情報の一部としてキャッシュされます。

4. 300 秒間トラフィックを受信しない IP-SGT バインドは、キャッシュから削除されます。

図 9: Bump-In-The-Wire (BITW) トポロジでの SGT キャッシング



Cisco TrustSec SGT キャッシングの設定方法

このセクションでは、SGT キャッシングをグローバルにインターフェイス上で設定する方法について説明します。

SGT キャッシングのグローバル設定

始める前に

SGT キャッシングを有効にする前に、情報交換のためにセキュリティ交換プロトコル（SXP）を確立する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts role-based sgt-caching 例： Device(config)# cts role-based sgt-caching	すべてのインターフェイスに対して、入力方向の SGT キャッシングを有効化します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	end 例 : Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

インターフェイスでの SGT キャッシングの設定

インターフェイスが Virtual Routing and Forwarding (VRF) ネットワーク上に設定された場合、そのインターフェイス上で特定された IP-SGT バインドは特定の VRF 以下に追加されます。(対応する VRF 上で特定されたバインドを表示するには、**show cts role-based sgt-map vrf vrf-name all** コマンドを使用します。) SGT キャッシングは、VRF ごとに設定することもできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	interface type slot/port 例 : Device(config)# interface gigabitethernet 1/0/1	インターフェイスを設定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	cts role-based sgt-cache [ingress egress] 例 : Device(config-if)# cts role-based sgt-cache ingress	特定のインターフェイスで SGT キャッシングを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> ingress : 特定のインターフェイスを開始するトラフィック (インバウンドトラフィック) に対して SGT キャッシングを有効化します。 egress : 特定のインターフェイスを終了するトラフィック (アウトバウンドトラフィック) に対して SGT キャッシングを有効化します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	end 例 : Device(config-if)# end	インターフェイスコンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

Cisco TrustSec SGT キャッシングの確認

手順

ステップ 1 enable

特権 EXEC モードを有効にします。パスワードを入力します（要求された場合）。

例 :

```
Device> enable
```

ステップ 2 show cts

Cisco TrustSec 接続とグローバル SGT キャッシングのステータスを表示します。

例 :

```
Device# show cts

Global Dot1x feature: Disabled
CTS device identity: ""
CTS caching support: disabled
CTS sgt-caching global: Enabled
Number of CTS interfaces in DOT1X mode: 0,    MANUAL mode: 0
Number of CTS interfaces in LAYER3 TrustSec mode: 0
Number of CTS interfaces in corresponding IFC state
  INIT          state: 0
  AUTHENTICATING state: 0
  AUTHORIZING   state: 0
  SAP_NEGOTIATING state: 0
  OPEN          state: 0
  HELD          state: 0
  DISCONNECTING state: 0
  INVALID       state: 0
CTS events statistics:
  authentication success: 0
  authentication reject : 0
  authentication failure: 0
  authentication logoff : 0
  authentication no resp: 0
  authorization success : 0
  authorization failure : 0
  sap success           : 0
  sap failure           : 0
  port auth failure    : 0
```


ステップ3 show cts interface

モード詳細（入力または出力）を使用した、インターフェイスと SGT キャッシング情報についての Cisco TrustSec 設定の統計情報を表示します。

例：

```
Device# show cts interface GigabitEthernet 1/0/1

Interface GigabitEthernet1/0/1
  CTS sgt-caching Ingress: Enabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
  CTS is enabled, mode:    MANUAL
  Propagate SGT:          Enabled
  Static Ingress SGT Policy:
    Peer SGT:              200
    Peer SGT assignment:  Trusted

L2-SGT Statistics
  Pkts In                   : 16298041
  Pkts (policy SGT assigned) : 0
  Pkts Out                   : 5
  Pkts Drop (malformed packet): 0
  Pkts Drop (invalid SGT)   : 0
```

ステップ4 show cts interface brief

すべてのインターフェイスについて、モード詳細（入力または出力）を使用して SGT キャッシング情報を表示します。

例：

```
Device# show cts interface brief

Interface GigabitEthernet1/0/1
  CTS sgt-caching Ingress: Enabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
  CTS is disabled

Interface GigabitEthernet1/0/1
  CTS sgt-caching Ingress: Enabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
  CTS is enabled, mode:    MANUAL
  Propagate SGT:          Enabled
  Static Ingress SGT Policy:
    Peer SGT:              200
    Peer SGT assignment:  Trusted

Interface GigabitEthernet1/0/2
  CTS sgt-caching Ingress: Enabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
  CTS is enabled, mode:    MANUAL
  Propagate SGT:          Enabled
  Static Ingress SGT Policy:
    Peer SGT:              0
    Peer SGT assignment:  Untrusted

Interface GigabitEthernet1/0/3
  CTS sgt-caching Ingress: Enabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
```

```

CTS is disabled

Interface Backplane-GigabitEthernet1/0/4
  CTS sgt-caching Ingress: Enabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
  CTS is disabled

Interface RG-AR-IF-INPUT1
  CTS sgt-caching Ingress: Enabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
  CTS is disabled

```

ステップ 5 show cts role-based sgt-map all ipv4

すべての SGT-IPv4 バインドを表示します。

例：

```

Device# show cts role-based sgt-map all ipv4

Active IPv4-SGT Bindings Information

IP Address          SGT      Source
=====
192.0.2.1           50       CACHED
192.0.2.2           50       CACHED
192.0.2.3           50       CACHED
192.0.2.4           50       CACHED
192.0.2.5           3900    INTERNAL
192.0.2.6           3900    INTERNAL
192.0.2.7           3900    INTERNAL

IP-SGT Active Bindings Summary
=====
Total number of CACHED bindings = 20
Total number of INTERNAL bindings = 3
Total number of active bindings = 23

```

ステップ 6 show cts role-based sgt-map vrf vrf-name all ipv4

特定の Virtual Routing and Forwarding (VRF) インターフェイスに対する SGT-IP バインドをすべて表示します。

例：

```

Device# show cts role-based sgt-map vrf vrf1 all ipv4

%IPv6 protocol is not enabled in VRF vrf1
Active IPv4-SGT Bindings Information

IP Address          SGT      Source
=====
192.0.2.1           50       CACHED
192.0.2.2           2007    CACHED
192.0.2.3           50       CACHED
192.0.2.4           50       CACHED

```

ステップ7 SGT キャッシュエントリは、ポートのシャットダウンまたは SGT キャッシュのタイムアウト後に削除されます。

Cisco TrustSec キャッシングの設定例

例：SGT キャッシングのグローバル設定

次に、SGT キャッシングをグローバルに設定する例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based sgt-caching
Device(config)# end
```

例：インターフェイスの SGT キャッシングの設定

次に、インターフェイスの SGT キャッシングを設定する例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# interface gigabitEthernet 1/0/1
Device(config-if)# cts role-based sgt-cache ingress
Device(config-if)# end
```

例：インターフェイスでの SGT キャッシングの無効化

次の例は、キャッシングがグローバルに有効だがインターフェイスでは無効な場合に、インターフェイスで SGT キャッシングを無効化し、インターフェイスの SGT キャッシングの状態を表示する方法を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts role-based sgt-caching
Device(config)# interface gigabitEthernet 1/0/1
Device(config-if)# no cts role-based sgt-cache ingress
Device(config-if)# end
Device# show cts interface GigabitEthernet 1/0/1
```

```
Interface GigabitEthernet1/0/1
  CTS sgt-caching Ingress: Disabled
  CTS sgt-caching Egress : Disabled
  CTS is enabled, mode:      MANUAL
  Propagate SGT:           Enabled
  Static Ingress SGT Policy:
    Peer SGT:                200
    Peer SGT assignment:    Trusted

L2-SGT Statistics
  Pkts In                    : 200890684
```

```

Pkts (policy SGT assigned) : 0
Pkts Out                   : 14
Pkts Drop (malformed packet): 0
Pkts Drop (invalid SGT)   : 0

```

Cisco TrustSec SGT キャッシングの機能の履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	Cisco TrustSec SGT キャッシング	Cisco TrustSec SGT キャッシング機能は、SGT の移動性を柔軟にする Cisco TrustSec の機能を強化します。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 9 章

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリング

セキュリティグループタグ (SGT) 交換プロトコル (SXP) は、Cisco TrustSec をサポートする複数のプロトコルの 1 つです。SXP は、パケットのタグ付け機能がないネットワークデバイス全体に IP と SGT のバインドの情報を伝播する、制御プロトコルです。SXP は、IP と SGT のバインドをネットワーク上の認証ポイントからアップストリームデバイスへ渡します。このプロセスにより、スイッチ、ルータ、ファイアウォールのセキュリティサービスは、アクセスデバイスから学習したユーザアイデンティティ情報を伝えることができます。

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリング機能を使用すると、IP と SGT のバインドをエクスポートまたはインポートするときにフィルタリングできます。このフィルタリングは、IP プレフィックス、SGT、またはその両方の組み合わせに基づいて実行できます。

- [IP プレフィックスとセキュリティグループタグ \(SGT\) ベースのセキュリティ交換プロトコル \(SXP\) フィルタリングの制約事項 \(107 ページ\)](#)
- [IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングに関する情報 \(108 ページ\)](#)
- [IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの設定方法 \(109 ページ\)](#)
- [IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの設定例 \(114 ページ\)](#)
- [IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの確認 \(115 ページ\)](#)
- [SXP フィルタリングの syslog メッセージ \(117 ページ\)](#)
- [IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの機能履歴 \(118 ページ\)](#)

IP プレフィックスとセキュリティグループタグ (SGT) ベースのセキュリティ交換プロトコル (SXP) フィルタリングの制約事項

- アクティブデバイスとスタンバイデバイス間のセキュリティ交換プロトコル (SXP) データベースでの、IP セキュリティグループタグ (SGT) バインドのステートフルな同期のハイアベイラビリティのサポートはありません。

- 既存の接続に適用されたフィルタは、エクスポートまたはインポートされた後続のバインドでのみ有効になります。フィルタは、フィルタを適用する前にエクスポートまたはインポートされたバインドには適用されません。
- Virtual Route Forwarding (VRF) 固有のフィルタリングはサポートされておらず、ピア IP に指定されたフィルタはデバイス上のすべての VRF に適用されます。
- フィルタルールの SGT 値は、単一の SGT 番号のリストになります。SGT の範囲はサポートされていません。

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングに関する情報

概要

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリング機能を使用すると、IP と SGT のバインドをエクスポートまたはインポートするときにフィルタリングできます。このフィルタリングは、IP プレフィックス、SGT、またはその両方の組み合わせに基づいて実行できます。

セキュリティグループタグ (SGT) 交換プロトコル (SXP) は、Cisco TrustSec をサポートする複数のプロトコルの 1 つです。SXP は、パケットのタグ付け機能がないネットワークデバイス全体に IP と SGT のバインドの情報を伝播する、制御プロトコルです。SXP は、IP と SGT のバインドをネットワーク上の認証ポイントからアップストリームデバイスへ渡します。このプロセスにより、スイッチ、ルータ、ファイアウォールのセキュリティサービスは、アクセスデバイスから学習したユーザアイデンティティ情報を伝えることができます。

IP-to-SGT フィルタリングにより、システムは対象のバインドだけを選択的にインポートまたはエクスポートできます。SXP 接続では、バインドのエクスポートまたはインポート中に発生するフィルタリングに基づいて、スピーカーまたはリスナーのどちらかとして機能するデバイスにフィルタを設定できます。

双方向 SXP 接続の場合、スピーカーまたはリスナーのフィルタが設定されているかどうかに基づいて、どちらかの方向にフィルタが適用されます。ピアがスピーカーとリスナーの両方のフィルタグループの一部である場合、フィルタリングは両方向に適用されます。

フィルタは、ピアツーピアベースまたはグローバルに適用できます (すべての SXP 接続に適用可能)。どちらの場合も、フィルタはスピーカーまたはリスナーに適用できます。

フィルタ ルール

デバイスに適用する必要があるフィルタは、一連のフィルタルールを使用して作成されます。各フィルタルールは、特定の SGT 値や IP プレフィックス値を持つバインドに対して実行するアクションを指定します。各バインドは、フィルタルールで指定された値と照合されます。一致が見つかった場合は、フィルタルールで指定された対応するアクションが適用されます。選択したバインドに適用できるアクションは、許可アクションまたは拒否アクションです。IP-SGT

バインドのエクスポートまたはインポート中に、スピーカーまたはリスナーでフィルタが有効になっている場合、バインドはフィルタルールに基づいてフィルタリングされます。

フィルタリストでバインドにルールが指定されていない場合は、フィルタリストに設定されているキャッチオールルールが実行されます。キャッチオールルールがない場合、対応するバインドは暗黙的に拒否されます。

SXP フィルタリングのタイプ

IP-SGT バインドは、次のいずれかの方法でフィルタリングされます。

- SGT ベースのフィルタリング：SGT 値に基づいて SXP 接続の IP-SGT バインドをフィルタリングします。
- IP プレフィックスベースのフィルタリング：IP プレフィックス値に基づいて SXP 接続の IP-SGT バインドをフィルタリングします。
- SGT および IP プレフィックスベースのフィルタリング：SGT 値と IP プレフィックス値に基づいて SXP 接続の IP-SGT バインドをフィルタリングします。

フィルタルールは、各 IP-SGT バインドに適用されます。

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの設定方法

このセクションでは、IP-prefix と SGT-cased の SXP フィルタリングの設定方法について説明します。

SXP フィルタリストの設定

このステップでは、ルールセットを保持するフィルタリストを作成します。これらのルールは、許可されたバインドを検証し、拒否されたバインドをブロックすることによって、IP-SGT バインドをフィルタリングします。各ルールは、SGT、IP プレフィックス、または SGT と IP プレフィックスの両方の組み合わせに基づいて設定できます。

フィルタリストに特定の IP-SGT バインドと一致するルールがない場合、デフォルトまたはキャッチオールルールが定義されていない限り、バインドは暗黙的に拒否されます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> • パスワードを入力します（要求された場合）。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp filter-list <i>filter-name</i>	Cisco TrustSec フィルタリストを設定し、フィルタリスト コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	<i>sequence-number</i> permit ipv4 <i>ip-address/prefix</i> deny sgt <i>sgt-value</i>	フィルタリストのルールを設定します。
ステップ 5	exit	フィルタリスト コンフィギュレーション モードを終了して、グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 6	cts sxp filter-list <i>filter-name</i>	Cisco TrustSec フィルタリストを設定し、フィルタリスト コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 7	[<i>sequence-number</i>] deny sgt <i>sgt-value</i> permit ipv6 <i>ipv6-address/prefix</i>	フィルタリストのルールを設定します。
ステップ 8	exit	フィルタリスト コンフィギュレーション モードを終了して、グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 9	cts sxp filter-list <i>filter-name</i>	Cisco TrustSec フィルタリストを設定し、フィルタリスト コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 10	[<i>sequence-number</i>] permit ipv6 <i>ipv6-address/prefix</i> permit sgt <i>sgt-value</i> permit	フィルタリストのルールを設定します。
ステップ 11	end	フィルタリスト コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SXP フィルタグループの設定

このステップでは、ピアセットを1つのグループにまとめ、そのグループにフィルタリストを適用します。フィルタグループは、スピーカーグループまたはリスナーグループとして定義できます。すべてのスピーカーまたはすべてのリスナーに同じフィルタリストを適用するには、グローバルスピーカーのフィルタグループまたはグローバルリスナーのフィルタグループを作成します。



(注) フィルタグループにアタッチできるフィルタリストは1つだけです。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	cts sxp filter-group listener <i>listener-name</i>	SXP フィルタグループのリスナーを設定し、フィルタグループコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 4	filter <i>filter-list-name</i>	フィルタリストのルールを設定します。
ステップ 5	peer <i>ipv4-address</i>	ピアの IP アドレスを設定します。
ステップ 6	exit	フィルタグループ コンフィギュレーションモードを終了して、グローバルコンフィギュレーションモードに戻ります。
ステップ 7	cts sxp filter-group speaker <i>speaker-name</i>	複数の VLAN アクセス ポートで音声 VLAN を設定します。
ステップ 8	filter <i>filter-list-name</i>	フィルタリスト名を設定します。
ステップ 9	peer <i>ipv4-address</i>	ピアの IP アドレスを設定します。
ステップ 10	end	フィルタグループ コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

グローバルリスナーまたはグローバルスピーカーのフィルタグループの設定

グローバルリスナーとグローバルスピーカーのフィルタグループを設定すると、リスナーモードまたはスピーカーモードのすべての SXP 接続のボックス全体にフィルタが適用されます。

フィルタグループにフィルタリストを追加すると、ボックスに現在設定されているフィルタリストのセットがヘルプストリングとして表示されます。



(注) **peer** コマンドは、グローバルリスナーとグローバルスピーカーのフィルタグループでは使用できません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp filter-group listener global <i>filter-list-name</i>	グローバルリスナーのフィルタグループを設定します。
ステップ 4	cts sxp filter-group speaker global <i>filter-list-name</i>	グローバルスピーカーのフィルタグループを設定します。
ステップ 5	end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

SXP フィルタリングの有効化

SXP フィルタリストとフィルタグループを設定した後は、フィルタリングを有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	cts sxp filter enable	インターフェイスにソース テンプレートを設定します。
ステップ 4	exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 5	show cts sxp filter-list <i>filter_name</i>	デバイスに設定されているフィルタリストを、各フィルタリストのフィルタルールとともに表示します。

デフォルトルールまたはキャッチオールルールの設定

デフォルトまたはキャッチオールルールは、フィルタリスト内のどのルールとも一致しない IP-SGT バインドに適用されます。デフォルトルールが指定されていない場合、これらの IP-SGT バインドは拒否されます。

対応するフィルタリストのフィルタリスト コンフィギュレーション モードで、デフォルトまたはキャッチオールルールを定義します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	cts sxp filter-list <i>filter-name</i>	Cisco TrustSec フィルタリストを設定し、フィルタリスト コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	permit ipv4 <i>ip-address/prefix</i>	条件が一致した場合にアクセスを許可します。
ステップ 5	deny ipv6 <i>ipv6-address/prefix</i>	条件に一致する場合、アクセスを拒否します。
ステップ 6	permit sgt all	すべての SGT に対応するバインドを許可します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ7	<code>end</code>	フィルタリスト コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの設定例

このセクションでは、IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの設定例を示します。

例：SXP フィルタリストの設定

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts sxp filter-list filter1
Device(config-filter-list)# permit ipv4 10.1.1.0/24 deny sgt 3 4
Device(config-filter-list)# exit
Device(config)# cts sxp filter-list filter2
Device(config-filter-list)# permit sgt all
Device(config-filter-list)# exit
Device(config)# cts sxp filter-list filter3
Device(config-filter-list)# deny ipv6 2001:db8::1/64 permit sgt 67
Device(config-filter-list)# end
```

例：SXP フィルタグループの設定

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts sxp filter-group listener group1
Device(config-filter-group)# filter filter1
Device(config-filter-group)# peer 172.16.0.1 192.168.0.1
Device(config-filter-group)# exit
Device(config)# cts sxp filter-group listener global group2
Device(config)# end
```

例：SXP フィルタリングの有効化

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# cts sxp filter-enable
Device(config)# end
```

例：デフォルトルールまたはキャッチオールルールの設定

次に、すべての IPv4 および IPv6 アドレスに対応するバインドを許可するデフォルトのプレフィックスルールを作成する例を示します。

```
Device(config)# cts sxp filter-list filter1
Device(config-filter-list)# permit ipv4 10.0.0.0/0
Device(config-filter-list)# deny ipv6 2001:db8::1/0
```

次に、すべての SGT に対応するバインドを許可するデフォルトの SGT ルールを作成する例を示します。

```
Device(config)# cts sxp filter-list filter_1
Device(config-filter-list)# permit sgt all
```

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの確認

設定を確認するには、次のコマンドを使用します。

debug cts sxp filter events コマンドは、フィルタリストおよびフィルタグループの作成、削除、更新に関連するイベントをログに記録するために使用されます。このコマンドは、フィルタリングプロセスの一致アクションに関連するイベントをキャプチャするためにも使用されます。

```
Device# debug cts sxp filter events
```

次に、SXP スピーカーのフィルタグループを表示する **show cts sxp filter-group speaker** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts sxp filter-group speaker group1
  Filter-group: group1
  Filter-name: filter1
  Peer-list: 172.16.0.1 192.168.0.1
```

次に、SXP スピーカーのリスナーグループを表示する **show cts sxp filter-group listener** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts sxp filter-group listener

Global Listener Filter: Not configured
  Filter-group: group1
  Filter-name: filter1
  Peer-list: 172.16.0.1 192.168.0.1
  Filter-group: group2
  Filter-name: filter1
  Peer-list: 192.0.2.1, 198.51.100.1, 203.0.113.1
```

次に、SXP スピーカーのフィルタグループに関する詳細情報を表示する **show cts sxp filter-group speaker detailed** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts sxp filter-group speaker group1 detailed

Filter-group: group1
Filter-name: filter1
Filter-rules:
  10 deny sgt 30
  20 deny prefix 10.1.0.0/16
  30 permit sgt 60-100
Peer-list: 172.16.0.1 192.168.0.1
```

次に、設定されたすべてのフィルタグループに関する情報を表示する **show cts sxp filter-group** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts sxp filter-group

Global Listener Filter: Not configured
Global Speaker Filter: Not configured

Listener Group:
  Filter-group: group1
  Filter-name: filter1
  Peer-list: 172.16.0.1 192.168.0.1
  Filter-group: group2
  Filter-name: filter1
  Peer-list: 192.0.2.1, 198.51.100.1, 203.0.113.1

Speaker Group:
  Filter-group: group3
  Filter-name: filter1
  Peer-list: 172.16.0.1 192.168.0.13
  Filter-group: group2
  Filter-name: filter1
  Peer-list: 192.0.2.1, 198.51.100.1, 203.0.113.1
```

次に、設定されたすべての SXP フィルタグループに関する詳細情報を表示する **show cts sxp filter-group detailed** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts sxp filter-group detailed

Global Listener Filter: Configured
  Filter-name: global1
  Filter-rules:
    10 deny 192.168.0.13/32
    20 deny sgt 100-200

Global Speaker Filter: Configured
  Filter-name: global2
  Filter-rules:
    10 deny 192.168.0.13/32
    20 deny sgt 100-200

Listener Group:
  Filter-group: group1
  Filter-name: filter1
  Filter-rules:
```

```
10 deny sgt 30
20 deny prefix 172.16.0.0/16
30 permit sgt 60-100
Peer-list: 172.16.0.1, 192.168.0.13

Filter-group: group2
Filter-name: filter1
Filter-rules:
10 deny sgt 30
20 deny prefix 172.16.0.0/16
30 permit sgt 60-100
Peer-list: 192.0.2.1, 198.51.100.1, 203.0.113.1

Speaker Group
Filter-group: group3
Filter-name: filter1
Filter-rules:
10 deny sgt 30
20 deny prefix 172.16.0.0/16
30 permit sgt 60-100
Peer-list: 10.10.10.1, 172.16.0.1, 192.168.0.13

Filter-group: group2
Filter-name: filter1
Filter-rules:
10 deny sgt 30
20 deny prefix 172.16.0.0/16
30 permit sgt 60-100
Peer-list: 192.0.2.1, 198.51.100.1, 203.0.113.1
```

SXP フィルタリングの syslog メッセージ

SXP フィルタリングの syslog メッセージは、フィルタリングに関連するさまざまなイベントを示すために生成されます。

フィルタルールの syslog メッセージ

単一のフィルタに設定できるルールの最大数は 128 です。単一のフィルタに設定されているフィルタルールの数が制限の 20% 増加するたびに、次のメッセージが生成されます。

```
CTS SXP filter rules exceed %[ ] threshold. Reached count of [count] out of [max] in filter [filter-name].
```

単一のフィルタに設定されているルールの数が、フィルタリストに許可されているルールの最大数の 95% に達すると、次のメッセージが生成されます。

```
CTS SXP filter rules exceed [ ] threshold. Reached count of [count] out of [max] in filter [filter-name].
```

次のメッセージは、単一のフィルタで設定されたルールの数が許可されたルールの最大数に達し、それ以上ルールを追加できない場合に生成されます。

```
Reached maximum filter rules. Could not add new rule in filter [filter-name]
```

フィルタリストの syslog メッセージ

設定できるフィルタリストの最大数は256です。設定されているフィルタリストの数がこの制限の 20% 増加するたびに、次のメッセージが生成されます。

```
CTS SXP filter rules exceed %[ ] threshold. Reached count of [count] out of [max] in filter [filter-name].
```

設定されているフィルタリストの数が、許可されたフィルタリストの最大数の 95% に達すると、次のメッセージが生成されます。

```
CTS SXP filter rules exceed %[ ] threshold. Reached count of [count] out of [max]
```

次のメッセージは、設定されているフィルタリストの数が許可されたフィルタリストの最大数に達し、それ以上フィルタリストを追加できない場合に生成されます。

```
Reached maximum filter count. Could not add new filter
```

IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリングの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリング	IP プレフィックスと SGT ベースの SXP フィルタリング機能は、高い IP-SGT バイン드의拡張性の問題を解決するためのフィルタリングメカニズムを提供します。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 10 章

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポート

- [Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポート \(119 ページ\)](#)

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポート

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートでは、Flexible Netflow (FNF) フローレコード内の Cisco TrustSec フィールドをサポートし、Cisco TrustSec 導入の標準から外れた動作のモニタ、トラブルシューティング、および特定を支援します。

このモジュールでは、Cisco TrustSec と FNF のインタラクションについてと、NetFlow バージョン 9 フローレコードの Cisco TrustSec フィールドを設定しエクスポートする方法を説明します。

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの制約事項

- FNF レコードでエクスポートされるセキュリティグループタグ (SGT) 値は、次のシナリオでは 0 になります。
 - 対応するパケットは、信頼されたインターフェイスから、0 の SGT 値とともに受信します。
 - 対応するパケットは SGT なしで受信します。
 - IP-SGT ルックアップ中に SGT が検出されません。(パケットが SGT なしで受信されるため、SGT は同じパケット内に見つかりません)。
 - フローレコードに SGT と接続先グループタグ (DGT) のフィールド (またはこの 2 つのどちらかのフィールドだけ) が含まれる場合、両方の値を適用できないとしても、SGT と DGT に値 0 を設定したフローが作成されます。フローレコードには、SGT および DGT フィールドと一緒に、送信元および宛先 IP アドレスが含まれる必要があります。

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートに関する情報

Flexible NetFlow の Cisco TrustSec フィールド

FNF フローレコード内の Cisco TrustSec フィールド、送信元 SGT および宛先 DGT は、管理者によるフローとアイデンティティ情報の関連付けに役立ちます。ネットワークエンジニアは、これにより、顧客がネットワークリソースおよびアプリケーションリソースをどのように利用しているのかについて詳しく理解できます。この情報を使用して、潜在的なセキュリティやポリシーの違反を検出して解決するために、アクセスおよびアプリケーションリソースを効率的に計画して割り当てることができます。

Cisco TrustSec フィールドは入力/出力 FNF、ユニキャスト/マルチキャストトラフィックでサポートされています。

次のテーブルに、Cisco TrustSec 用の NetFlow バージョン 9 の企業固有フィールドタイプを示します。これは、Cisco TrustSec の送信元/宛先 SGT の FNF テンプレートで使用されます。

フローフィールドタイプ	説明
CTS_SRC_GROUP_TAG	Cisco TrustSec 送信元 SGT
CTS_DST_GROUP_TAG	Cisco TrustSec 宛先 SGT

FNF フローレコードで既存の一致するフィールドに加えて、Cisco TrustSec フィールドが設定されます。次の設定を使用して、Cisco TrustSec フローオブジェクトをキーフィールドまたは非キーフィールドとして FNF フローレコードに追加し、パケット用の送信元と宛先の SGT を設定します。

match flow cts {source | destination} group-tag コマンドは、キーフィールドとして Cisco TrustSec フィールドを指定するため、対応するフローレコード以下で設定されます。キーフィールドはフローを差別化するものです。各フローには、一連の一意の値が設定されています。フローレコードをフローモニタで使用するには、1 つ以上のキーフィールドが必要になります。送信元 SGT、宛先 SGT、またはその両方に同時に **match** コマンドを設定できます。

フローレコードは、フローモニタ下で設定され、フローモニタはインターフェイスに適用されます。FNF データをエクスポートするには、フローエクスポートを設定し、フローモニタ以下に追加する必要があります。

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの設定方法

次のセクションでは、Cisco TrustSec フィールドの FNF エクスポートを構成するさまざまなタスクについて説明します。

フローレコードのキーフィールドとしての Cisco TrustSec フィールドの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	flow record record-name 例： Device(config)# flow record cts-record-ipv4	FNF フローレコードを作成するか、または既存の FNF フローレコードを変更して、Flexible NetFlow フローレコード コンフィギュレーションモードを開始します。 • このコマンドでは、既存のフローレコードを変更することもできます。
ステップ 4	match ipv4 protocol 例： Device(config-flow-record)# match ipv4 protocol	(任意) フローレコードのキーフィールドとして IPv4 プロトコルを設定します。
ステップ 5	match ipv4 source address 例： Device(config-flow-record)# match ipv4 source address	(任意) IPv4 送信元アドレスをフローレコードのキーフィールドとして設定します。
ステップ 6	match ipv4 destination address 例： Device(config-flow-record)# match ipv4 destination address	(任意) IPv4 宛先アドレスをフローレコードのキーフィールドとして設定します。
ステップ 7	match transport source-port 例： Device(config-flow-record)# match transport source-port	(オプション) フローレコードのキーフィールドとして、トランスポート送信元ポートを設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	match transport destination-port 例 : <pre>Device(config-flow-record)# match transport destination-port</pre>	(オプション) フローレコードのキーフィールドとして、トランスポート宛先ポートを設定します。
ステップ 9	match flow direction 例 : <pre>Device(config-flow-record)# match flow direction</pre>	(オプション) フローがモニタされる方向をキーフィールドとして設定します。
ステップ 10	match flow cts {source destination} group-tag 例 : <pre>Device(config-flow-record)# match flow cts source group-tag</pre> <pre>Device(config-flow-record)# match flow cts destination group-tag</pre>	FNF フローレコード内のレコードのキーフィールドとして、Cisco TrustSec の送信元グループタグまたは接続先グループタグを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> • 入力 : <ul style="list-style-type: none"> • 着信パケットでは、ヘッダーがある場合、SGT にはヘッダーと同じ値が反映されます。値がない場合は、0 が示されます。 • DGT 値は入力ポートの SGACL 設定に依存しません。 • 出力 : <ul style="list-style-type: none"> • propagate-sgt コマンドまたは Cisco TrustSec のどちらかが出力インターフェイス上で無効化されていると、SGT は 0 になります。 • 発信パケットで、SGT または DGT に対応する SGACL 設定が存在すれば、DGT は 0 以外の数値になります。 • SGACL が出力ポートまたは VLAN で無効化されているか、またはグローバル SGACL の適用を無効化されている場合、DGT は 0 になります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 11	end 例 : Device (config-flow-record) # end	Flexible NetFlow フロー レコード コンフィギュレーション モードを終了して、特権 EXEC モードに戻ります。

NetFlow での SGT 名のエクスポートの設定

フローエクスポートごとに、1つの宛先のみがサポートされます。複数の宛先にデータをエクスポートする場合は、複数のフローエクスポートを設定してフローモニタに割り当てる必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	flow exporter <i>exporter-name</i> 例 : Device (config) # flow exporter EXPORTER-1	フローエクスポートを作成するか、または既存のフローエクスポートを変更して、Flexible NetFlow フローエクスポート コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	destination {<i>ip-address</i> <i>hostname</i>} [vrf <i>vrf-name</i>] 例 : Device (config-flow-exporter) # destination 172.16.10.2	エクスポートの宛先システムの IP アドレスまたはホスト名を指定します。
ステップ 5	option cts-sgt-table [timeout <i>seconds</i>] 例 : Device (config-flow-exporter) # option cts-sgt-table timeout 1200	エクスポートの SGT ID-to-name テーブルオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> このオプションにより、FNFはSGTをセキュリティグループ名にマッピングする Cisco TrustSec 環境データテーブルをエクスポートできます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	end 例 : Device(config-flow-exporter)# end	Flexible NetFlow フロー エクスポート コンフィギュレーション モードを終了して、特権 EXEC モードに戻ります。

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの設定例

次のセクションでは、Cisco TrustSec フィールドの FNF エクスポートの設定に関する例を示します。

例：フローレコードのキーフィールドとしての Cisco TrustSec フィールドの設定

次の例は、Cisco TrustSec フロー オブジェクトを、IPv4 Flexible NetFlow フローレコードのキーフィールドとして設定する方法を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# flow record cts-record-ipv4
Device(config-flow-record)# match ipv4 protocol
Device(config-flow-record)# match ipv4 source address
Device(config-flow-record)# match ipv4 destination address
Device(config-flow-record)# match transport source-port
Device(config-flow-record)# match transport destination-port
Device(config-flow-record)# match flow direction
Device(config-flow-record)# match flow cts source group-tag
Device(config-flow-record)# match flow cts destination group-tag
Device(config-flow-record)# end
```

例：NetFlow での SGT 名のエクスポートの設定

次に、NetFlow で SGT 名のエクスポートを設定する例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# flow exporter EXPORTER-1
Device(config-flow-exporter)# destination 172.16.10.2
Device(config-flow-exporter)# option cts-sgt-table timeout 1200
Device(config-flow-exporter)# end
```

Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポート	Cisco TrustSec フィールドの Flexible NetFlow エクスポートでは、FNF フローレコード内の Cisco TrustSec フィールドをサポートし、Cisco TrustSec 導入の標準から外れた動作のモニタ、トラブルシューティング、および特定を支援します。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 11 章

TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送

この機能により、ルータのインターフェイスは Cisco TrustSec を手動で有効化できるようになるため、ルータはセキュリティ グループ タグ (SGT) を、Cisco TrustSec ヘッダー内でネットワーク全体に運ばれるパケットに挿入できます。

- [TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送の前提条件 \(127 ページ\)](#)
- [TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送に関する情報 \(128 ページ\)](#)
- [TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送の設定方法 \(128 ページ\)](#)
- [例 : TrustSec SGT の処理 : インターフェイスでの L2 SGT のインポジションと転送の手動による有効化 \(131 ページ\)](#)
- [TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送の機能履歴 \(132 ページ\)](#)

TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送の前提条件

Cisco Trustsec SGT の処理 : L2 SGT インポジションと転送の機能を実装する前に、次の前提条件で Cisco Trustsec ネットワークを確立する必要があります。

- すべてのネットワーク デバイス間が接続されていること。
- Cisco Secure Access Control System (ACS) 5.1 が、Cisco Trustsec -SXP ライセンスで動作していること
- ディレクトリ、DHCP、DNS、認証局、およびNTPサーバがネットワーク内で機能すること。
- 異なるルータで異なる値に **retry open timer** コマンドを設定します。

TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送に関する情報

Cisco TrustSec (CTS) は、信頼できるネットワークデバイスのドメインを確立することによってセキュアネットワークを構築します。ドメイン内の各デバイスは、そのピアによって認証されます。ドメイン内のデバイス間リンクでの通信は、暗号化、メッセージ整合性検査、データパスリプレイ防止メカニズムを組み合わせたセキュリティで保護されます。

TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送の機能により、ルータのインターフェイスは CTS を手動で有効化できるようになるため、ルータはセキュリティ グループ タグ (SGT) を、CTS ヘッダー内でネットワーク全体に運ばれるパケットに挿入できます。

セキュリティ グループおよび SGT

セキュリティ グループは、アクセス コントロール ポリシーを共有するユーザ、エンドポイント デバイス、およびリソースのグループです。セキュリティ グループは管理者が ACS で定義します。新しいユーザおよびデバイスが Cisco TrustSec (CTS) ドメインに追加されると、認証サーバは、適切なセキュリティグループにこれらの新しいエンティティを割り当てます。CTS は各セキュリティグループに、その範囲が CTS ドメイン内でグローバルな一意のセキュリティグループ番号 (16 ビット) を割り当てます。ルータ内のセキュリティグループの数は、認証されたネットワーク エンティティの数に制限されます。セキュリティグループ番号は、手動で設定する必要はありません。

デバイスが認証されると、CTS はそのデバイスから発信されるすべてのパケットに、デバイスのセキュリティグループ番号が含まれている SGT をタグ付けします。タグ付けされたパケットはネットワークを通じて CTS ヘッダーで SGT を運びます。SGT は CTS ドメイン全体で送信元の許可を特定する単一ラベルです。SGT には送信元のセキュリティグループが含まれるため、送信元として特定されます。宛先デバイスには、宛先グループタグ (DGT) が割り当てられます。



(注) CTS パケット タグには、宛先デバイスのセキュリティ グループ番号は含まれません。

TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送の設定方法

このセクションでは、L2 SGT のインポジションと転送を設定する例を示します。

TrustSec SGT の処理 : インターフェイスでの L2 SGT のインポジションと転送の手動による有効化

次の手順を実行して、Cisco TrustSec (CTS) のデバイス上のインターフェイスを手動で有効化します。これにより、デバイスは、ネットワーク全体で伝播するパケット内のセキュリティグループタグ (SGT) を追加し、スタティック認証ポリシーを実装できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 • パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	interface { GigabitEthernet port Vlan number} 例 : Device(config)# interface gigabitethernet 0	CTS SGT の認証と転送が有効なインターフェイスを開始します。
ステップ 4	cts manual 例 : Device(config-if)# cts manual	CTS SGT 認証と転送のインターフェイスを有効化し、CTS 手動インターフェイス コンフィギュレーションモードを開始します。 (注) サブインターフェイスで cts manual コマンドを有効にするには、Dot1Q タグの追加バイトに対応するように IP MTU サイズを増やす必要があります。これは、Cisco IOS XE リリース 3.17 より前のリリースにのみ適用されます。
ステップ 5	policy static sgt tag [trusted] 例 : Device(config-if-cts-manual)# policy static sgt 100 trusted	SGT の信頼性を定義するタグ付きパケットを使用して、CTS セキュリティグループのスタティック認証ポリシーを設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	end 例 : Device(config-if-cts-manual)# end	CTS 手動インターフェイスコンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードを開始します。
ステップ 7	show cts interface [GigabitEthernet <i>port</i> Vlan <i>number</i> brief summary] 例 : Device# show cts interface brief	インターフェイスの CTS 設定の統計情報を表示します。

インターフェイスでの CTS SGT 伝達の無効化

ピア デバイスが SGT を受信できない場合、次の手順を実行して、インスタンス内のインターフェイスで CTS SGT 伝達を無効化します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none">パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	interface { GigabitEthernet <i>port</i> Vlan <i>number</i> } 例 : Device(config)# interface gigabitethernet 0	CTS SGT の認証と転送が有効なインターフェイスを開始します。
ステップ 4	cts manual 例 : Device(config-if)# cts manual	CTS SGT の承認と転送用のインターフェイスを有効化します。 CTS 手動インターフェイスコンフィギュレーションモードは、CTS パラメーターを設定できる場合に開始されます。
ステップ 5	no propagate sgt 例 : Device(config-if-cts-manual)# no propagate sgt	ピア デバイスが SGT を受信できない状況では、インターフェイスの CTS SGT 伝達を無効化します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>(注) CTS SGT 伝達はデフォルトで有効化されています。ピアデバイスで CTS SGT 伝達を再度オンにする必要がある場合、propagate sgt コマンドを使用できます。</p> <p>no propagate sgt コマンドが開始されると、SGT タグは L2 ヘッダーに追加できなくなります。</p>
ステップ 6	<p>end</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-if-cts-manual)# end</pre>	CTS 手動インターフェイス コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードを開始します。
ステップ 7	<p>show cts interface [GigabitEthernetport Vlan number brief summary]</p> <p>例 :</p> <pre>Device# show cts interface brief Global Dot1x feature is Disabled Interface GigabitEthernet0: CTS is enabled, mode: MANUAL IFC state: OPEN Authentication Status: NOT APPLICABLE Peer identity: "unknown" Peer's advertised capabilities: "" Authorization Status: NOT APPLICABLE SAP Status: NOT APPLICABLE Propagate SGT: Disabled Cache Info: Cache applied to link : NONE</pre>	インターフェイスで CTS SGT 伝達が無効化されていることを確認するため、CTS 設定の統計情報を表示します。

例 : TrustSec SGT の処理 : インターフェイスでの L2 SGT のインポジションと転送の手動による有効化

例 :

次に、**show cts interface brief** コマンドの出力例を示します。

```
Device# show cts interface brief
```

```

Interface GigabitEthernet0/1/0
  CTS is enabled, mode:      MANUAL
  Propagate SGT:            Enabled
  Static Ingress SGT Policy:
    Peer SGT:                100
    Peer SGT assignment:    Trusted

```

TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送の機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	TrustSec SGT の処理 : L2 SGT のインポジションと転送	この機能により、ルータのインターフェイスは Cisco TrustSec を手動で有効化できるようになるため、ルータは SGT を、Cisco TrustSec ヘッダー内でネットワーク全体に運ばれるパケットに挿入できます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。



第 12 章

エンドポイントアドミッションコントロールの設定

このモジュールでは、TrustSec ネットワークでの認証および許可のためのエンドポイントアドミッションコントロール（EAC）のアクセス方式について説明します。

- [エンドポイントアドミッションコントロールの概要（133 ページ）](#)
- [例：Example: 802.1X 認証の設定（134 ページ）](#)
- [例：MAC 認証バイパスの設定（134 ページ）](#)
- [例：Web 認証プロキシの設定（134 ページ）](#)
- [例：Flexible Authentication \(FlexAuth; フレキシブル認証\) シーケンスおよびフェールオーバー コンフィギュレーション（135 ページ）](#)
- [802.1X ホストモード（135 ページ）](#)
- [認証前オープンアクセス（136 ページ）](#)
- [例：DHCP スヌーピングおよび SGT の割り当て（136 ページ）](#)
- [エンドポイントアドミッションコントロールの機能履歴（136 ページ）](#)

エンドポイントアドミッションコントロールの概要

TrustSec ネットワークでは、パケットはネットワークへの入力ではなく出力でフィルタリングされます。TrustSec エンドポイント認証では、TrustSec ドメイン（エンドポイントの IP アドレス）にアクセスするホストは DHCP スヌーピングおよび IP デバイストラッキングによってアクセスデバイスでセキュリティグループタグ（SGT）に関連付けられます。アクセスデバイスは、継続的に更新される送信元 IP と SGT のバインディングテーブルを維持する TrustSec ハードウェア対応出力のデバイスに、SXP 経由でそのアソシエーション（バインド）を送信します。パケットは、セキュリティグループ ACLS（SGACL）を適用することにより、TrustSec ハードウェア対応デバイスによって出力でフィルタリングされます。

認証および許可のためのエンドポイントアドミッションコントロール（EAC）アクセス方式には、次のものがあります。

- 802.1X ポートベースの認証
- MAC 認証バイパス（MAB）

- Web 認証 (WebAuth)

すべてのポートベース認証は、`authentication` コマンドでイネーブルにできます。各アクセス方式はポート単位で個別に設定する必要があります。複数の認証モードが設定され、アクティブ方式が失敗すると柔軟な認証シーケンスおよびフェールオーバー機能により管理者は、フェールオーバーおよびフォールバック シーケンスを指定することができます。802.1X ホストモードは、802.1X ポートごとに接続できるエンドポイントのホスト数を決定します。

例 : Example: 802.1X 認証の設定

次に、ギガビットイーサネットポートでの基本的な 802.1x の設定例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# dot1x system-auth-control
Device(config)# interface GigabitEthernet2/1
Device(config-if)# authentication port-control auto
Device(config-if)# dot1x pae authenticator
```

例 : MAC 認証バイパスの設定

MAC 認証バイパス (MAB) は 802.1X 対応ではないホストまたはクライアントが 802.1X をイネーブルにしたネットワークに参加できるようにします。MAB をイネーブルにする前に、802.1X 認証をイネーブルにする必要はありません。

次の例では、基本的な MAB 設定の例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# interface GigabitEthernet2/1
Device(config-if)# authentication port-control auto
Device(config-if)# mab
```

MAB 認証の設定の詳細については、アクセスデバイスのコンフィギュレーションガイドを参照してください。

例 : Web 認証プロキシの設定

Web 認証プロキシ (WebAuth) は、ユーザが Web ブラウザを使用して、アクセスデバイスの Cisco IOS Web サーバ経由で Cisco Secure ACS にログインクレデンシャルを送信できるようにするものです。WebAuth は独立してイネーブルにできます。これは、802.1X または MAB の設定は必要ではありません。

次の例では、ギガビットイーサネットポートでの基本的な WebAuth 設定の例を示します。


```
Device(config)# ip http server
Device(config)# ip access-list extended POLICY
Device(config-ext-nacl)# permit udp any any eq bootps
Device(config-ext-nacl)# permit udp any any eq domain
Device(config)# ip admission name HTTP proxy http
Device(config)# fallback profile FALLBACK_PROFILE
Device(config-fallback-profile)# ip access-group POLICY in
Device(config-fallback-profile)# ip admission HTTP
Device(config)# interface GigabitEthernet2/1
Device(config-if)# authentication port-control auto
Device(config-if)# authentication fallback FALLBACK_PROFILE6500(config-if)#ip access-group
POLICY in
```

例：Flexible Authentication (FlexAuth; フレキシブル認証) シーケンスおよびフェールオーバー コンフィギュレーション

Flexible Authentication (FlexAuth; フレキシブル認証) シーケンス (FAS) を使用すると、802.1X、MAB、および WebAuth 認証方式用にアクセスポートを設定でき、1つ以上の認証方式が使用できない場合にフォールバックシーケンスを指定できます。デフォルトのフェールオーバーシーケンスは次のとおりです。

- 802.1X ポートベースの認証
- MAC 認証バイパス
- Web 認証

レイヤ 2 認証はレイヤ 3 の認証前に常に実行されます。つまり、802.1X と MAB は WebAuth の前に発生する必要があります。

次の例では、MAB、dot1X および WebAuth の順で認証シーケンスを指定します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# interface gigabitEthernet 2/1
Device(config-if)# authentication order mab dot1x webauth
Device(config-if)# ^Z
```

FAS の詳細については、『[Flexible Authentication Order, Priority, and Failed Authentication](#)』を参照してください。

802.1X ホストモード

ポート単位で 4 種類の分類モードを設定できます。

- Single Host : 1 個の MAC アドレスを持つインターフェイス ベースのセッション

- Multi Host : ポートごとに複数の MAC アドレスを持つインターフェイスベースのセッション
- Multi Domain : MAC + ドメイン (VLAN) セッション
- Multi Auth : ポートごとに複数の MAC アドレスを持つ MAC ベースのセッション

認証前オープンアクセス

認証前オープンアクセス機能は、ポートの認証の実行前に、クライアントとデバイスがネットワークアクセスを取得できるようにするものです。このプロセスが主に、PXE がタイムアウトする前にデバイスがネットワークにアクセスし、サブリカントが含まれる可能性のあるブート可能イメージをダウンロードする必要がある PXE のブートのシナリオで必要です。

例 : DHCP スヌーピングおよび SGT の割り当て

認証プロセス後は、デバイス認証が発生します (たとえば、ダイナミック VLAN 割り当て、ACL プログラミングなど)。TrustSec ネットワークの場合、セキュリティグループタグ (SGT) は Cisco ACS のユーザ コンフィギュレーションごとに割り当てられます。SGT はそのエンドポイントから DHCP スヌーピングおよび IP デバイストラッキング インフラストラクチャを使用して送信されたトラフィックにバインドされます。

次の例では、アクセスデバイスで DHCP スヌーピングおよび IP デバイストラッキングを有効にします。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Enter configuration commands, one per line. End with CNTL/Z.
Device(config)# ip dhcp snooping
Device(config)# ip dhcp snooping vlan 10
Device(config)# no ip dhcp snooping information option
Device(config)# ip device tracking
```

エンドポイントアドミッションコントロールの機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Fuji 16.9.2	エンドポイントアドミッションコントロール	Cisco TrustSec ネットワークでは、パケットはネットワークへの入力ではなく出力でフィルタリングされます。 Cisco TrustSec エンドポイント認証では、Cisco TrustSec ドメイン（エンドポイントの IP アドレス）にアクセスするホストは DHCP スヌーピングおよび IP デバイストラッキングによってアクセスデバイスで SGT に関連付けられます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。

